皿皿鄉談序

無本之學。構虛之說。稗官以傳千稗官。幻緣化境。追風捕影。其書雖奇而妙。君子不取也。謂之無益於世教。可以廢焉。設夫深窓茶酒之餘。一置之座右。披卷以讀。乃長夜之睡魔。千秋之愁陣。可袪可排。況博達明知之士。游談以解憑。類情爲喻。勸懲莫捷於此。昔西方聖人。緣業以諭愚俗。東方曼倩。詼諧能諷人主。夫方便之與滑稽。指旨異而智一撮。其言一出于世。朝野靡然從之。於是乎稗官之書。可施可行。是予所以有此撰也。雖然。學術之源有淺深。而巧拙判焉。智搔之發有遲速。而長短見焉。夫生知之學。雖聖不敢自處。只困學之知。琢磨之功。可以到其境矣。豈不亦難哉。昔嘗有其人。胷蓄天地之秀。腹藏萬卷之書。片言隻字。可以導前途之迷。可以發後學之癡。而不得彰之于廟堂之上。徒發憤於翰墨。陽寫世態情致。陰德奸險淫邪。自鏡其智以老死于閭巷。乃胡元施耐菴是也。嗚呼可惜焉。

天朝以不設稗官。然稗官自有之。在古伊興部烏程。與謝郡司倩景誠等之書。固

其所也而其流遠波及閭閻復有勢源華衣諸篇可謂稗史大拇小說巨擘也傳至數百年之後愛玩不已聞者讀之讀者好之於是乎稗官之書可施可行而風俗僥醜好奇走新非但愛玩之乃擬彼做此雖作者亦復衆矣物衆必有滓解也輕才亦好之而所著之書年年數種筆不停綴稿不暇易而其謀刻者亦唯愛其速而不嫌其拙彼則獲其利猶有餘贏予則有虛聞竟無寸功雖自知其非勢不得已如此審構思僅數日彌速滋拙然書賈猶遲之而誅求太急吁賈竪頗有智術彼之與我嗜欲鉾盾與夫不龜手之藥宋吳異其所用者又何異焉古人嘗有言智之遲速相去非啻千萬里軍志有之兵聞拙速不聞巧之久矣速而無巧久愈拙者也可見古人善智之拙速書賈亦能知之矣豈偶然哉即書之卷端

文化十年冬十月

簑笠陳人解譔

べこ四
天目法印浄弁
のけ四

正永弾正時綱
雅楽頭
真吉
蛍の源
真角
紅橋妻舞衣
一應齋国

特11
841

○第壹　駒の山わかれに比ふ　唐綾縅子が焉族の横難

高松院足利義時公將軍たりし時武家第一の執權ハ右京大夫高國と左京大夫晴元なりこれを京都の両管領といひけり抑々高國は式部大夫政春が子なりしを前管領政元朝臣養ひとりて繼嗣よせトシ又晴元ハ前管領澄元朝臣の嫡子なり共に將軍の一族にして細谷川のすゑ廣く威權四海に洋溢して富貴はおのがまゝなれども両雄ハ並立ず高國晴元確執して合戰しば〳〵なりしかば京師一日も靜ならず時に享祿四年夏六月攝津國天王寺の戰ひよ高國いたく打負つゝ尼ヶ崎のほとりよて忽ち自害したりしかば頼究たる兵士等討るゝもあり落るもありておのがさま〳〵になりにけりかくて後晴元ハ權を三好に奪れて三宅の城を追落され丹波路に呻吟嵯峨野に躲れ近江の湖田に漂泊して在がひもなき世をわびえらに永祿のハじめの比旅宿に病て身まかりつ京都の管領てゝよ絶たりさる程よ高國が家臣等ハ憤いに生殘れるも家を毀ふ狗の如く彼此よ徘徊て飯だ

にあさりかねたりしその中に唐綿素二郎宗紹といふものありけりこれが人となりを尋れば父ハ神州の皇民ならず異朝明の弘治の比朱綿と呼れしものにして本貫ハ鄞人なり後柏原天皇の御宇永正のころよやありけん商人船に便船ゑて我皇國に投化し時姓名を改めて宋素卿と名告ッ、聽て華洛へ召のぼされて管領政元の第に居り元來文字に暗からず口才あるものなれば政元おもく歎待てをり〳〵吹噓したりしかば素卿ハ遂に望足りて將軍義澄公よつかへ奉つりこゝにて妻を娶りッ、男兒ひとり產せたりその子は今の素二郎とかくて歲逝物換りて義澄の嫡男義晴（時よ十一才）將軍よ任ぜられ政元の養子高國管領をうけ給ハりて世は新しうなりにけれど累年の兵亂よ華洛ハいたく荒果て公私の財用足ざれば高國をさ〳〵思慮をめぐらし防長豐筑の守護なりし大內義興に相譚つゝ市賈船を渡さんとて宋素卿よ書翰を齎し明國へ遣す程よ義興も亦宗設といふものを使者として齊一郡處へ赴かせゑよ其船素卿に先だちて唐山寧波府よ着ゑかば素卿ハ安からぬこと也とて前後を爭へどもいふがひなしよりて終に府吏よ賂ふて先よ謁するを得て稽積怒を散しけりしかるに素卿ハ唐山に道したる妻もあり一子あり鄞に日本を出るとき今の妻子よ泣まつハれし別離の涙ふりかはり彼等ハいかゞなりけんと思へば哀しくなつかしくかゝる便宜よあハで歸らば又あふよしはありがたし見まくはしやとしのび〳〵にその在所をたづぬるに前妻は大かたならぬ物思ひに身まかりつその子ハいたく落魄て如此〳〵の處に居りこゝを去ると聞くもあらずと告るものありしかば素卿は縮よ獸びてその夜さり招きよせ見れば思ふにいやまして面わすれせし親と子が名告をしつゝ手を拿て忍びもあへずもろ共よよゝとはなけて壁立られぬ是や水無月の杜鵑血を吐く思ひ今更にかへすよしなき母のと身の憂事を通宵子に聞るゝ親はなほ狹捨山の月ならで慰めかねつ身ひとつの秋かとゞ思ふ袖の露こゝと彼處へふり沃ぐ和と涙の撫子にいづれ疎はあらねどもこの地には留りがたしその故は箇樣〳〵と委細に說しらせゑをはやくも人に聞れけん絳立地に露顯して親子もろ共獄舍に繫れその顚末を責問れしかば素卿は朱綿といひし者にて弘治（明の孝宗の年號）の比遠く東へ走りしよし事逐にかくれなし加之らず迹を暗し名を變て高國が使節と稱し來着の刻み同伴と前後を爭ふて府を闖し府吏よ賂ふて至尊に咫尺し奉つりしその罪尤も輕からずとて素卿はさらなりその子さへ首を刎られしこそ無

慧なれこれは是後柏原天皇の大永三年明の武宗皇帝の嘉靖二年のとなりきかゝりしかば大内が使者宗設を勞して功なく辛して歸り來つ事の趣きを演しかば直に華洛へ聞にけりされば日本で儲たる素卿が妻その子素二郎はやがて歸るとしりながら生別れすら哀ふきに無常の風が便りして世になくなりし人のうへ聞くよ胸のみつぶれッ、天よ叫び地に倒れ泣より外にすべもなしかゝる歎きを母親は病わづらふこと三とせあまり是さへ黄泉の客よなりぬ此とき素二郎十九歳させる才藝あるものならねどさすがよ親の子なればとて高國年來これを扶持し亡母の果忌たる比召出して近習とし父の姓氏を表りて唐綿素二郎宗卿と名告らするに素二郎は大かたならぬ恩よ感し義に仗て他事もなく仕しかば高國ますく不便に思ひてみづからこれを媒妁し譜代の家臣天目隼人盛孝が女見「名を片埜と呼るゝを妻せしに明年より三とせが程に女の子ふたりを擧けつゝ長女を唐草次を紅皿と名づけたり寔に人間の吉凶禍福ハ絆へる繩の如し素二郎は出奔しておのが随意擧動の物足らずとも思はざりしよ天王寺の軍敗れて高國尼ケ崎にて自害せし日岳父天目隼人はさらなり義に依り恥をしるものは主の首をとらせじとて追ひ來る敵と血戰し衆彼此よて斃れにきかゝれば唐綿素二郎はわきて高國恩顧のものゝ戰場よ扈從しながら主の自殺を外に見て生てかへらんとは思はざりしが元來勇あるものならねば思ふさまなる戰ひは要せず小鬢よ浸潤を負たるのみ崩れて逃る雑兵等よ誘引れて不思議に存命たりけれども大將既よ斃れては殘黨遂に全からず巣を破られし狩場の雉他林を求ッ、有繋よ羞て京へ歸らず山城國伏見の里に隅なる住所を卜て妻と女見ども召とりつとかくする程に素二郎が金嚢は愈たりいつまでか拾てをらん住も果べき宿ならずと深て思へば今更よるべの島もなき船の海に漂ふこゝちしてせん術しらず月日を送るに享祿四年は墓なく暮て明れば天文と改元あり今茲も春過夏去て秋はや殘りすくなよなりぬ素二郎ハ六年以來ゆくりなく管領の出頭人になりしかば富ざるにあらねどもかゝる瀬に立つ今日に及て貯祿とて多くもあらぬを一年あまりの僑居よ大かた用ひ果したり空して食へば山も空し羅竭疫絶るに及びて往悔其處に立がたしされば母の親族妻の黨も去歳の夏尼ケ崎よて僉討死したり去かば談合すべき人もなしいかにせましと額を病する良人の嘆息さもこそと片埜これを慰めてはとり近く小膝をすゝめさのみハ思ひ屈し給ふな今の世は華

洛より東國は名たゝる武士多かりなどてやはやく思ひたちて彼處へ趣き給ハざるわらハが叔父なる天目法印淨辨ぬしは両部神道の修験者にて年來鴨河原に居たまいしが華洛の兵乱疎まゝとて東國へ趣き給ひしよりはや四年といふけふまでも正しき音耗なけれども今は里見よ身を倚たりと風の便りに聞侍り安房の里見にあらんずらん尋ねてゆかば情なく待さるべうもあらずこはおん身も聚てよりよく知りてゑをはすべき加以らずわらはよ一個の兄もあり生れし時より乳の下よ洲濱ゆでとき疵ありしかば名を洲之助と呼れよきいと駈しさよ緑故を委細には告ざりゑわが兄は總角より雙瞳目交四一年わるきあそびをとして年よ似げなく賭わざよ莫多の銭を失ふと度かさなれば父は怒り母は歎きてもろ共に奇く教訓し給へどもいとしぶとくていふがひおしは博徒に起るといふ長さきも推量らる痴鳴呼の癖者に嗣して家を汚さんより親が手づから撃て棄後やすくすべけれと教因給ふ父の一微理りなれば母は只うち歎くのみ諫かね柒を法師よせばやとてその夜一個の老僕して聚てより法線ある番場の法華堂へ落し遣したまひしかば父は有繋に追し給はずこの時兄は年十二なりかゝりけれども憑ずまに行童にて闘若に在ながらわろきこのみいやまして竟に出家を得も遂ず處と僅に三年よして法華堂を逐電し往方はしれずなりぬ

かば母はます〳〵思ひはそうて瀝よ癌よ血涙と只病着の數そひつ世になき人となり給ひしはわらはが十五の秋なりきされば又兄洲之助は近江の闘若を走りしより年はや夥多經にけれど在所は今に定かならずやゝ年ごろになる隨に具の道に立かへり人なみ〳〵なる心ざまよなり給ひぬるともやあらん親の魂靈の導きにていかで環りもあはんにはわらはが爲には同胞ゑ子どもが爲には叔父なれば憑しきとなからずやはそいとまれかくもあれこゝで餓てはすべもなし里見の叔父公を心あてに安房よ赴き給へかしと具成に勸しかば素二郎聞てうち點頭程遠き親類より近き他人と俗よはいへどそれは平事なる時のとゑ身の憂ときに憑しきは親族にますものなし我も天目法印を聞ざるにあらねども東國のかたとのみ聞て定かならぬよ默止たり里見といへば隱れはなし今の國主は義堯とて安房上總いへばさらなり下總半國を伐從へ特に時めく大諸侯の城下なれば彼人を繋ぬるに便りありさはとてやがて其日より起行の用意しつ今茲五ッと三ッになる唐草紅風を携へて笠よ杖よと呉竹の伏見の里を立去りしは十月の上澣なり東海道は今もなは合城

原なしと聞にしかば近江路に出美濃路に入り岐阻山遠くわけゆけばいと〻露けさ小篠原夜よ宿り日よ歩みいそぐ旅にはあらねども盤纐乏しきよ歩も進みてその月の十三日に上野國甘樂郡荒芽山へ程遠からぬ仁田山里ちかく來つこの時の街道は今の世よいふ古道なれば驛路も間遠くて異なくゆくだに難義なるよ越路の敵軍攻來れりと聞ゆく人よ驚かされて心もとなさいふべうもあらず素二郎は遽へしく唐草を背に負ひ片埡は紅血を懷ろにかき抱き跡に限き前にたちて歩の速びをいそがすに現この遊り只今合戰ありけるにや弓箭械器なんど途のゆくてよ捨たるあり又梅櫻の造花など幾條か遺てあり唐草目ばやくこれを見て彼とりて給へといふかゝる折よも心のどけき童子を賺しかねて父はかの造花両三枝かいとりつゝその一枝を唐草が髻髢に挿又一枝は紅皿が髮たるときとらせんとておのが挿頭よする程にいそぐとすれど冬の日のしぐるゝ天は果敢なく暮てはや黄昏よなりよけり浩處に耳處よ一聲の炮響く程こそあれ人脉うつて崩れ來るを吐嗟とばかり見かへれば老弱男女數百人寄手の軍兵に逐れつゝこなたを投て逃來れりうち圍れては難義と疾走り給へとく素二郎は足よ信して喘々先よたち四五町ばかり走脱けはじめて背後を見かへるに片埡ハ遥迷ふ莊客們に抑留せられて遂よ遠に後れけん喚たつれども應せずその影だにも見るよしなければ忙然として立在折軍兵四五騎追蒐來つ造花を挿頭にせしは仁田山の人ならん似生拘れと呼はるに素二郎ますゝ心ろ慌て一言半句の問答も得せず途を横ぎりて流走れば並松のほとりより又一個の武者衝と出て矢庭に素二郎を拳倒し背より滾落たる唐草を小腋よ抱て跡をも見ずして走去けり素二郎は不意を打れて忽地よ目眩き暫時黒白を別ざりしが息吻かへし身を起し四下を見れば日は暮果て十三日の月鮮かなり當下一個の弱僧此地の者とおぼしきが株よ尻を掛てをり旅人心持はいかにぞやといふに素二郎佶と見て什麽かん僧は何處の人ぞと問ば莞爾とうち咲てわれは題目寺の同宿ゆくりなき領主の滅亡にわが寺修羅の街となりぬよりて寄手の亂妨を避んゑひとりこゝまて來つる折いと痛しき和殿の横難生死不定に打倒され貧たる子さへとられぬる爲体を見るに得堪ずかくは呼活進らせしといふよ素二郎貌を更め原來聖は命の親なり某しは故ありて上總のかたへ趣く者なしかるにこの地の兵亂に妻と稚きものを失ひ今又こゝで六才なる女兒を奪ひとられたりわれハ元來行客にて錐の始末をよくもし

らずされば敵にも身方にもかゝづらふものならぬになどて又かくまでに苛きめにあふよやあらん、紙故をしらし給へといふに法師いうち點頭さおもいるゝも理りなり瑛て聞もや及び給いん當郡仁田山の領主とまうすい安房の里見の一族よ藤人舍連と呼れし武士なり武略に長たる大將なれば越後の國主長尾殿心憎く思いれけん合戰數度に及びしが敵い名にあふ猛將にて軍兵も十倍すなれば戰ふ毎に身方に損ありかくて又越路の敵軍よりすると瑛て聞ねしかば仁田の里見舍連ぬし主從必死と思ひ決め當城い分内陝しこゝよて敵をうけんより要害の地よ籠らんとて三百餘騎を引率玄城を去ると二十餘町砥澤川を前よ當わが題目寺に楯籠りて且く防ぎ戰ふ物から安房より扱の兵のも來ず箭種も既よ射竭しつ今いはや撃て出よき敵と組で死べきこさらば最期をいそげとて主從飲過去帳よ姓名を書遺すに折から祖師の忌なれば佛の御前に飾立たる造花を手よ〳〵取て各々これを簇に挿たりされば春永の梶原が三度の駈にはうらうへなりとも武勇いいかでか劣るべき挿頭の花も佛縁あり來世の先鉾又せんずと異口同音に題目を數十遍唱つゝさて大門を推開き喊と喚て殺て出討つ討れつ戰ひしが大將舍連ぬしはさらなり二百餘騎い討死し落るい百騎に足ざるべしをかるに今和歌を見れば造花を頭に挿たり此故にこそ仁田山の落人ならんと疑いれて妻子を取られ給ひけるその花を掻捨て早く往方を索給へその人よあらざれば命失いるゝまでにい至らじあな苦々しと眞成よ綜の本末説しらずれば素二郎小膝を確と跼さるよし絶てしらざれば稱きものが愛るまに〳〵遁たる花を拾ひて得さをわれさへ挿頭にしたる故この殃危を釀したりといひッ、花をぬきとりて三段に折て遙に投棄もしかん僧よ直偶せずばこの疑ひい解がたけん法號をしらし給へ妻と子どもを索ねて後よ聞若へ參りて再生の歡びをヤさめといへば法師は身を起玄われい出家のことなるよなでふ報を俟ものならんはやく妻子を索給へと云言葉いまだ終らず流箭來たつて法師の眉間へぐさと立しかば苦と一聲叫あへず撞と倒れて氣絶けり素二郎これよ驚き周章て見返れども敵はなし只貝鉦の音遠く聞ねて夥多の人の叫ぶ聲す原來寄手は猶退かず落人を渉獵にこそ任他あれ妻と子の存亡をしる迄は我も此地をやい去ん身の薄命を歎くにも痛しきは此法師ゝ心採老實よ慈善の人と見ながら過世いかなる惡報よてかくい非命よ終けん幽靈後脱魂生菩提彌陀佛々々々と唱へッ、死骸を暫時伏拜み腫を旋らし貝鉦の

苦するかたへ走りッ、妻と女兒を索るに冬の夜なれば月凄て其明きを白昼の如しと見れば彷武若と思しきが稚兒を小腋に抱き北を望て走しるありこれわが女兒に疑ひなきと思へば些も猶豫せず飛ぶが如くに逐ふほどに天にも走る叢雲に月を隠して朦朧たり折こそよけれと刄を引拔き壁をかけッ、後方より鎧の高紐無手と抓て仰さまに引倒せば起んとするを乘し懸てもてる刀をとりなほし胸のあたりを丁と衝く衝伏られて件の武者いたゞ一刀に死でけり浩處に軍兵數十騎彼脱すなと呼りて驀直に競ふて懸勢ひ當るべうもあらざれば素二郎慌忙て轉輾ッ、汐稚兒を掻取いやく脅へゆりあげ命を限りと逃走れば蓬玄かへせと馬を飛して透間もなく追蒐たり敵い騎馬武者わが身い素肌しゝかも背に稚兒を負へば走るに便なくて心ろは前へ進めどもひとッ處よをるかと覺て進退既に究る折中黒の旗翻飄と山風に吹靡かし前面なる林の中より一隊の軍馬走り出関を吐とつくりしかば素二郎は是を見て行先にも此の如く數百の軍兵充滿れば手を束ねて死に就んのみ己なん〳〵と獨言天を仰てうち歎くに前なる夥多の軍兵い素二郎に目を掛ず只今逐來る寄手の武者に會釋もなく突て懸れば寄手の軍兵い思ひがけなく應援兵士來るを見て叫いじとや思ひけん轡を引返し捨鞭打てゞ逃たりける當下此方の軍兵い五六町追討して徐々と引返すに叢雲忽地月を吐て甲夜より尚明かりければ先陣の軍兵等路傍よ立在る素二郎が眷よかゝりし稚兒をつら〳〵見て恙なく在しにけりといひつゝ指し密語て一人驕て列を離れ緑由を告たりけん總大將と思しきが馬の足掻を早め來て見ると亦初の如く滿面よ笑ながら馬より閃り下しかば諸軍兵は隊伍を乱さず兜を脱て蹲踞しつ斯て件の大將は恭々しく素二郎にうち對ひけふを始めの見參なれば名告ずば絶て知れじ某しは安房の老臣平禾彈正時綱なり越路の大軍襲ひ來つれば難義に及ひ給ふよ玄蕤よ仁田山嚴（舍連を云）よりその告あり時綱即ち津田殿（里見義堯をいふ）の仰を承おん旗を賜りッ、一軍よ將として日ならず進發せしかども途遠なれば其期に得合ず着陣のけふに及びて舍連討死し給ふと惜むにもなほ餘あり加以らず幼少をはします姫上のと心もとなく直よ題目寺へ軍馬を進めて敵の屯を追崩しかのおん往方を索る折姫の傅き繼橋梁右衛門職之は既よ數ケ處の深痍を負て道次に倒たりやゝ呼活て是を問舍連主從討死の爲体はさらゝ其身かう深痍を負て心ならずも姫君を敵に奪ひ取れしと告るを末期の一句にて忽地

よ綽斷たり舍連ぬしの討死は今更に悔るも甲斐なしもし姫君をとり復さずば怠慢の罪脱れがたし敵を引すなくひ止よと三方へ部しておん往方を索ッヽ勝誇たる北軍を追走らし圍らず茲で姫君を救ひ奉つりしこそ歡ばしげれ抑々和殿は何人ゾ仁田山殿の御内には未だ面を認ざる人なり名告給へと慇懃に演れば素二郎疑惑て忙しく脊よ負たる稚兒を扛おろし月を燭に始めて見れば吾が女兒にはあらず玄て年の程は四ッか五ッかいたいけしたる姫君なりこゝそも麼にと仰天し惑ふ心を推鎮めて熟々と衆ずるに年紀さへよく似たるよ折柄月は雲隱しておぼろ〳〵と見にまがふ前後よ敵を受しかば吾眼すら暗なりて稚きものを楚とは見とめずそがまゝ負て走りしゝわれながら鈍しげれとこゝよやうやく曉れども腑を嚥のみ悔ても術なゝとばかりにして姫君を正禾に遇與して聯づき斯やんとなき方ざまともしらで救ひしかのが潤命告るも面なきとながら某し原は京家の浪人管領高國に仕たる唐綿素二郎宗卿といふものなり主君滅亡のゝち伏見に閑居し其處よすら仕わびて上總なる妻孥を心あてに此度妻と女兒を携へ此處を投て赴く程にこゝに至つて不憶兵亂に逐迷されて妻と子どもの往方をしらず彼此を索ねたるはじめをいへば箇樣〳〵終りを說ば如此〳〵と題目寺の法師が彼が狂死の爲体其處よりまず〳〵妻子をたづね寄手の軍兵を突伏て思はず姫をとり復せし一五一什を物語れば綱も亦うち驚き原來和殿は旅にて玄て妻と子どもを失はれしよりわが姫君ははからずも危躬を救ハれ給ひしゝ和殿のうへは聞にだにいと痛しきゝながら後悔こゝにたちがたし抑々この姫うへは船姫と稱ようして實は義堯のかん子ゝしかるに舍連ぬし子ども一個もなかりしかば去年頻りに乞申され養女よして仁田の城へ迎とられ給ふとき樋橋右衛門職之等夥の傅きを着られしよ彼等はすべて討死し姫は一旦敵の爲に擄にせられ給ひしよりもし和殿の助なくばいかにして吾儕らこゝに尊顏を拜すべきかくまで功ある人の妻子をわれ又索ねて酬にせん北兵大軍なりといふとも既よ英氣を折れたれば今宵かならず退きなんこゝろ易く思ひ給へと叮嚀よ慰めつゝまづ斥候を遣して敵の形勢を窺はするに果して時綱が量るに違はず北軍ハはや遠く退きたりと注進すとかくする程に天は明たりさる程に正禾彈正時綱は又更に軍兵を部玄て素二郎が妻と子どもを索ねさせ又里見舍連主從の亡骸をとり斂めて題目寺へ葬るに昨夕素二郎を喚活てその身は却て流矢よ命を隕せし彼法師がと

いと不便なるよしを素二郎聚て告しかばその亡骸さへ葬るとて時綱是を展撿しておもへずも嘆息し無憑なり且僧は羅橋梁右衛門が家子なる梁太郎法師叡念と巢へ生得臆病にて甚嗚呼のものなるに劍難の相ありとかいへば主君の益にたつものならずと父もやうやく思ひ絶て年十八九の比出家させこの春當所へ呼びとりて題目寺の所化よしたゝと聚て問しが時よとりては卜筮說相も誣がれし寔へ不便の終焉ゝとて只いく遍も嗟嘆しつ綽の逝きを住持に告父梁右衛門が墓に合してこれをも厚く葬りぬかゝりしかども片埦と唐草紅血が存亡定かならず故よ擄になるよあらずば亂軍の中に殺されけんと人もいひ我も思へば素二郎ます〳〵憂悶に有繋人目のつゝましさよこぼさぬ涙へいとゞして氣色ゑさへ見れしかば時綱これを慰めて禍福へ元來定まれる主なし一旦妻子を失ふとも恙なくあらんにへ環會日のかならずやへこゝろありてへ獲ざりしものも心なくして手に入るとあり先其しともろ共よ南總へ赴きたまへ和殿が投てゆく處もわが主君の采地ならずや然らば是彼身の爲に吉祥となりぬべし且く思ひ捨給へと道理を述て勸るにぞ素二郎ははじめより盤纏乏しき旅なるよこの地に留るべうもあらず正示と共よ上總へ赴き天目法印よえづね逢ば又せんすゝもあるゝしとやうやくに思ひかへして異議なく領諾したりしかば時綱も亦これを歡び姫を手輿に乘せ進らせ素二郎を將て上總なる浦田の城へ歸陣せり

○第二　稚葉の楓と名よし貧ふ　羅橋が女兒の五十日の祝

里見兵部大輔義堯は左馬介義豐の子なり乳名は源四郎當初上總の應南にをはせしかば廳前の四郎御曹司と稱しけり父の筭裘を嗣しより武威ますゝ盛よして房總二个國の外下總半國を擊從へ四十八城を管領してその身は上總畔蒜郡來里の浦田よ在城せり大凡上總十一郡のそが中よ畔蒜郡と指す所今は定かならずといふ來里も今は望陀に隷ぬつら〳〵地圖を考ふるよ彼畔蒜の一郡は海上周淮の兩郡を左右よして埴生望陀市原の三郡よ頭を擡れ地方細小なりしかば右の五郡よ合されて今は定かならぬなるべしさて件の四十八ケ城は上總よ廿六城あり大田木勝浦小濱万小湖蛍矢嶽の六ケ城はすべて夷隅郡にあり榎本勝見一宮帆丘鴨の五个城は岩長柄郡にあり東金土氣の兩城は山邊郡の内にあり（土氣は武射郡なるよ山邊郡とするを詳らかならず）羅田眞里谷椎津の三城は望陀郡の内にあり佐貫清海の兩城ハすなハち天羽郡なり池和田八幡浮所の兩城

はずなハち埴生郡にあり鳴土の城は武射郡にあり來里の城は畔蒜郡にあり便ふれば二十四个城なり二个所は遠して詳ならず義堯義弘の時土地を開き上總を一圓領するに及てみな是里見よりいふ當時の威勢如此なるべしさる程に里見の老臣正木彈正時綱は魚鷹姫を救奪らせ日ならず來里へ凱陣して義堯に見參ス上野仁田山落城のを舍連主從討死の爲体京家の浪人唐綿素二郎が姫を救ひし粹の趣き委曲に聞にあげしかば義堯これを聞あへず一トたびは舍連の討死をいと惜み一トたびは魚鷹姫の恙無を欣びて父子嬰て對面ありそりゝち駿多の女房を請けて奥さまにゞ養ひ給ひぬこの姫君は年長て義堯のおん弟義弘の嫡男たる松王丸の内室にゞなり給ふ魚鷹姫のを此下に説話なし却説里見義堯ハ此度唐綿素二郎が仁田の里にて不虞の功績その實なくは有べからずとて次の日正木彈をして素二郎を浦田の城へ召登さして褒賞の義あり路費として金錢許多賜りつ旅泊不便のとあらば申出ハへと叮嚀よ仰しかば素二郎は唯々として祿物を給はりつゝ暇て旅宿へ退出けり是よりして素二郎は盤纏ゆたかよなりしかば毎日に彼此を徘徊して天目法印が宿所を探るにこれをしるもの絶てなしあまりのと

に思ひ難て正木時綱が第へ赴き件のよしを告しかば時綱且くうち案じわれ苟くも當家棟梁の臣たるをもて民數帳を主ぞり主君采地にあるとある道俗男女の姓名を大概は記憶すれども天目法印淨辨といふ修驗者はいまだその名を聞るとなしさはれ和殿の心やりよ穿鑿を遂べけれとてよ悉しく聽けりさて旬日あまりを經て素二郎又詣來しかば時綱やがて對面し天目法印がと房總いへばさら也下総葛飾のほとりまで羽檄を飛し殘る隈なく穿鑿しつれどもその人なし聞誤りたるにゞあらんずらん是見給へとて長村等が言受書をみせしかば素二郎望を失ひてまづ時綱が淺からぬ誠心を欣び聞に彼修驗者はわが妻の正しき叔父でハひしがこの上総に在よしは仄に傳聞たるのひ風を追ひ影を捕るといふ喩にも似てハへば尋難るもその故ありこれらのとよ思ひよすれば妻と子どもが世にありなしも悉しげなく思ふのみ彼等は既に世を去ぬと今更思ひ決んにハ世間のよゝ形なしけふよりして刀を染法師よなる外ハはずと他事なくいへば時綱も誠共に嘆息し薄命をうち嘆くのあまりさかもふよ去は理りなれど可惜しき壯士が齢三十に達らずして桑門となるとあらんや和殿の長房ハ郷党をとり復せしにて推量らる加以らず京都の管領家に仕しと

き數度の合戰にあひよげん額よ殘る太刀疵にてと問ずとも著るしいぬる比わが君もこのことを宜ひて旅人唐綿素二郎は憑しげなる壯佼なり渠か此度の功を賞して召使ふべく思へどもわが家は（左典厩）義豐以來他郷より來たる浪人を新よ養ふことを禁ずれば予が意にも任せがたしいと惜かるべきものゝと宜はせしとゝもありよりてわれ和殿の爲に謨るべき依しなきにあらねども妻子ある人と聞けば今までは點止たり存亡不定の妻なり子なりこれらの故よ世を捨て法師にならんとまで思ひ給はゞそれには遣ますとあゞ他の名蹟を繼給はゞながく里見の家臣となりて三百貫の主たるべしその名蹟は別家にあらず和殿にも豫て告たる穉橋梁右衛門職之が遺跡なり渠は鶴姫よ偕けられて去歳のその月上野へ越きッ、此度北越の大軍と戰ふて討死し又その子梁太郎は出家せしが是さへも戰場よて不慮に命を隕せしかば遺りし者は女兒のみ、れはその名を鮮衣と呼れて稚きより奥さまに給事するをもて上野へ赴かずしかるよ穉橋職之は當家相傳の家臣よして忠義よ死たるものなれば殿のおん憐みいと深く嫡を擇みてその子を聚はせ遺跡を相續させよと時綱仰を承たれどもいまだその人を得ずしかるに頃者和殿の進退にてゝろを聞るに功に誇らず能を賢らず老實なる人とおぼえ妻子のうへをかもひ絶他苟を冒るを厭ハずば時綱則ち媒介して穉橋氏の女婿にせん鋒一朝の議にあらねばさりとても強てハ勸めずみづから思念し給へと叮嚀に說示せは素二郎頓よ回答かねてつくゝと案ずるよわれは今轍の鮒なり人の扶助にあらざりせば身をかく所絶てなし正しく上總にと聞たる彼天目法印すら世にありなえをしるよえなし況や人を屠ると芋の葉を芟ふき乱軍の中にえて別れし妻と女兒等にこの世にえては逢がたからんとゝに思へば唐草を鶴姫なりとして越の軍兵逐蒐來て矢庭にわれを打倒し女兒を奈ひをりたるときわれハ一旦死たりしこのときに得法師が直に呼活勵ちずばわが身危きことなるべしされ辛して生るとも得法矢をわが身よ射ねば忍地黄泉の客となりなんしかるよわれを助けッ、流矢に命を隕せし法師の女弟を娶にせよその親の跡を續ぐといはるゝも又不思議の緣なりこの再生の恩ある家を繼て世になき人々の菩提を弔ば神も憐み佛もてゝよ導きて世に在とも又なくなりぬとも女房女兒が過去未來の爲にならずといふとあらじと腹裏にて尋思しつゝ爾と笑て席を進めかくは不肖の某しを忠臣の後とせられその女兒をもて妻し給はゝ有がたかるべき幸ひとわが

前妻世にありと雖に聞とも異心を存ぜず君の爲よは忠を竭し家の爲にハ義を守てながく先靈の祀を絶じと思ふのみ他事もなくしゐと辭を演て慰しかば時綱大きよ欽びて當坐の征掌いふがひありしからば絆の趣きを聞にあけて形の如く計らひなん吉左右を待れよといふに素二郎雀躍して旅宿に退き俟はどに老臣正禾が汲引すなれば絆迷かよとゝのひつ義堯許容し給ひて廼ち唐綿素二郎を權橋梁右衛門職之が死後の養子よなされしかば素二郎はこの日より繼橋素太夫と改名すされば忌ども果て後主君義堯に見參し養父の本領安堵してその夜鮮衣と婚姻せり鮮衣今茲十九歳なみ〳〵ならぬ縹致なるに心操亦貞淑なれば入婿として素太夫を露ばかりも侮らず具成よ齊眉はどよその年より有身て月ごろよなりしかば玉かと思ふ女の子を產ぬこのとき秋の季なれば鵬て槭と名づけッ、五十日百日の壽きとて朋輩を召聚へ酒もりして遊ぶ折俄頃に御敎衙到來して思ひがけなく素太夫を殿の近習になされしかば蒲田の城中よ錦を給はり日ならず其處へ移徙すゆくすえはいざえらず只願人も羨むまでよ花やぐ僥倖にゆありける

○第三　山寺の月にふけたる　乞目盡六が獨樂雙陸

上総國望陀郡姉ヶ崎の磯山に金剛寺といふ廢刹ありけりむかしは由緒ある加藍なれども數度の兵火に荒果て基礎のみゑ餘波なる茅屋よ路を埋みつゝ狐兎は棲を得たりけりそが中に四足門のみ斜に殘りて剝たる丹塗の金剛神蜘蛛の網よ絡られて只一體ゑ立給ふこわ太古の造佛師司馬達が作なるよし里老人が口碑に傳へて祈ればかならず應驗ありと人はをさ〳〵いふめれど里遠離る敗寺は途のゆくての凄じくて參詣殊に不便なれば信ずるものなかりしよ天文七八年の間也けん件の金剛神夜な〳〵里へ出或は貧き田主が爲に畑よ打水を濺し或は壯佼をそゝのかして相撲をとらし給ふなんど頻に風聲しつれども見きといふものもなく實事しからぬ怪談なれば冷笑ふもの又多かりしかるよ此比乞丐の疊六と渾名せられし嗚呼の癩者ありけりその本貫は定かならず年來關の八州を彼此となく徘徊して去歳より上總へ流れ來つ定めたる活業なきまゝ同氣相求たる地方の破落戸を集合つゝ博戲双六をのみをとせりよりてその徒らは本事にかそれ舌を巧妙詭辯道にも似たるべし技よ長てゝかのづから敵を侮りて城を落され朝に富ども多よ貧く膳を闕をしば〳〵なりかくて又この比もいく夜さか敗軍して物殘りなくとられしかば宿借る賃もな

さまゝに彼金剛寺の敗門を寝處に定めッ、昼は終日睡りて暮せば夜は癖つきていもねられず月さえ殊よ明かりければ石壘に坐を占て塊れをもて石よ目をもり懐中より箭をとり出てひとり双陸して笑ひ楽む物から敵手なき技なればいく程もなく興竭て友もがなとひとりごち欠伸する拳を捺て思ハず彼力を見かへれば身長一丈ばかりなる赤やかなる悪男子背に立てほう笑をり大膽至敵の壘六なれども頭もとざは〳〵と塞う聳て肌膚忽地粟起しが些も騒かす佶とみて和主は何處の野田圃ゞ腹に毛のなき古狸でも魅されもせず幽利も取らせず調戯すなと叱すれば又莞然とうち咲てさのみな叱りそいく夜さか汝に宿貸すあるじゝ其許の手ぶりのおもしろさに敵手になちんと思ふのみといひつゝ梁にさし對へば壘六喝々とうち笑ひ友ほしき折なれば二王でも十王でも敵手は更に嫌はねど物かき勝負は勞して功なしとはおもへども我に等しく鉦一文の褒銭だも投與るものはなく裸形でりきむ和主なれば按とも祭ある博戯は要せじ何をがなと沈吟じ呀あり〳〵と頭を拍和主もし輪給はゝ吾解に膂力を授給へわれもし和主に輸たらばこの箭ゝ進らせんといふにしば〳〵うち點頭そは一段與あるとなり汝一番われに贏ば一ケ年膂力を得させん三遍つゝけて贏ならば三年膂力をたもたせんわが贏もさの如く三番贏は三ケ年汝に箭をとらすべからずいふよや及ぶと笑坪に入りて既よ勝負を爭ひしが神變自在の金剛神も活馬の目を抜といふ技よ長たる壘六か重五朱三と乞目を按れて續けて三遍輸しかば賭たるごとく覿面よはやく膂力を授給へと値られて頭を搔きかゝれば異議に及びがたし乞るゝ隨よ三とせが間大力の人よしを得させんしかりとも汝その力よ乗してますゝ非道の挙動せば命も其處に終るべき志素を改めて牛馬に等しく身をなすとも人なみ〳〵なる活業せよ努慎めと設喩しかき消すごとくなりにけり壘六奇異の思ひたて井垣のあなたを向上れば金剛神は内よありこれを敲けば形の如く木像よして異なるとなし夢かと思へばその物あり現かと思へはその人なしまづ試みよ傍なる戒壇石を推動すにゆら〳〵と動揺ぬこゝ不思議やとわれを忘れて肩よ乗するよいと輕し奇なるかなわれいかう四五十人が膂力を得たりむかゑの和泉親衛も剛夷義秀もいかでかこれよますことあらんあな欽ばしと肩よせし巨石をやをら投擲て力足を踏ならしその拂曉に驚へ下りてつく〳〵とかもふやう件の二王は年ふる木偶よ物の憑て化たるゝ異の神でなければこそ雙陸に果敢なく輸た

れしかるを楽が異貌なる教訓よ威されて活薬を轉るとも買のうへよは疎く農業は迂遠ゑ相撲をとりて世を渡らばそれ程のをすべけれども四十八手を一手もえらねば其を做ふとて月日を送り彼三年の期を過さば耳の血よ水の涸るゝ河童に齊一その甲斐なからんわが身非力なる故よ袴垂等が跡を得續ね今かうなりては世間におそろしと思ふものなゑこの勢ひよ引剝して手抓なる銭を獲ば玉を炊ぎ桂を薪綾を張よ錦を褥左右に美人を挽さみて酒壺で浴せんもとみなかのが隨なるべしさればとて倔々ゑく事を起さば守に聞にてかもふまゝよは稼がたけん要こそあれと密々に髪を亂し面を塗り異形のものに打扮て夜な〳〵彼此に立顯れ物ある人と見るときは走蒐つて拿て投或は打臥抓挫ぎて金銭衣裳を剝とるゑ己が物を取るより易しさゝ戰國の翌俗にて士農工商の差別なく志楽あるものゝをさ〳〵武藝を做ひつゝ腕を扼もの最多く入るときも出るときもをさ〳〵用心せざるゝなけれどこの疊六に拉見もの小撲刹なごとる里人はさらなり撃剣拳法の師範といゝれて肩をいからし臂を張るも半死半生に難惱され阿容〳〵として懐ろなる物を遠興せど猶聽さねば已ことを得ず袴を脱ぎ衣を脱ぎ太刀を斷れ命助かりたるをのみせめてものとにして赤裸にてかへるもありしかれどもこの強盜を疊六なりとゝ誰かしるべき彼磯山なる金剛神が夜な〳〵出て人を遂ひ引剝をし給ぬと風聞すれによりて剝とられたる里人等ゝ一隊になりて馬り狂ひ盜賊ならばさもこそあらめ磯山の妖二王が引剝するこそ安からねわれゝかの庚申講の集銭あつめてかへさに奪れたりわれは又襟よ垢なき晴衣布子よ已時なる袷よ肌衣に剝れたり損して恥辱を輝のみならず抓れしとき骨や挫げけん撲傷發りてこの比は鍬柄とると得なられば今茲の頁ゝ心もとなし彼古木偶を打碎き薪にえて凱詠き夜を凌ずばいかよして熟たる腸の冷よしあらん彼もゆけわれゆかんと羅よしく散動く在里老們排禁ていかでかゝ然るをあらん彼磯山の金前神ゝ畑に打水を流えて人の殘よ助をなされ或は壯佞をそゝのかして相撲をとらし給ふとこそ聞つれよに神仏像の霊あるよしゝむかしよりいへど神佛が強して凡夫を剝とり給ふよしゝ宗旨の法談よも承よゝらず祖父の代より夜話よも絶て者ざるとゞかし慾いなる所行をして霊佛の祟りにあゝゞてゝらよ人の胤ゝ竭なん只在の陰訴へて守の御威光を藉より多なしさはかもはずやと説喩せば衆皆有理と聽ッゝ手もちわるくて退きぬ

○第四　頼光の髭切に擬へし　里見の重寶纖月佳刀

日の光やぶしわかねば四時見るまに代謝りつゝ去來と暮れ今茲と明て天文も早八年まなりぬ却説扇素二郎は思ひもかけず鮮衣が壻と呼れてその家を繼橋氏の遺跡ま居られ名を素太夫と更めていく程もなく守義堯の近臣まなりしより君寵舊に踰るものからさせる才學あるまもあらず只心さま骨直にして主を敬ひ俗ま從ひ我意を張るをなかりしかば傍輩にも憎れず人を知ると雖ければ渠かその人となり文學武藝に疎けれども里見の主從誰かゝ曉らん義堯ゝ折〳〵に賢不肖を排評して年わかき近臣等を論し給ふ言の叙でに素太夫を指して汝等渠を何とか思ふ渠は華洛に生育て京家の作法を去れるものなりわが采地ゝ殊さらに東南の海濱なるに曩祖安房守義實朝臣安房の白濱へ推わたりて數个城を擊したがへ基をひらき給ひしより寡人に至て凡そ六世干戈しはらくも止とさなく剛敵を前に受て他鄉の通路不便なれば目ま京樣の風流を見ず耳ま敵地の廣陝虛實を聞ま去絶てなかりしにこの京夫を獲たるまより彼桓源ま漢と晉のかはりゆく世のたゝずまひを初て聞る心地ぞする加之らず彼ものゝ八とせばかり前つ冬上毛野なる仁田山ま

て越の軍兵を砍ちらしその身は素肌なりしかど一个所の淺痍も負ず鮫姫を恙なくとり復したる健雄ま現に管領ま仕しときも手繁き戰ひをまたりけん領に見ゆる古疵ゝ勇士の羨む太刀痕なれども能ある鷹は爪を隱して文に飾らず武ま誇らず謙遜辭讓　ゝとする心ゆかしく思はずや血氣にゝやるわかものども紛參とて侮らず渠が風儀に倣かしと說諭し給ふになん素太夫は傍らいたくて領ま許するをおはかるさればこそあれ素太夫ゝ里見殿へ參りてよりいまだ十年に滿ざれども譜代實生の近臣も同僚まして忌嫌ゝず老實たるものなどは義堯の宣ひし件の絆の趣きを傳聞て感嘆し現彼繼橋素太夫がかくまで守のおんおぼに羨ましくも愛たきいその身ひとつに幸ならず佳婿を招得たる妻子の慶福ま けりとていと喫々しく聖もあり妬しと思ふも多かりけり畳聞上總國來里の城より程遠からぬ楢葉村の東のかた坂戸市場と唱ふる鄕宮杜太玄く立上久たりける神社ありこはこの鄕の鎭守にして坂戸明神とまうすなる或は逆手の神といふ多力雄命ま槍皮厚く葺かけたる鵄尾懸魚ま細工を蚓し朱の玉籬樸の鷄栖注進引わたして神々しく鄙に似げなき壯觀なりさて祭禮ゝ毎年の六月廿七日ま廿六日を宵宮と唱て聖神樂の試樂あり瓜茄子を供物とす

こゝに受地子と稱するもの伊川坂戸牛熟大崎牛込中野村中嶋萬藏川尻島廠高柳なゝどいふ十二个村ありとなんそが中一村聞もらしつことは惡神にましますとてむかしは年の祭祝祠ゝ人身御供といふものを備へまつりしといひ傳ふ當時彼十二个村集合て探て籤を拈り犧牲ゝせらるべきその籤を得たるもの己とを得ず牀浴し正身して淨衣を着し本日巫祝に携へられて坂戸の神祠に赴くゝとき巫祝件の人身御供を巨俎たの上にのぼして神前ゝ供じつゝ玉襷して氷なす屠刀を晃かし莊子に所云庖人が文惠君の面前ゝて牛を屠るに異ならず硅然とゑて刀を奏り響然とゑて俎を敲き腑より骨頂より踝腿のはとりまでこれを解る假樣をしつ高く祝詞を讀かけていかめしく祭るといふさるときはその犧人三年が間ゝかならず死す祭ざれば祟ありとて愚俗の常情罕にも曉らず事此よしもなかりしに里見氏安房に起りて上總を管領せし年より彼犧人を殿禁あり愚民を諭し給ふやう神は天地のこゝろゝ人は天地の靈物なりかゝる故に我神國は神祭をもて政治の第一とし給ふかしよりてかの政の字をまつりごとゝ訓したり見ゝ官職のはじめにも神祇官を出されて太政官の上にあり斯やんごとなき政治てゝ廼ち神のこゝろなれ其を長久に制度し給ふ世々の日嗣の天皇は神胤になんをはゑます千早振神代に山田蛇と聞にしゝ人を啖ふ毒蛇ゝ繁靈雄尊これを殺して奇稻田姫を娶りつゝ出雲八重垣と咏じ給ふさは天神地祇八百萬とは聞に給へどいづれの神か國民を血食とし給ふとやゝある天地は仁義の淵源にて神祇こゝに宿り地祇もこゝより出づいかでか不仁の神在さんしらずや人を贄とし祭るに山田蛇におもひよして陽ゝはをさ〳〵神威ゝ假托し陰にはおのが利を謀る生巫祝等が狐根でとゝて愚俗を惑し毒を流すその害ゝ劍あり心ざまの殘忍なる山田蛇にませるものゝこゝをもて今年より坂戸の神の犧人をなが〳〵停廢するものゝ但し舊例も默止がたし今より彼贄代ゝ青緡十貫文を寄進して本日の祭儀を助くゝしこの旨こゝろ得ゆへを十二个村ゝ下知し給ひつ今に至て二十餘年人身供はその事絶て瓜茄子をもて供物とす廿六日の宵宮にゝ守より使者を立られて青緡の錢十貫文を唐櫃に納さして國主手づから封じつゝ坂戸の神祠へ進らし給ふ年例嘉儀とゞなりにける時ゝ六月廿六日來里浦田の館ゝは夏を宗なる四阿も圍の池水半涸て杪上ゝ蟬〻蟬の聲みるもの聞くものみな熱き砂はさらゝ甲夜の間も甕瓶みの炎熱冷ばれ義堯ゝ廊のゝ影多の給燈籠を掛さして曲談ゝ臂をも

たり右手を氷水に浸しつゝ宿寢する覇侍士織橋素太夫等を集合つゝ古今の成敗將相の得失を評判し或ハ四表八表の物語などするをうち聞て座する程に夏の夜なれば短くて茂樹蕾る打水よ庭の背石まだ乾かねど更ゆく鐘の音すれば皆やすらひへとて近習のものに暇を給ハり東首よ翠簾かけわたせし蚊帳の中に入り給ひしが且くして忙だしく宗卿〳〵と召れしかば宿直袋の紐も解ぬ素太夫は應あへず應てゞ走り參りしかば義堯やをら蚊屋を出て素太夫歟不覺にも忘れたるとこそあれ今宵は坂戸の宵宮ゝ彼賢代の唐櫃はわが手づからこれに封じて今朝玄も彼處へ進らする例年の嘉儀なればそのとをうけ給はる主計人が課てより青緡をとゝのへて封じて賜といひつるを軍議に紛れ疎にもつや〳〵思ひかけざりき仇に曉さばいとも恐し更闌たれど子はまだ過ず今より汝を使者として坂戸の神へ賢代を進らすべう思ふかし准備をはやせよと只管にいそがしつゝ更に近習のものを召して淨水を執し衣裳を更め彼唐櫃を拿よ玄て蓋を開かし展捻しみづから叮嚀に封じつゝ注進引總し給ふ程よ素太夫ハ遽ハしく祇服に更めて從者等を召集合又お ん前よ參らしかば義堯これを遐づけて深夜の使者に汝を勞せばこゝろ得さする一條あり近會磯

山なる金剛神に願ありて夜な〳〵彼此に立願はれ人を逐ひて引剝すと大崎伊川の村長等が報知ありせしともありわれ思ふに古物木像に精入りて怪をなすよしなきよあらねど假にも神體佛像の强靭になるとやハあるこハその中に情由ありなんこれらの浮説ハ坂戸の神が人を戮よとるといひし俗談を日を同くし年をおなじくすべきとなりよりて僉議を遂たるハ正禾時綱等がまうす所もわが思ふ旨に符合せりさるによりしのび〳〵に正禾が夥兵を遣して金剛神の廬實を接るに今に便宜を得ざれどもこれも亦野臥山客等が木像に假托て人を剝よゞあらんずらんわれ眼前よ試みせねど汝が武勇をよく知りぬよりて今宵の火急の使者に擇出して遣すなりされハ世に妖怪變化も絶てなしともいひがたしむかし攝州賴光朝臣ある夕更闌人定りて默止がたきとやありけん須彌の四天よ擬へし隨一の勇士たる渡邊綱を使者として一條大宮へ遣すよこの比洛中に變化出て人を把と聞ゑかば廼ち源家の重寶たる髭切の刀を賴て綱に佩して遣せしに果して一條堀河なる戾橋の上よて綱はあやゑき女よ擅見かの髭切の刀をもて妖物の腕を砍とり武名を朝野よ揚しといふ世擧て知るところ也われ亦清和のながれを汲ば滿川織月と名づけたる家寶の刀二口あ

り滿月形は長三尺日月星宿の二光にて表したる目抜は金の滿月なり又繊月形は二尺四寸二尺は陰陽両儀を象り四寸は四時に表したる目抜は銀の半月なりとは彼髭切膝丸にをさ〳〵劣らぬ古刀にしてはとり放さぬ重寶なれども頼光朝臣の故事よ倣らひて繊月形の一口を今宵ばかりは汝よ佩せん汝は綱が武勇に倣らひあやしきものと見るならばこれをもて刺留よと叮嚀に仰つゝ枕上に掛られたる繊月形の佩刀をとりてそがまゝ預下されけり素太夫君恩身にあまりて面目を施すものから庭心よは面なくてわれは元來武藝に疎く心ざま亦悍からねど仁田山の厄難よ奪ひ去られし紅血をとり復さんと思ひしのみわれよもあらで只一個の雜兵を擊こめまは寔とよ過ちの功名なりき加之らす津國なる尼ケ崎の戰ひよ而疵を受たるさへ物々しく思はれて今宵の使者に擇れしは當らぬとと思へども武家の俸祿を食ながら明々地よはいひも釋れず鬱々として樂まねどかくて止べきとならねば君邊をすべり出て從者をいそがしつゝ奴隷四人に櫃を舁し二人に蒸火を照さして主從七人遽はしく浦田の城戸を辷り出て坂戸市場を投てゆく夜はや子四ツの比及なり夏なれ寒き早稻田の原に廣衣の袂を吹して有夜ならばと思ふのみ野干玉の烏夜なれば後見らるゝ心地して彼變化が出る歟と疑ひ危む暗鬼と安鬼に歩の運びも定めかねて道の傍の草に結ぶ夜露の玉を踏碎けば思ひがけなく足もとより群立螢火よ素太夫は阿と叫びて飛退去れば從者はその聲に寄竹て目前よ飛散る螢火とゝもに右左へ發とゞ退たりけるとばかりよして物もなき作麼何ゆゑにいたく叫びてうちおどろかし給ひしと訝れし素太夫は眼を眩りて左右をみかへり汝等しらずやいぬる比より彼此に妖物出て路ゆく人を透ふとゞいふなるこの故よわが君より繊月形を名づけられたるおん佩刀を給はりて今宵の使者に立られたればあやしき奴が出るともこのおん佩刀の德よりて恙なからんとは思へども過失は由斷におこるしづこゝろなき汝達に孫てこゝろを得させんとて遣かせしはこの故也廬々として妖物に蒸火を奪れなといはれて、乘皆怖氣つきよにいふ同氣相求め臆病こゝに相憐みて奴隷は主をちからにし主は奴隷を盾にして只一歩もいちはやく坂戸の神祠へ到らんとて足掻に力をいるゝになん今まで冷しと思ひし風も暑さく吹く心地して額の汗を拭ひあへず喘々ゆく程よ坂東道(六町一里)二十里あまりはや來つらんと思ふ比丑三の鐘音すなりこゝより坂戸へ遠くもあらず急げ〳〵と聲かけて田中の細道を

渦るとき一聲烏き一里塚のほとりよ立在ものありけりいはざるを蚊と素太夫は且焦火を抗さして主從遙よこれをみるよそのものすべて鬼形よ類して赤きゃ朱の如く白銀の針かと思ふ頃きに螺髪を紈ね虎髯左右よ逆だちて眼ハ百煉の鏡にひとしく瞳の光り散徹してすゑ砕けゆく電よの稻葉を照らすに異ならず腰のあたりよあやしげなる單衣を着たるが手ともいはず足ともいはず力瘤高く起りて周防州にありといふ巨章魚の疣かと疑ふ彼妖怪はこれにこそ世の風聞は空からで現磯山なる二王に似たり進むときはいと危く横ぎらすよハ路もなし逃ともいかで脱すべきいかにせましと素太夫は刀の鞘よ手をかけながら只立すくみて術えらず主すらかくの如くなればはずそが中に只一人焦火をふり照らして先よ立し奴隷のみ短晴なれば妖物の彼處に出しをいまだ見ず蛇よ怖ざる者のごとくさりげなくゆく程よ衆皆短晴よ意もつかずこれが勇氣に激されておそる〳〵跡よ跟きておの〳〵日來志す明神佛陀を念じつゝ三反あまり進しかば彼妖物ハわつと嘆いて鑢のごとく走り來つ先よすゝめる奴隷が項髪搔抓み揉向て水田へ水入投たりければ

全軀は泥よ堀埋まれて稻葉の間に頸のみ見ゑもてる焦火は遙かに飛で畔の夏草よ燃うつりぬかくてハ誰か脱るべきみなもろ共に死ずやと後方より聲ふり絞る素太夫よ激まされ戰國の習俗として奴隷も流石よ恥を知りけん遽ハ玄く櫂を銜して或は憩杖を閃かし或ハ野刀を引抜つゝ主從六人多勢をちからよ而もふらず擊て苅れば妖物は些も騒がず打かゝる憩杖を左と右へ遣り錯して二すぢ三條引搔投刄晃かす白刀を拄て蔓鈴丁と打かとし怯とところを衝とよりて前にたつをば拳仆し後へ旋るを撲地と蹴飛し起んとするを搔抓みて水田の中へハら〳〵と人礫にぞ打しかば泥水發と潰しり天よはしらぬ夕立の雨さへこゝにふる池や飛込む蛙に彷彿たり素太夫は憑切たる奴隷六人眼前水田の泥に塗れつゝ生死もしらずなりしかば案山子よ似たるわれながら弓箭の家よ仕へつゝ手を束ねて死に就んやと素志を激まして透を窺ひ後方より聲も得かけず纖月形の寶刀を拔て砍んとするよ妖物は眼はやく身を沈まして刀を避欲此二三度疲しつ朱霍に落せし鐵槌にひとしき拳を握固めて素太夫が左の小鬢を髣むばかりに碓と打大力よして手もさにたれば暫時も得堪ず苦と叫び刀を捨て頭を抱へ橋の下ゆく帆柱の綱手をおすよ異ならず横に倒れて息絶

けりこのときまでも日枯せし草葉ようつれる火は滅ずなか〳〵に明かりければ妖物は莞爾と笑て素太夫を賊かへしつ手ばや〳〵衣裳を剝とりて唐櫃の掉に括り着かなじはとうよおとしたる緋月形の刀を取て打かへし見て又打笑み箱掻よせて挿副の刀と丶もに奪とりて悠々とおのが腰に跨へ奴隷が衣をみな剝がば上總木綿の單なりとも些ゝ物よなるべけれど水田の中よりひとり〳〵と引出さば將うつりて天も明人よしられやせん櫃の内ゝおもやかなるよ衣裳も太刀も直うちあり澁柿ともゝとり殘して歸るとも惜からずいざまからんとひとりごち唐櫃の掉に肩いれて身ひとりかゝや戻獄籠に流價得たりと打笑ひ往方ゝしれずなりにけり

○第五　賢女の謀事に恥を雪し　私卒丁七が力乞の山居

却説機橋素太夫等ゝ青田の中にうち倒されてその存亡は定かならず天も曉かたの夜離時より彼此の里人等祭祀のもの見うちつれ立て坂戸の神社へ赴く程に楢葉驛よ倒れたる從主從を見て驚きさわぎ或はそのはとりに集合或ゝ村長許走りゆきて緯の趣きを告しかゝ楢葉の村長聞あへず莊客們を驅催して喧々來り來つ蟻の如く聚ふたる彼此人を推わけて且倒れたるものを見るにその姓名こそ定かにしられねこゝ紛ふべうもあらぬ國主の使者也と見てしかばまず〳〵呆生をひつゝとせん斯せよと焉りて兼皆毛瞞に踏潤す甲稻田の中へをり立ば水ゝ素より泥も又深草燒の泥偶人の雨にうたれ露にそぼちて粉の剝たるよ異ならで泥塗れなる素太夫等を辛じて扶あぐるに主從七人がうち奴隷三人ゝ絶絶て救ふべうもあらざれと幸ひにして素太夫等四人ゝ呼吸なほかよふ物からこれさへいたく擊れけん手も利ず腰も得たゝず泥もてつかねし全身よ鬱くものゝ目子のみ名を問故を尋るに答應果敢〳〵しくもせざりしかば輝て板戸をとり寄て主從をこれよ乘莊客們よ舁しつゝ長が宿所へ扶入れ庭井の水を汲かけて泥を洗ひ流し衣を更させ離波の沼より引揚たる阿彌陀の如く敬ひて鍼灸藥餌に手を盡し叮嚀に勵ゝる程よ素太夫等ゝやうやくに玉の緒纏ぎ留たれ共贅代を奪れつ且く預け下されし緋月形の質刀さへ失ひつればとにもかくよも罪のがるべき道ゝなしされはとてこの儘よ逐電せんよは腰脚立ずよしや痕愈疼み去て逃亡る事自在なりともふり捨らるゝ女房女見がわれゆゑいく〳〵その憂苦よあふらんこれも又不便也いかよせましと今更よ思ひかねては野干玉の昨夜襲れし撲傷より苦しき胸を痛めつゝ生て悔しき身を泣

ぬこれより先楢葉の村長は素太夫が綷の趣き浦田の城へ報知たるよ彼此の風聞さへ喋々として
かくれなけれど羅橋が妻緋衣は良人のうへを傳聞て且驚き且歎きくのときより召使ふ私卒飯沼
丁七を楢葉村へ遣せしに望陀の目代苗頃將監守の命を奉まはりてはやその處へ趣きつゝ素太夫
等がいふ所その夜の形勢事の顛末嚴重に問定め聽て彼等を駕籠よ乗して浦田の城へ行て歸るそ
の爲体嚴重なれば丁七は面たりよ主の安否を問事叶はず只いたづらに後よ跟て城中へ立かへり
見もし聞もしつる酌主の女房に告しかば鮮衣は夫にましてこゝろ雄々しきものなれば掩ふよし
なき良人の駆奈に遺恨の涙禁めあへず母のこゝろは去らねども女兒楓は斗もはや七ッさがりの
夏の日を秋かとぞ思ふ寂しさに歸らぬ父を待わびて事もやあると思ひ顔に耳側つる怜悧さに母
は歎きもます穂の薄ほと吻息も良人の安危に風の便りを俟ばかりいとゞ慰めかねたりけるかゝ
りし程よ苗頃將監は素太夫等がまうすよしを守義堯に聞にあげさても件のもの共は昨夜楢葉の
驛よて妖怪よ擅見つ奴隷三人投殺されて主從四人ハ恙なしさはれそれさへいたく驚れて起臥も
自在ならず剩さへ贄代の折櫃を奪ひとられ月形の寶刀さへ紛失してゐひき素太夫は箇樣〳〵奴

隷がまうすは云々と委細に演しかば義堯これを聞あへずそハ安からぬ事なれと救圍たかく曲禄
を礙と皷てかいやり放ち彼素太夫はこれ年來文武にこゝろ得たりしと思ふよは似ず嗚呼なるも
の也勇士は頭を喪ふとを忘れずよしや夜乃にもせよ天狗よもせよ命をこれが爲に得捨ず武士た
るものが阿容〳〵と刀をとらるゝをやはある贄代は不易の神事月形は當家の重寶ふたつながら
失ひしは言語に絶たる越度也加之ちず奴隷がまうすよしを聞くよ彼等は結句命を擲ち且く挑戦
かひしか素太夫は戰慄て主從遂に一致せず事の難儀におよびしといふが實事であらんよはその
罪いよ〳〵輕からず後園の折戸開かせて素太夫を引居よみづから奴者を鞫問して鎌倉鍛治に打
したる新刀の刀を試さんずと〳〵焦燥給へば苗頃將監小膝をすゝめおん憤うりは然るをよ
て汚氣色の凄じきよ抽てゆすいかしこけれども嗚呼なるものと知召さで夜陰の使者を仰付られ
剩さへ纖月形のおん佩刀を預け下されし素太夫がその罪を罪としておん手討になされなば一國
の民怨きまどひて却て君を譏るべし今こゝろみに怨意をまうさば只刑罰を寛恕て且く渠を助け
かかれ寶刀の往方をたづね求めてまゐらせよと命じ給ハゝそのたびは命を捨ても寸功を立ざら

んやかくて妖怪の眞偽顯れ寶刀ふたゝびかん手に入らば君の目かねのたがハせ給ふと讓りまう すものもなく忠義に死せし梁右衛門が潰蹟もこゝに斷絶せずば公私の幸ひ此うへなし寛仁大度は固りなれどなほ穆便の侵沙汰こそ嘖しくいへとおそる〳〵諫めまうせば義堯些し怒氣おさまりて嘶て將監を退かせ曲禄に知村傳て再て深念を給ふ折柴時綱まゐりしかば義堯端無と居なほりてほとり近く召よせつゝ素太夫が爲歸苗頃か諫め玄趣き首をはりを說しらせ汝はこれを何とか思ふと密やかに問給へば時綱暫時頭を傾け彼苗頃將監は素太夫か碁敵よて親しく交遊いもの也かゝれば君の面を犯して諫めまうせし底意最負の沙汰よ似たれども公道よは親疎なし今將監がまうせし條素太夫がうへのみならず第一君のおん爲にこのうへやゝべき更に賢慮に及ぶべからず金剛神の妖怪はその眞偽を組ん爲某し曾毎に夥兵を出し某しも又しのび〳〵にみづから巷路をうち巡りてその在所を探れども便りを得ずゝひしよ此度繼橋素太夫が贋代寶刀を奪れたる爲歸を出沒不測の癖者が金剛神に假托て掠奪するに疑ひなし緯綴やかよ計り給はゝ彼强盜を生拘て寶刀をとりも復さん事又なしがたきにゝずと詞を竭して諫めたかば義堯しば〳〵うち點頭いはるゝ所ずか意に稱へり今素太夫が罪を糺してその頸を刎んには予が怒の烈しさよ彼癖者もかそれまでひて必らず遠く走りなん强盜一トたびこの地を去らば繼月形の名刀もふたゝひ返るよしなからん然らば件の白徒は且く宿所に拘絏らせて太刀と盜賊を獲つる後に罪を正すもおそからじ奴隷ゝふかく答るに足ずら死たるものは葬らせ傷きたるには醫療を加て予がこゝろをしらせよと叮嚀に仰しかば時綱は恭々しく頭を低てうけ給はり慈善の沙汰に感涙を禁めあへず退りけるされば繼橋素太夫は思ひがけなき過失にそがまゝ宿所に閉籠られ人の誹謗のうたてきよ妻鮮衣が歎きはさら也私卒奴隷も云云におもひやせんと彼に慚此に愧てはなかゝにわが家さへに世は陝く肩身しゝまる麻衣の糾るがごとき寒の日を暮しかねつゝ早晩に拂はぬ庭も秋來ぬと旦開の風ぞおとづるゝ文月なかばになりしかばあるじが撲傷おこたりて歩行不自由ならねどもなほはゝかりの關はひらかず五十日を限りにて切腹仰付られなん綴り頸をやゝ刎られんと他の批評は耳よはや入相の蟬曉鴉こゝろにかゝる事のみなれば鮮衣は今更にやるかたもなき歎きして又つく〳〵と思ふやう親の爲には女子ばかり朽をしきものゝなし吾倅男兒で

あらんには蓋かゝやかしく阿容〳〵とかくまで家を汚しはせじよしや年經る木像なりとも夜なゝ出て人を惑ひ掠奪する事あるべうもあらず鈴鹿の惡鬼大江山の變化といひし昔時がたりもみな山賊と聞にたりかゝれば件の金剛神の狐狸よあらさりせば盜賊の所爲なるべしこれらの眞僞を探索めてその夜の賊をしるよしあらは是をひとつの功にして良人の罪を貰はんよすがはとれより捷徑なし夫婦が過世の惡業にてみづから作さぬ孽ひよ繼橋の家絶果るをいと淺はかなる女子の智恵にとりも留べき事ならねど手を叉つゝ敗を俟ば君の爲よは不忠也家の爲よは不幸也うたてやなわが父は男女とふたりまで子を擧給へど親に肖ず家兄い出家の功德もなく流矢に命を隕す殘る吾僧は惡しからぬ夫に家を倒さるゝそれをうらめば道ならずいふかひなくも夫の無事を神よ佛よ旦暮に祈る信は家の爲女兒が爲と合す掌を親の靈魂もあはれとは受つゝ祐け給はずやさていかよせんとばかりよ怜悧けれども身よ泣る胸の紊れを釋かねて人目なければよゝと泣壁次の間へ聞にけん出居の簾推揚て痞や起り給ひしと事問を誰と見かへれば譜代の老僕丁七也當下丁七は遠近く小膝を衝てやう此度御主人のおん恥辱はしづ心なき炊婦まで朽をしと思ふ世の惡評歎かせ給ふは理りなり某しその夜の俱よたゝねば彼妖怪の爲体たしかよ辨じがたけれども只今ひとりぢち給ふを彼處に竊聞ひへば愚案も賢慮と合暗せりさてゆ主人はこれらのよしをいまだ曉り給はずやと問ば鮮衣涙を禁めいぬる比より彼妖怪を假見ならんとまうせもかどあかなるべしとゝ宜いず而たりに見ざりしものはさる疑ひも起るらめその夜主從八人を礫よ打たる鋒の形勢山賊なんどの行所ならんやそのよしもなく疑ひて憚りの眼を起彼妖物の虛實を探らば金剛神の祟は一トしは身の罪をますのみならで妻子といふとも脫れがたけん毛を吹き疵を求んより籠居らば怪我もせじ不覺よ物を宜ふなとうけ引給ふ氣色なければとてもかくてもいふがひなしさりとても徒らよ月日を過して罪定らば何をもてわが所夫の恥辱を雪るよすがあらん影微き所爲なれどわらはが思ふ旨あれば太夫どのよはしらせまうさで和殿如此〳〵に謀れかし箇樣〳〵と耳語ば丁七頻りに嘆賞し今にはじめぬ賢婦人楠氏も及ばぬ適れ妙計うけ給はりいひぬと愉よく諾ひつゝしのび〳〵に准備しつ次の日の曛昏に一貫文の永樂錢を袱布きに引包みこれを脅負て只ひとり磯山へゞ赴きぬ却説飯沼丁七はいざよう月におくられて通宵走りつゝ稍

聳る秋の山涼しさ徹ていと寒きその拂曉に金剛寺の山門へ來て見れば開えにはます荒寺の鉦
皷は絶て松の風本來空と觀ずれば堂塔伽藍は蹟のみ遺す基礎の外一物なく只一礎の金剛神倒れ
かゝりし山門の梁りを肩にもたして蜘蛛の網に閉られつゝ活るがごとく立給ふ現司馬達が作也
といひ傳ふるも故あるかなとひとりごとして立在はぞに山の夾白く曉しかば憩ひもあへず麓に
くだりつ黄昏より又山よのぼりて山門のほとりに躲ひ目睡もせで窺ふよ怪しと思ふ事もなし第
三日の夜よ至りて身長丈大き暴男酒にやあらん索もて結びし鬣を引提て馬歩にあゆみ來つ屎椅
危き山門の圍垣の中に座を占て竹の皮よ嵌みたる魚肉やらの物を酒菜に頤を敲き舌打鳴し鄙の
酒を喫嚇してそがまゝに臥たるにや鼾聲幽なり丁七ハ月光にとさまこうさま透し見て彼癡
者ハこれなるべしとうち點頭つゝ樹間を出足音たかく金剛神の圍垣のほとりに跪づき壁ふり立
て申すやう奇妙但禮金剛神の寶前に祈願し奉つる某し年來相撲をこのみて四十八手ハ大抵しれ
どもその力足らずして最手拔手に成事稱ハずもし尊神の冥助によつて樗力十倍なさしめ給はゞ
田圃を活却ても山門を葺更て風雨を禦奉つらん此願言を申さんとて夜をこめて參詣せり先發

願の記として一貫文献つる大願成就なさしめ給へ大崎の里人某し再拜〳〵敬白とくりかへしつ
〳〵祈まうして郷しまゝに十緡の錢を圍垣の内へ礮と投入又數回額を着やをら身を起して嚏うち
掃ひ盥へくだるゆもゝちして舊の樹蔭に立隱れ綽のやうを窺へば彼癡者ハ起なはりて件の錢を
右手に引寄せ比日ハ魔がわるくて出れば取られし端山の園錆錢一文なきまゝに又この處へ巣を
易たれば思ひがけなく白徒が十緡の本錢をもて來にけり實に果報は寢て待かひあり又吉夢を見
るらめとひとりごちつゝうち笑ひ錢を枕に又臥ぬ丁七ハ綽の趣き十分に定たり只近つきて癡
者を搦捕ばやと思ひしが渠は世ゆる大力なり早りて事を去そんずなと奥がたの宣はせしはこゝ
なるべしと思ひかへして渠が覺るを俟ぞにはや隈がたになりしかば癡者ハ欠伸して園垣の額
れを潜り出垂楊の如く尿して石滂を掬び嗽そぎ件の錢を肩に乘て麓のかたへ下るになん丁七ハ
見失はじと些し後れてゆく程に羊腸なる山道の木立隙なき處よて忽相往方を失ひつこういかに
と心地まどひてゆけども〳〵遂よ得あはずあなわれながら鈍まし之類よ腮を嚙むものかち奥が
たの謀らひ給ひて既に語を齎えたれば索あはざる事ハあらじとおもへど胸ハやすらはず果敢な

くも山をくだりて彼此を徘徊し來るとも玄らで畑塚なる小松原を過る程よ野ぶせりとかぼしく
て悪棍夥囲しつ目交の勝負を爭ひたるそが中に手拭に頬を包みて雙膝立たる大漢がつき並ぶ
る銭を見ればみな永樂通寶にて背を磨ぬは絶てなし原來昨夜の癖者は這奴なりけりと心いさみ
足ばやに走りつゝ何處へか訴ふべき近き椎津の城へやゆかん來里迄還ら　かと決かねたる前回
の正禾彈正時綱ハ彼妖怪を穿鑿せんとて兵夥多引卒し毎日の巡歴解怠らで此日此時ハ計ずも畑
塚ちかく來ければ丁七ハ馬前よ蹲踞ゑこれハ織橋素太夫が私卒に飯沼丁七と喚るゝもの也いと
憚りある所行に似たれど正禾どのと見奉りて中あぐべき事こそハへ主よてハ素太夫ハ妖怪に不
覺をとりて脇代寶刀を失ひゑかん谷よりてともり居つつら〳〵物を按ずるに彼妖怪の爲躰正
しき神にハあるべからずもしその眞偽をしるよしありて汚名を雪むる事もやと寢食を忘れつゝ
計策を定めよけれど蟄居の故をもてその事かなはずよりて某し男をうけばり永樂銭一貫文その
背を竹すり磨き磯山寺に三夜籠りて箇様〳〵に祈りしかば彼荒寺を臥房とする癖者ありて銭を
取りぬかくてこの拐曉に癖者の跡を跟て奪へくだらんとする程に忽地往方を失ひつゝ心地まど
ひて彼此と索て畑塚を過る折野ぶせりの悪棍等が圓座せしそが中よ背を磨きし銭夥多もてる大
漢のいひきこハ疑ふべうもあらず徐剛神に打扮て人を掠奪山家ならんと告るを時綱聞あへず素
太夫微妙謀りにけり先度の恥辱を雪んと只これ一舉にあらんにハ汝が忠義も抜群也時なうつし
そめしとれと三十餘人の夥兵等を五人十人部しつ丁七に鄉導させて集悪棍等が圓居せし小松原
を八方より彌々ととり卷て時綱間ぢかく馬を乘すに癖ねしらずや疑誕よつて汝等を捕ん爲に
正禾彈正ひづからむかへり渠生拘れと下知するにゞ早雄の兵等疑誕さふと喚りて驀直よ擊て蒐
れば悪棍は駭き周章て立足もなく避易し逃んとするを追詰てはや二三人搦め捕ぬその隙に丁七
は五六人の夥兵と共よ彼大漢が前後より打倒さんと闘いたり彼大漢ハ別人ならず則ち乞目盲六
也多勢を敵手に物ともせず近づくものを後へ投組んとするを前へ揉伏縦横無碍に哮り狂ふその
対景餓たる猛虎が羊を驅傷へる野猪の山を下る勢ひ當りがたければ三十餘人の兵卒等は是首に
流り彼處へ散せん術もなく見ねしかば時綱頭りよ焦燥て短鎗をひねり馬に拍いれ奮然として突
て懲ぼ盲六佶と見かへりて我よ飽まで力あれども正禾が武藝に敵せんといと危しとはひけん抓

ゐり怨たる兵等を左右へ廣ひ前後へ開かせはや一條の路を奪ふて飛ぶがごとくよ走去るを時綱は怒さじと短鎗を雌手に挾さみ鞭を揚て追蒐れば丁七ハ両三人の夥兵とゝもに馬よ先だち小松原を東へ投て喘々遁ふ程に疊六は遁足はやく七八丁走りつゝ忽地途を横ぎりて檜木林のほとりなる鎮守の社の窟よ手をかけ縲を脱たる猿猴の如く只一跳に登りしかば吐嗟とばかり一個の兵ら捕んとて閃りと登れば疊六は繡月形の刀を晃りと拔く手も鋭くばらりずんと砍ぎしあなたの風へうち越て林の中へ飛入りぬそのとき飯沼丁七は神社の屋根に傳ひ登りつ彼癬者に推つゝきてそがまゝ撞と飛下しが膝頭を撲やぶりて更に迫ふべき勢ひなく彼よ〳〵と叫ぶ程に時綱は夥兵を進めて茂林の中を騙求るよこのとき夕陽西よ沒て十七日の月いまだ出ずさらでも暗き林原の老樹枝を垂ていやかうへに生累り樵夫のかよふ細道のみ幾條よかわかれつゝ遂に彼癬者の往方をこゝに失ひて遺恨やるかたなけれども夥兵等いたく疲勞よければ擒捕たる等類の惡棍を率しつゝその夜望陀の目代なる苗頃將監が宿所よ越き彼生拘を鞫問するよ倉波の野臥なる田子江の疵三五十井の疊太なんといふものを首として惡黨すべて十餘人衆皆笞の苦痛よ得堪ず異口同音にまうすやう某等は博徒よて人を逐ひ物を招事などゝ絶てせず神祠の屋根をうち越て辛く脱れし大漢はわが黨の首領にて渾名を乞目の疊六と呼れ驍陸吉変の博藏にさかしくちか比磯山なる金剛神と賭のして三たび双陸に贏しかば神も流石に術なくて彼疊六が乞ゝに膂力を授給ひしといふ也さるよより疊六ハ彼靈像よ打扮て力に乘し卑怯しつ猶さへ坂戸の贊代を奪ひとり錢ハ賭博に失ひぬれどその折奪ひし太刀などは今なほ渠が腰に佩たりしかれども渠ハ他郷のもにしてちか比この地に流れ來つれば素姓ハしらずいと綽巨細に首伏すこれにより時綱ハ更に疊六を捕んと苗頃が夥兵を加て兵士數十人を八方へ頒遣ハし近村に令しらして舟行を禁め港口を塞ぎ殘る隈なく歩獵れども疊六ハ天をや翔りけん又地をや潜りけん竟に往方をしるよしなくて五六日を經にければ時綱ハ擒捕たる十餘人の惡棍を率しつゝ浦田へ飯城し義堯朝臣に奏して疊六等が綽の顛末かちもなく時へあぐれば義堯これを勞ひつゝ宣ふやう彼疊六とかいふ强盜ハ烏破が牛を駐め項王が山を拔く力なくばいかにして時綱を討手に奏三十餘人の兵士を殺出て走るべきかゝれば繼橋素太夫が愛に不覺の鏃させしをさのみ勦り笑ふとかハ既に今月形の刀の賊を

しるよしも渠が計策より出たらば些い罪を貰ふに足れり但玄等輩の悪棍がさうす條壘六い磯山なる金剛神と賭のえて萬夫無當のちからを發たりといふ怪談い信がたしよしや彼荒寺の木像い千百年の靈物なりとも膂力をさづくる由こそあらね凡夫野人の所行よ齊しく野臥の悪棍の双陸をするとやいある是も彼壘六がおのが力量あるまゝよかゝる怪談を作爲して人を惑すよゞあらんずらんもし又そのを實ならば彼木像い國に益なし迷かに破却えて後の禍ひを釀んずと席を拍膝をすゝめ理を推て說示し給へば時綱唯々としてうけ給いり賢察明斷恐々道理に稱せ給ふかしかれども世には又理外のともなきよあらず莊子に所謂靈社の木が匠石の夢に入りしはいまだ怪しとするに足らず嘗て戰國策を見ていひしに老樹に靈あり人これをしれり賭博してわれこれよ贏ばその靈を二日貸といひて迭に勝負を爭ふ程に老樹は墓なく輸しかばその靈を貸たるに三日いはや過れども謀たるとなればその人靈を返すをなしまず〳〵償ればいよ〳〵返さず老樹は靈を失ひて稿枯になりしといふとあり靈は老樹の精ひよて神靈々佛の靈の如しこい一國の君として一ートたび權威を臣下に貸せば臣下の權威主君よまして償れどもこれを返さず國を奪ひ位を

奪み君を滅すの喩なれども彼と此とよく似たりかゝれば渠金剛神は未曾有の靈像なれども君もこれを崇給はず民もこれよ詣ることなく磯山寺の敗門ようち捨ておかし給へば利益を國に施すと稱ず實愚邪正の差別なく結緣のものに靈をよせて幾先の禍福をしめし給ふ歟是則ち理外の理也縱そのとなしといふとも彼靈像を尊信して慶びを招給はゞ土地は肥民は富て幸福あらずといふとなからんさるときは失はれし纖月形のおん佩刀も求給はずして返るべしさはおぼさずやと古實を引て叮嚀に回答まうせば義堯斜ならず稱賛し現時綱か文武よ長たるわが家の道灌なる哉寔に汝がまうすごとく神佛は民の仰ぐ所餘慶を求る正鵠なるに彼靈像を雨露に打して絶て尊信せざりしは國よ賢人ありといふとも用ひざるよこれおなじ日ならず彼金剛神を望陀郡矢倉村なる觀音寺へ移し奉つり新に堂宇を建立せんかへすゞも壘六を走らせえのみ憾し木を伐草を芟竭しても這奴が往方を索よと仰れば時綱いこゝろ得果て退出而て彼此へ令ながし壘六を躡索るといよゝ滋々嚴重なるに苗山刑監は素太夫が碁敵にてその交りも淺からねば渠が爲よ尊閑ならず件の賊を捕んとて只管便宜を求れとも絶て往方はしれざりける是より先飯沼丁七い撲傷り

たる膝の疼を忍びつゝ杖に携りて主の羅橋が宿所よかへり鮮衣に對面して疊六等が綽の趣き今も見るごとく告しかば鮮衣ハこれを聞て一トたびは計策の當れるを歡び又一トたびは寶刀の盜賊疊六を擊漏せしを悔歎きかくては瓦人に緣由を告まゐらせずばあしかりなんとて聽て丁七を將て案太夫が籠り居る便室に赴きて贋代寶刀の盜賊の發覺たるよしを告はじめより彼妖怪を假鬼ならんと猜せしかば別よ智術もあらんかとゝばゝゝ侍りしかど承引給ハぬは精やかに丁七と相謀て背磨たる錢を齎し渠を磯山へ遣しつゝ箇樣〳〵に謀しかば果してわらはが推量よ違ハず金剛神に打拔て引剝する曲者ハ乞目の疊六と呼れたる望陀わたりの野臥なりきその日折よく正禾殿が三十餘人の夥兵を將て畑塚を巡歷し給ふ馬前へ丁七は參りあひつゝ直さま報知背白錢を證據として十餘人の等類を矢庭よ搦捕せれども彼疊六は軒を傳ひ林よ躲れて往方しれずその故に丁七は膝頭を撲やぶりつ追慨さとよこそといへば又丁七は磯山にては箇樣〳〵畑塚よては如此〳〵と首尾りを演說しさても件の計略ハ奥がたの仰し隨正禾殿へハゆ主人の胸中より出れども盤居のゆゑよ行ひがたくて某しに命じつゝ形のごとく謀りぬと誠しやかにゆせしかば

時綱嘆息し給ひて繼橋微妙計りよけり先度の恥辱を雪んとこの擧にありと宣ひさればこそ守の侍氣色世の評判もいとめでたし吉左右あるべくゆとといふよ素太夫忙然とはじめて夢の覺たるごとく且羞て額を拊わが妻ながら鮮衣は世に有がたき賢女と丁七も又膽太し頃日汝が見にざるをこゝろ得がたく思ひつるよ吾にはしらさで磯山なる荒寺よ三夜籠り剩さへ万夫無當たる彼癩者を搦んとて來よ先だちて追かけしは命に掛替ありてのとか寔よ虎穴よ入らざれば虎を獲がたしと古人のいひし汝等が事になん血氣の勇は好むべきとにあらずと呟きける現鮮衣が賢才なる智はその良人の辱を雪てみづから功を功とせず貞操怜悧両ながら當今多くは獲がたきもの歟不幸にして女子と生れ文にも長ず武に疎き白面書生の素太夫を婿として恨まず嫌わず女兒搦も毋よ背ば久後さへに憑ふかるべし

○第六　榮華を宿の嵐に駭　繼橋宗郷が哀別の涙雨

かくてはや秋もをハりになりしかば矢倉村なる觀音寺に新御堂落成して磯山なる金剛神をこゝよ辻座し給ひしかば良賤更に合仰ぎて毎日の參詣途さりあへず斯まで日ごろ經よけれど墨六が

在所しれざれば有一日正禾時綱は新堯朝臣にまうすやう寶刀の盜賊壘六は遠く境を出たりけん安房上總いへばさらゑ下總葛飾のほとりまで隈なく索いへども絶て在所をしるよしなしかゝればば繼橋素太夫はその罪脱れがたきといへども妖怪の眞僞を撈りて賊狀を顯せしは渠が計略よつてゑあはれ蟄居を赦し給ひて壘六が往方を索ね寶刀を返し奉らせ給はゞやとまうすよなん議堯閑てうち點頭予も聚てよりこのことをしかせんと思ふのみまうす所予が意に稱へりけふを限りに素太夫が蟄居を免し得さすべしきかりとも實罰を正さずは獎善の道是より絶て恥をしるものなからん歟贅代の細碎の青錢これを失ふ共又得易し但纖月形の一刀のみ十五城をもて代んといふとも許ゑがれき事實なるに不覺よこれを奪れたる素太夫が罪輕からずよりて所領を沒收して一旦その墮窮を慰さん渠もし志素を激して八方へ遍歷し件の賊を搦捕り彼月形をとり復して歸り參る事あらばその本領を返し得させんさりとても渠今妻子を携へて遙き旅行に赴ば左に右に不便にして志素を遂がたからん葛飾郡眞間の里繼橋の別莊は素太夫が妻の父梁右衛門職之が先祖の出處なればとて私しの資財をもて十餘年前これを購め先塋の側らに孫て退隱の地を占て家作なども せしよし聞りこゝ予がとらせしものゝあらねば所領沒收の限りにあらず因てその妻と女兒を彼別莊にとゞめおかせよ素太夫か歸參を催す保質これにまするものなしかれらが月俸は形のごとく宛行ひ得さすべし又彼壘太肱三等十餘人の棍惡ゝその罪壘六に異なるものなりよりて一等をくだし得さし笞刑一百にして國境より追放よこの旨執達せよかしと嚴重にぞ仰せる寔に人世の榮枯得失は一炊の黍のごとしきのふは房總の嬖臣たりしもけふは東西南北の人となる繼橋素太夫宗鄰は罪籍既に定りて僅に妻子を携へつゝ眞間の別莊へ赴くほどに望陀の目代苗頃等鞫しき友のなきにあらねどみな守よ憚りてかゝる時には憑しからず況や奴隸小圃などは途一里とも送らずしておのかまに〳〵なりよけれど私卒飯沼丁七のみ志素はじめに變らず年七ッなる主の女兒楓を背負ひ鮮衣を扶掖き主從四人來里を遁れて下總へぞ赴きぬさはれ守のおん仁慈有がたきまでよ辱けなく件の寶刀をとり復して歸り參る事ならば舊のごとく召使んとて妻子を采地に留めおかれ月俸なども賜れば素太夫は今更に涙感を禁めあへずおなじ宿りといひながら途遠ければ妻や子はその名のみ聞て眞間の里の別莊に來てみれば先人繼橋梁右衛門が致仕せんと

きの閑居にとて七間四面の造家くりして茅屋ながら客房あり書院あり便室あり坪の秋菊園の樹柏部にはあれどみどころ多く第に鄰る大刹は則ち真間の弘法寺之真間の紅葉手兒名の神社はこの寺の境内よあり縞橋氏の先祖の墓もこの處よあるなるべし手兒名の墳墓は由來久し山部宿禰赤人が「吾もみつ人よも告ん勝牡鹿の間々の手兒名が真津城處「勝牡鹿の間々の入江ようち靡き玉藻刈けん手兒名しおもはゆと詠りしい載て萬葉集第三にあり又高橋蓮虫麻呂が「勝牡鹿の真間の井みれば立ならし水を掬けん手兒名しおもはゆと詠りきいおなじ集の卷の九よ見にたり又真間の入江縞橋は新勅撰集風雅集又代々の撰集は證歌夥見にたるを枚擧んはうるさかるべきさて彼飯沼丁七は縞橋氏に由緒あるものよてその本貫も下總の真間なり彼は年十四五の比上總の來里へ赴きて鮮衣が父縞橋梁右衛門よ仕えが一旦身の暇を乞て古鄕へかへり妻を娶て女の子ひとりを生つゝ渡島と名づけたりかくて女兒が四才よなる元妻身まかりきかばこれよりよづに便なしとて稚き女兒を城郭山のあなた國府臺の近村なる亡妻の妹よ托けて再び來里へ赴きつゝ亦縞橋氏に仕けりさて彼女の子渡島は年は櫛よ五ッの姉よて今茲はは年十二になりぬ丁七は主家の眼に志素を移さずして真成よ仕るものから訪ふ人もなき僑居の時しも秋の季なれば彼に就是よつけ心裏かなしきを慰めかねて國府臺の近村より渡島を召とりて鮮衣楓等が腰もとに便せしかば楓はこゝよ人間を獲て住も做はぬ宿なながら懶しと思ふ氣色なければ素太夫は稍こゝろ安堵て萬里の逆旅よ赴くとも彼疊六を搦捕て纖月形をとり復さずは生て家には歸らじなんぞ口よいいへど起行の準備もせざりえかば鮮衣丁七ハ忍ひかねて有一日首途の催促しいつまでかくて在すべき所領は沒收せられても守よ浸こゝろかはしまして久後のとさへよ淺からず間に給ふを等閑にしてこの處に月日を過し給ふとかは妻子のとは絆とせで忠を笠とし義を杖よして旅より旅よ年を經る共賊を撃寶刀を取て師り參らんとは思ひ給ハずやとはいへ果えなき旅を果しなく俟翌よりは夜の目もやすく合がたけん妻子の心をやすめんと思ひ給はゝ丁七を俱して旅行に赴き給へ悉よ悪えかるべしといへば又丁七も現奥さまの宣ふごとく干を枕に苦に寢宿志を果えき給はずばこの家を續給ひし先祖へは不義主君へ不忠こはまゝうまでもいはず某し愛よ撲傷りえ膝の疵は癒たれども彼疊六が骨石磯山で見しは夜陰のとゝ又畑塚で見しときは這奴手拭もて

頬を包ぬかくて捕手の兵士を斫拔てすりしときいはや貴殿よなりしかば定かに認めいはねど骨逞しく脂づきて體音は銅鑼を鳴すよ似たり物の役にはあず共留守には渡鳥もいへば某おん俱つかまつらんまづ鎖倉へや赴き給ふ與のかたへや赴き給ふと此彼齊しく激せば素太夫は赧然と慚て忽地貌を改めこの地の所聚果たれば聖明後の比起行せんとわれはや思ひ決めにければそのよしいまだ告ざりき然れども丁七を俱してゆかんは却て便なし且その故をいかよといはゝ羅網乏しき浪人の果しなき長旅よ從者あれば費多しこれその無益一ッなり又丁七は寶刀の賊を定かに認ざるよあらずやこれ無益の二ッ之縱ひ七彼疊六が相貌をよくしるとも卅餘人の捕手の武士を屑かずともせざりし癖者われに一個の從者ありとて力をもて勝べき事かはこれ則ち無益の三ッ之われ疊六を知ずといふとも鐵月形の識としてその賊を索ねなば有繋よ手がゝりなきにあらず生兵法は怪我の基之力足らずば賺すにしかずわがうへをもてこゝろよかけな丁七は留まりて鮮衣等を慰めつゝとにもかくにも仕なばこれに生す忠義はあらじとこゝろ得顔に回答つゝ請すゝむれども俱に許さず千早振神たちも出雲より歸り給ふといふ十月の晦日は特に吉日なればとてこの日を有途と定めよければ鮮衣はかひ〳〵しく良人が旅の裝ひなる夏冬の衣裳はさらゝ甲掛脚絆笠の紐まで殘りなく整へつその拂暁になりしかゝ別留の器に殺して仇に勝栗打鮑春はかならずかへるといふ雁の羹のよ小松河の青松をあはせしは良人の歸參を祝くならん素より儚罕なる賢妻只その良人を激して功成名遂んとをのみ願しと思ふ誠心もて涙一滴落さねど今ぞわかれになりぬと思へば名殘惜さは一としほにて泣く歎きはなほくるはしき曾に痞のやるかたなきに女兒楓い親にましたる竹の節わきて生れけん赫奕姫とも見るべかりける縹致の愛たきのみならで幼稚けれども孝心ふかくかゝる時にも大人しやかに父上何處へ赴き給ふ旅する人を俟ばかり悲哀きものはあらじかしときのふ母うへの宣ひをけふの事よぞあらんずらん心もとなく思ひ侍りはやく歸らせ給へかしといひつゝ酸鼻む子より父はさらゝ母親はかしこき子やと引よせて一度に濡す袖の雨晴間は絶てなきものから素太夫は假初ながら八年結びし妹夫の緣を絶とし もなく妻よ別れ女兒を抱めて出てゆく淳干髢が蟻宮を送られ浦島の子が蓬來を去らんとせしもかくやと愛て汲ど拭へど涙の泉はながれて鍋ぬ哀別離苦徒も理り此も又理りなるをとわりとて

思めかねし丁七はもろともに物思ふ渡鳥を叱り立して笠よ杖よといそがせばあるじはこれよ激されし草鞋の紐を引結び異なくをいせよ恙なく皈り給へと父子夫婦が一句に契る餞別喪うちかみ玄紙とゝもに思ひ捨てもなほ濡らす袂をやがてわかちけりかくて飯沼丁七はその日あるじを涙りつゝせめて今宵の宿りまでとてはや三四里も來にければ素太夫しば〳〵これを禁めて隅田川のほとりより丁七を返しつさて何方をか投てやゆかんと暫時堤よ躊躇てひとりつく〴〵と思ふやうわが父は明國人よてはじめは性名を朱編と呼れ妻もあり子もありけるがいかなる故にやこれらを捨てこの大日本へ參りつゝ名を宋素卿と改めて華洛よのぼり室町殿よ昵近し又更に妻を娶りて吾儕を擧給ひゑゝかくて又故ありて明朝へ使して彼國に留めたる妻を索ね一子よ名告あひその事忽に發覺て親子もろ共墓なくも罪せられ給ひしとぞ父は日本に明國よ二人の妻あり二人の子ありそれ故よこそ哀別の涙に袖の乾く隙なく罪人にさへなり給ひきこれらの業因なほ滅せずや吾儕よも又二人の妻あり子は三人までありながら離別の哀しみ絶る隙なく前妻片埜両個の女兒は存亡今は定かならずわれ不慮過失して又後妻のこれに生せし女兒に別れて異しなさ

逆旅にひとり伸吟と過世いかなる悪報やらんかくまで命運薄くて面を認らぬ強敵の盛六を聟眷して縁月形の一刀をとり復んとおぼつかなけれど相續したる織橋氏わが過失より斷絶せば不義を憎み不忠を咎て天皇いかでか祐給はん只命運を天よまかして神佛に誠を告一トすぢに月形の寶刀の所在を穿鑿し絆の便宜に上野より越の州よ赴きて片埜暦草紅皿等が往方を索ね生死を問んこれ將神明佛陀の冥助を憑み奉つるより外よ術なしと腹裡よ尋思しつ驅て上野へ赴く程に途よ神社佛閣あればかならず立よりて宿願を祈念するに千社千院に滿せんとて紙を剪て姓名を寫し詣づる神社佛閣毎に件の名簿を貼るといへども織橋素太夫と君顕さんはさすがにて里見家へ憚りあれば廻ち舊の名を寫して唐縞素二郎宗郷再拜敬白とぞ書たりけるかくてその年を上野四墓しつゝ次の年ハ下野より信濃越後を遍歴するよ縁月形に似たりと思ふ太刀をだよ見る事なく前妻片埜女兒唐草紅皿等が生死存亡もしるよしなくて又いたづらに暮しつゝ明れば天文十年彌生のけ更に上野まで歸る程に去々年上總の檜楽にて假二王に投られたる撲傷俄頃に再發して歩行難義よ及びしかばこゝろまずく安からず湯治せば速かよ愈る事もあるべしとて四月の上

浣に上野なる草津の温泉に赴きてこゝに逗留する程にひとり徒然に得も堪す素太夫固より碁を好めば只管友を求めつゝ碁を圍みて日を暮すにひとりの碁敵をゞ得たりけるその人身丈高くして黒色く肥脂つきたれば絶て病者の爲躰よ似ずされ物のいひざまゝ殊更に慇懃にて惡心あるべき人とは見わず碁は極たる上手ゝこれゝ是いかなるものゞ張數既に滿たれば卷を易てこれのよしを亦復記すべきになん

○第七　鳥夜に迷ひて魂を撲　天目洲助が再杖の草枕

霜橋素太夫郷ゝ纖月形の寶刀の盜賊疊六を索ね難て旅宿すること三年よなりて天文十年の夏の比俄かに撲傷再發して行北はと〳〵難義なれば草津の温泉よ赴きてこゝよて湯治するはどにいとゝ徒然なりしかばわれにひとしき旅人と碁を圍みつゝ日を送るに一個の友を得たりける抑〻上野國吾妻郡草津の郷よ温泉あり京を去ること百二十里武江を去ること四十八里信濃なる輕井澤より十里にゝ過ざるべしこゝに寺あり光泉寺と號す南の高嶺を背よ去て藥師如來の本堂あり所伝草津の藥師堂これなり堂の前面の西のかたに鐘撞樓あり念佛堂あり東のかたに湯塚あり又その東は方丈ありこゝより北へ石坂を下れば則ち神社あり温泉權現とゞまうすなる當社の鷄栖は坂の下ゆ座の湯のほとりにあり鷄栖に並びて東の方よ藏菩薩を安置せり又その東よ竈あり井粕を設てその湯を受く則ちこれを井戸といふ井戸よ對ひてゆ座の湯あり又その北よ脚氣の湯あり左右に熟の湯綿の湯あり又その前面に瀧の湯ありこの湯桁ゝ廣大なり北に數間の浴室なり桁三方に圍垣して入口左右に鷄栖を立つ湯桁の西よ不動堂あり此東西に客店多しこゝ中町の北の側南側と唱たり是より下よも客店多し瀧の下則ちこゝなり又その東よ鷲の湯あり町の盡處より入山道信濃路とて三すぢよわかる彼中町の南側を南へ登れば立町ゝ又この南ゝ新田町この處にも人家多し町の出口よ鷄栖あり又中町の南側の東のかたよ地藏の湯ありこゝらを褰の河原といふ大日堂あり不動堂あり北のかたを馬場といふ又中町の北側より西へゆく横巷路を鬼が泉水道と名つけたりこゝより西に流水ありおかれを唱て其昌港ありこの流水の淵源を鬼が茶釜と唱たり南のかたよ巨石あり是なん力石といふ石より東に金昆羅堂あり數十階なる石阪を兩坂下りて鷄栖を建南よ瀑布あり名を問へば常帶の瀧といふ羊腸たる山ふところを洞内潛りと瞭徹あり

布より京の田間を氷谷と唱つゝ西を仙現山といふ氷谷より南の山の麓に疎生河原ありこのほとりより西南なる高嶺を白根山といふこの山硫黄の火氣烈しく熱湯散乱近づきがたし又正一位白根の神ハ光泉寺の東南に則ちこの本社ありこゝに寺あり無線寺といふ阿彌陀堂あり東のかたよ白根明神の鶏栖あり鶏栖の外面地の隅は新田町の霊處にして西ハ在土道東のかたは澤渡道とて岐道あり此湯むかしハいかなりけん近世諸病に效ありとて夏より秋のはじめまで彼此人こゝよ諸來て山里ながら熱鬧へりさる程よ素太夫ハ合宿したる旅客よ志素の似たるもなくて多くハ只むくつけき田舍見のみなりしそか中に碁を能する旅人を武士かと見れば武士ならず商賈かとおもふにさもなくて物のいひざまよ鄙なから都の手ふり何となく心得顔なるをのこゝ彼もわれも好む所ひとしさをもて假樂に友垣を結ぶ程にその本貫を尋ぬれば彼人答て某し元來近江のものゝ所縁に就て下野に赴き又陸奥に赴きてをさ〳〵相撲を習ひつゝ既に二段の幕よ入りて紅葉嶋と呼れしかるにいぬる冬の相撲に朽をしくも不覺をとりて左の腋を折れよき其ときいさばかりのことならんとは思ハざりしにこの春俄頃に撲傷起りて力業なをすべうもあらず人のよしといふ療治は此彼と手をつくせど敢果〳〵しくは驗も得見ゝず此草津の湯ハとりわきて撲傷よよしといふものあればはる〳〵と來ぬる甲斐ありて大かた疼痛を忘れたりといふに素太夫點頭て現この大漢子が爲躰相撲とりよゝあらんずらんと思へど有繋よ心を放さず其行李などをつら〳〵見るよ長やかなる刀一腰あり又周八九寸なる巨竹の六尺あまり有けるを常よ坐右に引着て秘藏すとかぼしきにこれ將こゝろ得がたきをこゝ見ばやと思ひてその隙をしのび〳〵よ窺ひッゝ一日又紅葉嶋が起臥する貸座舗へいゆきて見るに罕にしてぬしはをらずけふなん日來の疑ひを散さずば又何の時を期んと衝と入りて浴衣もて敢かくしたる件の刀を撈り出しつゝ遽はしく拔て見れば無惨や眞の刀にあらで俗にいふ竹光なりしかば呆れてひとり舌を吐き鞘へ納んとしつる折紅葉嶋は彼巨竹を衝ゐてかへり來つこゝハ唐縞ぬし何事ゞ人わろきとし給ふなと詰れて素太夫は顔赤やかよ手に握る汗を跡着く鞘を拭ひてさゝらぬ如く莞爾と笑みなゝき此日の暮しかたきにけふも一樂試みんとて和殿を訪ひつゝ待ほどに吾像固より太刀を好めば思はず無禮なる所行をして愧てゝいひとく辭なし許玄給へと叮嚀よ勸解られてうちはゝ笑み心くまなく譚ふ人を疑

ふて苛く咎るよあらず愧べきとは吾儕よありはや見られては隠すよよしなし去迚よりこの身の病者に世わたりの便りを失ひ剩さへ腦療に出布を竭してさてこの處へ來つる故に路費とて多くもあらねば衣裳はさらなり履の物さへ質却して見せかけばかり刀に代たる竹鎧は撲傷に懲て人よも身にも傷をつけじと思ふ用心かならず笑ひ給ふなといへば素太夫嘆息しぬも亦故ありて久しく放蕩をするものなれば經費乏しくなりぬれば四海みな兄弟なりと思へば自他の差別はなし物不自由よをいすゐなりしばまづこれを選ひ給へといひつゝ行纏より粒銀三四顆撈り出して紙に捻りて與るは漫よも手を出して人の刀を見し漏失を貴はん爲なるべしといはや猜して紅葉關へしば〳〵推辭て受納めず素太夫へこのときよやうやくおちゐて又いうやふ是將失濫なることなから刀の謂れへこゝろ得たり又その竹へ何等の故に秘藏せらるゝとやらんと訝れば紅葉關されば又この竹よも心をこめたる緣故あり刀は只今見られし如く腰よ佩とも憑しからず山路越來る獨行独事なる時へ杖としつき事あるときはその仇を禦ん爲に携へたる此巨竹の節を拔て内よは米を入たる也こゝ迄來ぬる途すがら宵々毎の木賃宿米へと問ばこの筒より五六合つゝ割り出

して炊しているひきこれわが爲の打出の槌一物よして三用を斯まで兼たる竹なればいかでか秘藏せざるべきこれ見給へと取なはして膝のはとりよ推傾くれば米はら〳〵とこぼれ出づ素太夫へ是を見て旅に熟たる此人の心かきへを嘆賞玄疑念氷の如く釋ていよゝ他事なく交りつゝ有一日もろ共に渕よ入るに紅葉關が乳の下よ洲濱のとき痣あるをはじめて見つゝひそかに疑ひその日傍に人なき折紅葉關と江湖上の物語する序よ件の宿のとを尋て顔をつら〳〵うち瞻めもし和殿が乳名を洲之助とはいへざる歟と問ば亦其顔をとさまかうさまよ打目戍この痣をもてわが乳名をしれるおん身はいかなる人ぞと研れば小膝をすゝめ疑へしきは理り也わが前妻は和殿の妹天目隼人主の女兒にて名を片埜と呼れしもの也某しも又天目ぬしと共に京都の管領家よ仕へたるものなれど和殿が父に逐れし比へわれも又切弱にて對面したる事もなくそれより遙に年を經て片埜を娶りしかば某しと妹夫とし𠀋るべきよしもなく和殿は親の古主に仕しわがうへ思ひかけぬなるべし内兄の事へ片埜が年來日來おもひ出いひ出て泣たりき渠のみならず両個の女兒唐草紅血と名つけたる是將が往方なくなりて今へはや十年を經たりその故へ箇樣〳〵と管領高國滅亡

の後天目法印を心あてに親子四人患苦して南の果へ赴く折仁田山の危難妻子の離散おちもなく説しらせかくてわが身ひとつゝ上總國へ流浪たつ故ありて又妻を娶り女兒さへ娶たる家ゝ下總の眞間にあり然れども片埜と彼が女兒のみをのみ年を經るまゝ忘れがたくて去々年没し家を出上下なる毛國より越路の果まで染つゝ神社佛閣に願をかけ詣る毎に名聞をとゞめてその數ゝ千社と定めはや一萬社に及べども恙なしとも死りとも妻子がとゝしるよしなくはからざりける前妻の舍兄にあふも竭ぬ殺今面前り片埜に環會ぬるこゝちするこゝ神佛の冥助と思へば又ゆくすゑも憑しく欽ばしくこそゝへとこゝろの誠うち明し綣委細に告れども有繋に愧てや里見に仕へ羅橋氏を相續して織月形の寶刀を失ひ所領を没收せらしとゝ聊かも物がたらず洲之助は妹のとまだ見ぬ兩國の姪女がを聞に堪ずやゝふり落る涙をしば〳〵かし拭ひわれ總角の比よりして只わろき友によのみそゝのかされつゝ親の家に身をおきかねし今は此ざま皆是不孝の天罰と思へば身で身を恨るのみそれには遠か昔まさる妹夫婦が溺命ゝ過世いかなる惡業ならん想像だにいと痛しこゝにまとすゝ〳〵先非を悔む親同胞もなき身には實の弟と思ふなる和主によあふは片埜に再會せしに異ならずさるときは眞間に在す後妻どのはわが妹又令弱はわが姪と思へば迭に憑しからん又彼天目法印は吾儕に實の叔父なれ〳〵使ふればその齡も六十を遥に越給へば恙なきとは定めがたし只片埜とふたりの姪女と三人に一人は顯身の世に生殘てなからずやは今より和主に力を戮して彼等が在所を索なん心つよくをはせよといと眞成に相譚ば紫太夫ゝ感謝に堪ず頻りに眼をうちかみけりかゝりし程に紫太夫は思はず草津に夏を過して法や魂祭る秋にぞなりぬさらぬだに路費竭なんとする長旅にゆくりなく洲之助が房錢さへに賄へば今は久しく滯留ぢがたし輪に眞間へ立かへりて又更に路費をとゝのへ彼溺落どのが心操を察究て後織月形の寶刀の事を告て賴まば蛇の道は蛇こそゑれ思ひしよりなほわが翼にならるゝことも多かるべしと腹裡に尋思ゑつ有一日洲之助にいふやう旅にあること三年に及べは憂事のみぞます鏡家なるものも心もとなし和殿に環會ぬるかひにはなは相譚ふべき依しあれどもこの處ではそれも便なし痛處もまつたく愈たればもろ共に裏飾なる眞間の家路に赴くべしといそがし立れば洲之助はしかるべしと應つゝ次の日草津を發足す夏寒かりし山里を立出て見れば秋ながら更に殘暑に堪がたくて朝と

く走りて豊は留り夕は遅く宿をとりつゆきく〜て武蔵なる國境限を過るとき日いはや西に沒にけれど只管途を食りて桶川までと走る程よ今宵は野干玉の烏衣なるに天さへ俄頃に結蔭て咫尺の間も黒白をわかず迷ふ途を迷はじとてその名を呼つ呼れても里遠離る安通廬がすゑの曠野を過れは壁も届かず素太夫は洲之助よ後れにけりと思ひしかば追着とてます〳〵走り洲之助は素太夫が來るを俟とていく度か立在ほどにいよ〳〵後れて間遠かに隔りぬかくて又素太夫は其處ともしらぬ闇き夜よ辛くして十町あまり走りつゝ呼ど洲之助は絶て應をせざりしかば原來背後より來るよやあらんかくまで先だつとはあらじあな鈍ましと呟きて思ひかねつゝ立在折忽地赤子の暗壁す怪しきかなかゝる夜よ野面よ誰か子を棄けん思ひがけずとひとりごち聲をしるべに右手のかたよりいや棄子よはさむらいず吾婦村より再枳の里まで暮てゆくものゝ倶せしをとてが枳明をとりて來んとて引かへせしを彼首よ立是首に待心くるしさ猜し給へといふは正しく女子の聲なり素太夫つら〳〵透し見てこゝらわたりの人なればこそ鼻抓るゝだも得しらぬ烏夜に赤子をかき抱きて來ぬ人をまつ雄々しさよわれは又桶川へ宿りをいそぐ旅客なるが伴侶に後れて迷ふかしといへば女ゝ啼兒を揺揚原來かん身もこゝに立て後れし人を待たまふ歟いと恥はしきとながら内逼りて堤がたし淨手せん間しばしが程この子を抱きてたひてんやといふを素太夫聞あへずそはいと易きをぞかしとくこなたへと撈りよりてやをら赤子を抱きとれば女ゝいとも欽ばしげよかゝるをりにも幸ひありてよき手代りを待侍り玄且く其處にと遽はしく消水を尋ねて三反あまり走り去しが遂に歸らず素太夫は小鹿の角の束の間と思へばこそしらぬ赤子を抱きもすれよしや彼をんな癪渇を遣ばとて今は十遍も百遍も呼し果る比になん何處ゆきけんかへらじやと腹立玄さゝ聲ふり絞りて呼ぶにその名をゑらざればこや喃この子の母親前としば〳〵呼へども歸り來ずこゝ不審と疑ひの一ッ起せば又ひとつ抱ける赤子は忽地よ得堪ぬまでに重くなりてその冷きこと鐵のごとしこれはいかにと胸うち騒げど拾てゆかんは有繋よてわづらふのみ術なき折こゝらに近き里人なるべし蕉火高く照さして早桶とかいふ棺を舁つゝ三人野を南へ物牒く〳〵しく相譚ながらゆげもなく過るもの道の邊に立在たる素太夫を見て火をさしよせあな訝しこの仁ゝ石の地藏を抱てをり狐に眉毛や撰れけんといひつゝ咄と笑ひしかばいじめてわが身を見

かへれば赤子にはあらずして現苦むしたる石佛をいとをしげにゑ抱たる淺ましくも面なくてそがまゝやをら傍に投捨彼逝輩人を呼留めてわがうへ件の女がを告れば衆皆目を注こて聞けば狐狸の所爲なりけんとはいひがたしおもひ合するをもあればそゝ彼產婦の化するといふ姑獲鳥にゑあらんずらんあるまゝよいへばこの早桶もさるすぢの浮屠家よて緣故因緣稱々なれと明白にはいゝぬもよゑかゝる怪しき夜に盧ゝとこゝにて人を俟は危し吾們らゝ再杖なる茶毘所へとてゆくもの也こゝと彼處は一トすぢ道にて紛ふべうもあらざれば後れし人は招かずも集合んこれらのとは念じずに棺に跟て來給ひね今逝らるゝ中途にて六道能化の地藏菩薩よ値偶する亡者は來世やすけんしかるを捨んゝ物眛なし石塔代にもてゆかめと云つゝ棺を舁おろして彼石佛を鄰乘せ思ふにまして重荷よなりぬ跌きて浮屠家ゑ滾すな心得たりと諸肩合して擡げ起せば素太夫も他生の緣の糸薄ほかげを借る黑繩地獄ゑらぬ亡者を茶毘逝りゑて轉ぬ先の用心よ再杖村へ伴ゝるかくて彼里人は間あらゝなる巷衢へ早桶を舁入れば俘坊とか呼るゝゑせ法師出迎てこれを受とり珎藥たる茶碗三ツ四ツ緣は缺たる盆よ乘せ薄くとも茶をめせといひつゝ出すを皆とりてすゝり飲つゝ俘坊よ素太夫を指示しこは逝葬の人にはあらず後れし伴を俟んとて闇路に迷ふ旅客なりやあしき物よあひ給ひしを正しく見もし聞もゑつればいと痛しきに將て來しをりもし彼侶伴が尋て來ずば今宵ゝこゝに明さし給ひね緯の序でよ此菩薩は同宿よ進らするこれらの故は如此〳〵と姑獲鳥の怪談を辭せわしく物がたり翌ゝつとめて灰よせに三人に一人又來べしし らるゝ執念深亡者なればよく燒給へと嚣しく散動ながら石佛を門の柱よ倚かけて素太夫よ別を告松續かにて歸けり俘坊ゝ素太夫が緯の趣き聞しより叮嚀に慰めつゝこなたへ入りて憩給へと只管に呼入るれど素太夫はとよかくに後れし人のみ心にかゝれば聽しつゝも諸折戸のほとりに立てこゝを過る人もやあると俟ほどに洲之助ゝ茶毘の光りを遠に見てやたどり來つ迭に是ゞを逐しながめて唐綿ならずや兄公歟と問つ問れて遽ゝしく折戸のほとりに走り着さて尋たり迷ひにき和主ゝ正ゑく背後ゟ來とおもひよければしば〳〵立在某しゝ又兄公よ後れたりと思ひしかば直と走りていとゝしく人をも身をも勞したり誘給へとて草衢の緣頰に尻を懸素太夫ゝ姑獲の と又茶毘逝りの里人等よ伴ゝれたる緯の趣き委細に物がたれば洲之助聞て眉を皺めわれも又來

る途まて奇しき物を獲たるなりこゝより十町ばかりあなた北より南へ下る坂にて一團の光物わが後より閃き來て袂の下を摺脱ゆくこゝ世にいふ金精ならんと思ひよければ遁りも過さず扇を揚て打落ち拯撈見れば果して物ありこはゆくりなき貨を獲たりとひとり笑して手拭へ彼金精を推裹み袖よ抱きてもて來れりしかるよ和主が姑獲鳥に石佛を抱かされしといふをもてわれも亦打落せしものに疑ひあり眞の金にあらざる歟今眼前りよ披きみんもし金ならずは錢になれ石になりそと祝しつゝ推囲めたる手拭を袂の裏よりとり出せば掘炕に寄りて蚊遣するぼう坊はこゝろ得て指燭してさし出し三人瞥一これを見るに彼手拭よ包みし物は綺りの斷離たる手毬の如く又腐たる雪花菜に似て臭きをいふべうもあらずとは什麼何ぞと呆れまどひておの〳〵鼻を掩ふのみ茸狩すとて野糞を抓み闇に渦して屎檜に飲む後悔これと異ならでひとり腹たつ淵之助は人を恨るよしもなく頻に嗟嘆したりしかば御坊は叉きたる手を釋て小膝を皷各位何とか見給へるなでふ金精といふものならんやこれは是人魂なり人の命の終るとき三魂は天よ歸り六魄は地に歸る魂ハ一氣の凝れるもの天に等うして形なし魄は動作精爽を覺るもの地脉よ類してその迹あり人將に死んとするとき體を脱て夜光を發ち須臾中天に飛行すなるを俗に人魂と喚做ども魂よはあらず魄ゝと昔時本山の説法に一善知識は説たまひきしかるに人もし誤つて彼人魄を打落せば死人永劫中有に迷ひてゆくべき所へ得もゆかずその人よ祟るなり此により打落したる人魄を叮嚀に葬りて四十九日の追薦讀經眞言に施行せざればその人件の祟よりて頓死すること七日をまたず子孫も繁昌するとなしかゝればこの仁命危し無聊なる所行したまひぬと眞顔になりて説諭せば淵之助聞あへず冷笑ひ祟を説ばさもこそあらめさりとて是は世に罕なり證據なくては信がたしと語れば坊眼を睜りよに死靈生靈の祟よ命を隕すもの今も昔もなきとかは譬ば今宵煙となす此早桶なる亡者の如しこれに亦一條の奇談あり疑はずよ聞給へとは國府隅へはど近き吾嬬村なる莊客の杼二郎平が後妻よ根坂と呼れし醜婦也心ざま頑嚚にて妬む事酷だしく常に夫を馬虐ぐれど杼二郎平は妻も惡もおさめたる男なればそが妻ゝに角口せず只理を説て彼を窘め前妻羽生ハかん身に似ず人づきもよく夫の爲世帶の爲よなりしもの也彼を思ひ此を思へば世になき妻のみなつかしといはせも果ず妻は眼を瞋らし齒を切ばりかく迄思はゝ前妻ともろ共

に死ずしてなどて吾儕を娶り給ひしあら妬や腹たゝしと聲を限りよ罵り狂ひていひこしらゆれど絶て聽す両三日狂ひつゝ遂に病ひ牀にぞ臥ぬ此とき後妻根坂が腹よ九个月になる子さへあればよしなきをいひけるかなと夫も流石よ後悔して看病閑ならざる折前妻羽生が墓のほとりよ夜な〳〵寃鬼出るとて一村をさ〳〵風聞せり杼二郎平ハこのことをはや傳聞て思ふやう日來根坂を諫かねて前妻羽生をなつかしとよしなくも思ひしかば彼が墓よ妖怪出てかくは根坂を惱する歟なでふ眞の寃鬼ならん只虚に乘て障碍をいたす狐狸の所爲にこそせんすべありと人には告ずこゝろひとつに思ひ決めて鞘よ斧を引提つゝ初更の鐘の鳴ころよ件の墓所へ趣きぬ固より田舍の事なれば父母先靈の墓どもは家を去事はづかにして豌豆畠のめぐりよあり去程よ杼二郎平は前妻羽生が墓の背ろ榛樹の蔭に躰れて彼寃鬼の顯るゝを今か〳〵と俟つゝをりかくて夜は二更の比とおぼしきに來るともしらず出るともなく髮ふり乱せし女の姿忽然と顯れて羽生が墓を責敲き何事やらんぐど〳〵と罵る聲ハ定かならず杼二郎平ハその好景を見定て狙近づきやをれ畜生甲夜より俟しをしらざるやと罵りながら斧を揚跳懸りて妖怪の頭を磐と砂しかば苦と一聲

叫びあへず形ハ消てなかりけりさりとてぬしハいよゝ怪がず手元疑て一撃に打殺し得ざれども野狐ならはいたく懲て再ねてこゝへ寄も着じとひとりごとして斧を突立鞭て宿所へ歸りつゝ病牀をさし覗ば思ひかけなく後妻根坂ハ眉間より髮の中まで砂れしごとく痣になりつ大きなる腹をつき出して仰さまにぞ仆れたる死ざまさへに怪しければ杼二郎平ハ駭きまどいて鄕家人を呼起しみなもろ共に介抱して湯薬を口へ沃ぎ入るれど既に絶斷たれば救ふべうもあらず杼二郎平ハわが斧より妻の命を斷にきと思ひにければ件の趣き隱さずこれを物がたり前妻羽生が墓のほとりへ夜な〳〵出る寃鬼ハ狐狸の所爲ならんと思ひしハわが悞ちにて質を推ば妬ふかき彼妻根坂の生靈が前妻の墓へ顯れ妬し憎しの恨のかず〳〵罵りけるぞ不思議なるさればこそあれわが斧に頭を擊れし怨靈の形ハ滅て家よ居る根坂が眉間へその痕癒り忽地命を隕せしハ世よも稀なる事になん根坂は素より頑嚚に妬る婦としりつゝも某し日來よしもなく死せし前妻を讃しかば渠ハ偏よ朽をしとて瞋恚のほむらよ病煩ひ魂ひ夜な〳〵脱出て羽生が墓所に顯れけんこれが腹よハ遠からず分娩べき子もあるものを無悲なる事してけりといひッゝ奥をうちかめば衆皆〳〵ふた

たびうち歎きよに前妻の死靈が憑て後妻を惱ずる物語ハ多けれど後妻の生靈が前妻の墓を責しハ現未曾有の怪談なりかゝる珍事のいで來るも過世の業因なるべければ只なき人の追善こそ肝要なれと諫しかば杼二郎平ハ歎きよ得堪ずその夜頭髪を剪拔て法師にはなりしかど羞てや奈毘の送りはせず甲夜よ棺を舁もて來つるは彼をとこの隣家人或ハその友だちゝさる程よ件の怪談次の日ハはや語つぎてこゝらまでもしらざるものなしゑかるにおん身両個の客人一個は姑獲鳥に擬見又一個は誤つて人鬼を打落せしこの夜この途みなこゝへ集合し事も亦だ奇異也これらによりて推量るに姑獲鳥も人鬼も件のをんなに疑ひなしその亡骸ハこゝにありかばかり正しき證據はあらじせめて翌一日ハ此ところよ留ゞてこの人魄を厚く葬り祟を附れ給ひねと眞成に勸れば素太夫耳を側てゝ菴主の教誡説得てよし路費乏しくなりぬれど故郷へはやゝ近づきぬいかばかりの施物を出さばその祟を脱るべきと問せもあへず洲之助ハ素太夫か袂を引嗚呼なる事に謀れ給ふな怪談して人を惑はし祟を説て施物を貪る彼等が世詞生活なるを實言とゑて可惜路費を失なふは愚なり實事めかせしゑせ物語をなが〳〵ゑくして夜を深し宿錢さへ一倍よ物にせん賢僧が庭意かゝづらひをる眼はなく亥中の月ハはや出たるに誘たまへと引立れば伊坊は勃然としてこのをとこが口のわろさよ人を救ふは彌陀の本願慈善は出家の面目なれば誠心をもて説諭すをかのがこゝろよ推くらべて施物を貪る賢僧とハ無佛無法の愚物かな七日をまたで枉死せん死灰に等しき汝よ對して理非を論ぜんハ無益なり後悔すなと罵れば洲之助は怒とゝもにまけじと詈をふり發しほざいたりゑせ入道七日をまたで死ぬるといふ我この拳を喫して汝よ冥土の郷導をさせん其處な退そと摺狂ひて竹椽へ跳上るを素太夫は後より遽はしく抱きとめ組つほぐれつ辛じて外面へ引もていでさま〳〵に宥め諭して桶川へ赴きつゝ門の戸鎖て臥たりし客居を敲き遲して墓なく其處よ明しけり

○第八　夢を占して仇を擊　烈女鮮衣が嗟嘆の霧海

旦洲之助は起て素太夫を呼覺すよ果敢〳〵しくは應へも得せずしば〳〵呼れて頭を擡げ某し昨夕臥てより胸痛てねぶられず今なほおあじ心持なとかくては勉て起ぬるとも路をゆくべき氣力はなししかいはゞ女々しとて笑るゝかはしらねども羅るともなくて目陲し夢の中に眞間なる

妻と女兒とを正しく見たり彼等はいたう病衰弱て三年經るまでかへり來ぬ吾僻を恨るかもうちなりやこれのみ心にかゝれども其の病者をいかにせん願ふは兄公樣しに先だちて眞間に赴き遲くとも墅の比素太夫にかへり來と妻鮮衣よ告てたべ思ひほそりて病煩ふ女房子どもに良藥はこれにまさるものあらじかし胸痛はわが持病なれば必ずおこたりなんもろ共よ留りて見とらるゝより庠嗚もいやく彼處へ音耗を問し給はゞいかばかり欽ばしくこそいゝめといひあへず船を掛かろせば洲之助これを聞果ず心よゝき人にぞある和主が俄比に胸の痛きも家なる妻子を夢に見つるも昨夕賢僧が怪談よ怕神の憑しゝかゝるこゝろの惑ひより病とはなり夢とゝなりぬしかりとも彼處へ音耗せよならば露ばかりも推辭ゝせずこの桶川より眞間の里まで數れば坂東道（六町一里）九十里よ足ざればけふの蚤こゝを起とも墅の亨午に彼處に到らんそは夫よして保裝し給へ藥やあると行囊を搔撈り湯を乞つゝ丸藥を飲ゑなどゑて叮嚀に勵れば素太夫ゝ欽ばしげよ病を忍び墨ヰをとり出てわがうへ洲之助が素性など大かたよ衛寫め卷こめ封じてさていふやうこの一通ゝ兄公の事をこゝろ得さする紹介なれば妻鮮衣よ遞與給へ唐編素二郎とたづねではしらざるものもあるゝけれどわが家は眞間の里なる弘法寺のほとりにあり東西なる街門の右手のかたに梢高き槐木あれば名を問ずとも索ねまどふ事はあらじとく〳〵といそがせば洲之助はこゝろ得果て彼一通を受とりつ袱き包を脊べ投掛端折結ぶもかひ〳〵しく左手に菅笠かいとつて右手よ巨竹の筒を引提て素太夫に別を告宿のあるじに彼人の看病を委するとて懇ろに憑聞ゐて遽しけに走去けりかくて天目洲之助は桶川の驛に出るとやがて歩の運びをいそがしつゝ町屋村のあなたなる曠野をひらり過る程にいと怪しげなる旅客二人端なくこれと行あひけり彼等は環て洲之助と相認るものなりけんこれは〳〵と彌近つき三人松の樹蔭に集合て何事やらん暫時密語呵然と笑ひなどして彼兩個の旅客はこゝより途を引かへ去洲之助が後よ跟き先よ立つゝもろ共に東のかたへ赴むく折柄猛猪にやあらんずらんその大さ犢に等しく肥きの如き牙を反らし針より鋭き鬣みを逆だて踵を鳴らし鼻嵐を吹し木根ゐ稜嶮ひなく時狂ひて走り來つ兩個の旅客これを見て吐嗟とばかり驚きまどひて一個はふりたる楓枝に攀ぢて屋登り一個はこれを左へ避て二三町遁れれば野猪は彼等を見もかへらず猛直よ時り來て洲之助を掛んとするよ洲之助は些

も騒がず結べる笠の紐引解離て掻投捨つゝ閃りと過彼長筒を盾にして雄手へ繞り雌手へ走らしとさまかうさまに遁錯して両三遍疲らしつ足を飛して礫と蹴るその音竹を破るごとく野猪は助らうち折れて得堪ず撞と倒るゝを起しもあず乗ゑ掛つて吭を楚と隘蹴れば血を吐く事夥多しく四足を揚て死でけりこれを遙よ見る旅客等は毛骨竦て舌をふるひ彼雄略のおん時よ葛城山の御狩の野猪もかくやありけんと賞嘆して杪なるはやをら下り立逃走れるもかへり來て或は呆れ或は欽び今よはじめぬ大哥の大事牛に等しき暴猪を只一足に蹴殺すと新田四郎忠常なりともいかでかこれよ及ぶべき吾儕けふもし大哥に遁ずは野猪の牙に掛られて命はこの野の露と消なん嗚呼危きかな危かりゑといひつゝ汗をおし拭へば洲之助莞爾とうち笑てわれ思ふ旨あるをもて汝等よわかれし後はかゝる太事を顕さず狐の最期屁狸の陽滅叶ぬときのかくし藝けふ宮に一生懸命己とを得ず手をくだしぬかならず人よ告るなといへば両人はうち點頭大哥の遠謀猜したりしからば野猪もこのまゝよ售なば銭になるべけれど肩勞しの小利は大損うち捨てとく逝ねゆきねくと誘引て安鶏尾のかたへ走せ去りぬ不題下總なる真間の莊には素太夫が妻鮮衣行狀正ゑ〻家を守りて女兒櫻を養育し毎日に是に手習させ縱將の事を諫に絃竹の調さへ大かたならず儆するに櫻は年只左右の指に一ッ得足らぬ稚こゝろの幼弱さまゝにいと怜悧一ートたび教たる事ゝ日ごろ經れども絶て忘れず素より孝心淺からねば七ッの年よ別れたる父の往方も朝夕に問ぬ日もなく日を送るその徒然を慰むる言葉敵ゝ渡鳥のみ渠は父丁七は心さまの老實なる下司に稀なる義士なれば寒家に仕て不足を思ゝず女あるじとて侮らずうちも猶ひゑ主従親子が返らぬ人を果しなくまつよ探ゝあらゝる袖のむら雨もる宿ゝ荒たるまゝよ廣けれどうき世は陝く形なく鬱悒うつる真間の井よ影さへ曇る浮雲のをりゐる日となるまでよ心の塵も積りてゝ埋れて鳴く虫の聲今茲も秋になりにけりかくて其ふみ月の廿日あまり一日鮮衣ゝ生平よりもとく起たれど殊更物をおもゝしげよ頻に嘆息したりしかば丁七は訝りて例の痞や發り給ひし血暈にゝ歟渡鳥は何所に在る背捺りて進らせよといふを鮮衣禁めこゝが愈ればかしこがわろく煩はしきは生平なるにうち捨ておきねかゑ吾儕が今朝の病着ば癒ならず痞よも侍らず頃日は打つゞきて寝寐苦しき拂曉の夢さへ心よかゝるゆゑ〻寐ば昨夜わが所天ゝ枕上よ立給ひてわれ如此〻のとよより

上野なる草津にて洲之助といふ旅客と圍碁の勝負を爭ひつゝ渠が及に命を隕しぬ三年以來千磨百折旅より旅に月日を送れるその甲斐なくて枉死せし怨恨のほむら三熱の冥土の苦難堪がたく氷劫浮む瀕はあらじ遮莫あれ翌はかならず汝道が手を藉て怨を復さんと思ふかしよりてわが魂魄這奴が身に絢りこの所へ誘引り翌亭午過て草津より來るものありて洲之助と名告らば正しくわが讐とよく丁七と謀しあはして物かずいはさず擊果しわが怨魂を慰めなば千部の讀經百日の法筵よりして佛果を得ん仇人の齡は三十あまりその面影は箇樣〳〵と委細に告あへずあな恨しやくるしやと叫び狂ひて搔披く胸より鮮血濆しり身は只朱よ染り給ふと思へば忽ち夢覺にき汗よ衣を絞りつゝうち歎ぐ胃を鎭めても心は更に安からずこの敢にこそ色見にてや懇ろに問ふ和殿にかくすべうもあらずあまりに夢の正しげなるに心くまなく占してたべと告るを丁七聞も得果ず某しも亦この拂曉に夢にゆ主人を奉つりし粹の趣き今夢がたの告給ふ所と一點たがはず不思議といふもあまりあり夢は五臟の勞れより發るとかいふなれば年來日ごろ主從が思ひ慕るゝよしもなき心氣勞れてかくまでよ怪しき夢を見しもの歟又正夢といふとあればそれかあ

らぬかとはかりよ主從一度よ嘆息し頓を痢し手を叉き思ひ入たる眼底にたもちがたきは涙なり且くして鮮衣は目を拭ひつゝ面を擧げ吾僧が夢もそなたの夢も暗に符節を合せしと聞ては何を疑はん所夫の靈の告給はずはかゝりけりとも云らでゆあらん歎きの中の幸ひゝとは思へども痛きましや三年以來旅宿して案あされど月形の寶刀の往方しら雲の吹ゆ閉たる無常の風病て家に身まかり給はゞおよそ心の及んかぎり鍼灸藥餌等閑なく見とり冊き侍らんよなくなり給ひしその日すらいつともしらでけふまでもまちつゝ過りし月と日はこゝを照さぬ世也けり怒いに存命ていくそばくその歎する我は物かは年來の志素を得遂ずよ只假染の碁の勝負拔つ夾みつ綽け て打ても濟ず斫られてゝ後手になりたる死石の恥を雪ん功もなく見し世を夢と窩里へかへるよしなき斧の柄の朽をしかりけん夫の落命そのなき魂の幻しに告給ゝせば既よしる仇人の面貌その名ゝ洲之助よゑや手弱き吾僧なりとも武士の妻たる心ゝ鐵石いかでか樂を擊ざるべき准備をはやせよと節義よ勇めど哀みて傷らぬ烈女ゝ白眞弓張ある矢的魂ゆよ丁七はと〳〵感嘆しお慎ばりはさる事なからはやらば必ず過失あらん夢の盧賢は洲之助が來ると來ざるよ決てんけ

ふ一日が一期の吉凶只某しに任用し心長閑く俟給へといひつゝ陣子推ひらき日影遠にうち仰ぐ庭に楓は渡島と鄙りに餌を與てをり常に異なる母親の聲ざま心得がたくてや椽頬より遶り來つ毋うへはけふも又心持あしうやをはゑまずと問つゝ貌をさし覗けば鮮衣これを見かへりて今丁七と相譚る粹の趣き地白にしらせばやと思ひしが虚實もいまだ定かならぬ夢物語を雅きものに說ゑらゑて慈いに物を思ハせんハ便なき所爲こいよゝ正夢ならんにハいはずよ暫時遠離ばやと思ひかへしてうち微笑今朝しも痞ば發りよけれど温石煖てはやおこたりぬ渡島もこゝろ得よけふハ賓客の來給ふに足手纏なる汝達がこゝに在てハ便宜に侍らず手兒名の社へ將てゆきて日の沒ころまで遊せよ喃楓蓋の割籠よは何にまれ好ましきもの調理してよろしき比に進らすべしなにはあらじと賺されても應するのみ得も立ず丁七ハ鮮衣が氣色に猜してやよ渡島きのふの雨よ弘法寺の山よ菌らは生たりけんけふハ許させ給ふとよ娘を倶し參らせて日ぐらし遊ばゝ你が爲に思ひがけなき藪入ならんとゝいねゝとやがし立れば楓はさらゑ渡島も出よし述よ事あらんとハしらぬが實に佛の塲の聳狩せんと鑓持籠引提て庭門よりいと樂じげに走り去ぬ子どもらがうしろ影を共に目遥る主從は命運竭て仇人の爲にもし斃れなばこれぞこの親子一世の鮮別とハ思ひつゝ而前りうちあけがたき玉匣ふた親ながら世を去らば誰をよすがに人とはならん痛ましやなといへばにまいはで岩根の蔦もみぢ紅涙禁め難けれども迭よ愧て得も泣ず稚きものは退離つこゝろやすしと鮮衣は遽はしく身を起し母の像見ハ身を誰る懷刀とり出す劍先段子の衣蠹も仇人は破軍の名詮自性と覘してやがて身に引着一振貯藏む薙刀を長押よりとりおろし麼うち排ひ搔拭ひ鞘推甘げなどする程よ丁七は窓のほとりへ砥座の桶をおし居て刀の寢乃合すれば秋の日影のはや闌て正午時告る鷄の聲まだ一トさかり暑かりき浩處よ洲之助ハ尋わびつゝ溫橋が門の槐木をうち向上てこゝなるべしと呼門あへず諸折戸よりすゝみ入る足音聞て丁七は窓の隙よりさし覗き巢にやあらんと鮮衣よ目を注しつゝ出迎れば洲之助は引提たる彼竹の長筒を椽頬に倚かけつゝ丁七を見てうちはゝ笑み某しハ桶川よりこゝのあるじの使よ來つる洲之助といふもの主人もけふはもろ共にかへり給ふべかりしよまづ某を遣せし緣故は後にこそ申さめ彼人ハはじめより唐編素二郎と名告られしにこのわたりへ來て問ば人みな絶てしらずといふし

かれども門の槐木を目的に訪ば紛ふべうもあらざるよし聚て示されしこあればといひつゝ汗を拭ふ人狎易き狡兒のいふよしはまだ定かならねど丁七は見し夢のかくまであへば今更よ心頻にはやれども氣色には顯さず寔に唐綿素二郎とはわが主人の苟名なり内室へ後所にをり粹面前りよ間に給へ且あなたへと誘引ば洲之助へ草鞋の紐解捨て手拭もて裳の埃うち拂ひゆるし給へと長筒を引提て進む客房の左手の簾さり落し良人の讐敵脱さじと聲も鋭く鮮衣がかくる薙刀眼さきへ閃かしたる刄の光に洲之助へ叫嗟とばかり身を沈してこれを避こへ何するといはせも果ず右手のかたより丁七が疊かけて擊太刀風の烈しき左右を禦かねて拔あはしたる刀の竹筴只一打よ鍔元より斫落されても物どもせず拿たる鞘をそがまゝに丁と打たる眼礫よ丁七へ阿と叫あへず鍔に額を傷られて怯むを得たりと洲之助は猿臂を伸して掻抓み矢聲をかけて投しかば足そらざまに筋斗りて打拔く傍の壁の中へ半身撞と投入らる鮮衣これを見もかへらずなほ晃かす薙刀を倚衝立て受とゞめこへ理不盡なり何等の故よ吾を仇とし擊んとするや奴隸へ慾ず物に狂はゞ女とてゆるしがたし可惜命を失ふなと聲ふり立て罵れば鮮衣は息吻あへず目尻を揚齒を切ばりこの期よ及びてなほ隱ずるやわが良人は草津にて圍碁の勝負を爭ひつゝ汝が爲よ擊れしよし良人の寃魂夢の告汝をこへへ誘引とまで正しき示現よ寂及合して今暫より待しをしらざるや怨の刄はや受よと敦圍ながら引く薙刀よ向脛薙んと閃かせば跳あがつて受ながす筒へふたつに裂と割て内より出る一口の刀を鮮衣佶と見て筒よ及をかくすへ癖者害心いよ〳〵顯然たり首を廻せと叉擊かくる刄尖を踏とゞめわれは汝が良人を殺さずいふよしあるを聞ずやと牢いへさず後より丁七へ身を廻し來て聲をかけつゝ丁と擊刄の下を彼此と潛脱て拔あはせ鎬を倒る獨蜂に取心烈忠義の主從は巴に逸り洲濱に並びて一上一下と斗を誘せども仇人へ剛勇へじめに倍でつけ入らんとする鮮衣の薙刀の鞘を切落しかへす刀よ丁七を肩尖磯と砍倒せば鮮衣へ遽はしく短刀を引拔つゝ突懸れども拳は勞倦て既に危く見にたる折驟雨たる一朶の旗雲庭なる槐木にかゝりつゝ降りて窓より入るかと思へばその長丈餘の金剛神忽然と立顯はれ勝誇たる洲之助が眼を碪と彈しかば腦も碎るごとく覺て魂滅ばかり叫びつゝやゝ見かへりてうち駭き斫拂んとしつれども力衰弱腰淋れて拿たる刀のすべしらず是へいかにと呆まどひて逃んとすれば鮮衣は透間も

なく突かくる鋭刀尖に眸易して遂に刀をうち落され乳の下より脊まで鞘も徹れとぐさと刺れて叫ひ苦しみ憤しる血は此彼へふり沃ぎ倒れたる丁七が顔へ飛とかゝりしかば丁七い息ふきかへして岸破と起つゝ洲之助が足を拂ふて撃倒し押て頸をかゝすれば金剛神の形は消て只屋の棟よあやしげなる鳥の啼聲したりけりかゝる奇特は主従が目にはさやかに見ねども鮮衣は外面を數回伏拜み年來念願し奉つる新御堂なる金剛神靈驗こゝよ空からでかくは仇人を撃し給ふ歟しからずは良人の靈魂ちからを戮えたまひけん梢よかゝる旅宴の窓より入りしず不思議なる丁七手疵はいかにぞやと勦り問ば莞爾と笑みゐてこゝろやすかれ僅に一个處幸ひよして淺疵なり某しい當所の長へ復讐のよしを訴へ金銭些し愈るを俟て御主人の撃れたまひし彼地へいゆきて骨を拾んまづ尊靈を祭り給へと問答て驅て首級の鮮血をかき拭んとて思いずも死骸を見れば懐中よりあらいれ出たる書翰あり彼は何ぞと訝れば鮮衣これをとり揚て宗卿か眞間の宿所へ吾子妹みづから見給へと寫したる表衛は正しくわが夫の手迹なり故こそあらめと忙だしく封拆間も脆躍りて讀む側より丁七も膝ずりよせてさし覗き原來主人は撃れ給はず路費乏しきにせんすべなく武藏なる浦川まで歸り來給ふその夜より心持頻はしさに逗留しまづこのことをしらせんとて遣はしたる使といふはこの人でいひしかと問ば鮮衣書翰とゞめ思ひきやこの洲之助はわが良人の前妻なる片埴のとやらんが兄犬目氏の子ならんといこれはしかしと手ま遊ず書簡をしば〳〵くりかへしかゝればこの人細主人ま環倉しは四月の比也わが國るまで家ま留めて心くまなく歓待せよといふ所時に書寫めて告來し給ひし手章の使なりしにいかなれば墓なき夢を心あてま問も定めず殺しけん今將夢歟夢ならばいやく覺よと主從は後悔慚愧やるせなくおなじ憾ま歎かきくれし感ひは更ま釋ざりけり

○第九　祟によつて妻を喪ふ　萬春良雄が歸郷の後悔

浩る處に外面より遽いしく來るものあり誰やと問は素太夫なり妻はさらなり七もいとなつかゝく待わびたるあるじはこゝに恙なくかへり來にける歟ばしさは比んにものなけれどもその據もなく洲之助を殺せしに只愧らひて出迎ねば素太夫い鮮衣やあるわれかへれり楓はをらずや丁七と呼びつゝ登る椽頰よりと見れば鄰や房客の籠は斷離れ壁毀れ箒撓伏たる洲之助い身首所

を異にして血鮮よ席を浸したりしゝ何事ぞと叫あへず驚きまどひて立巡り周章て壁の毀れより
蹴の如く跳入り畏まりをる鮮衣と丁七をと見かう見て怒よ得堪ず辟を激しわがかへれるをしり
ながら汝達は出も迎ずこれさへ心得がたかりしよ桶川の旅宿より書獅して遣したる洲之助を殺
せしはいよいよもつてこゝろ得ず當坐に口論したりともわが前妻の兄としらば堪も忍びてある
べきにしうねくも殺せし歟女子に似げなき虎狼の行狀これを佐し丁七も人面獣心論に及ばずき
のふこの洲之助が桶川を發し後いく程もなくわが病者忘れしごとく愈しかば直さま彼處を發足
し途のゆくての神社へ名詣をとゝめて順拜祈念はじめゝ千社と定めしかども三年のけふよ及び
てはやゝ一萬社に充たりきこれひとつにゝ月形の寶刀の往方しらん爲又一ッには女房女兒が無
翼安全を祈るのみ墓なく結ぶ旅寐の夢もこゝろにかゝれば片時もいちはやくわがかへる日を
告よとて人を遣ゝし家は阿修羅の街衢となる渦世いかなる業報ぞ事情を推量るに鮮衣ゝ丁七ど
密通してゞあらんずらんこれらのよしを洲之助に見られし故に殺せし歟しからずば三年經るま
で件の寶刀を索かね路費竭て阿容〳〵と歸る夫をうるさく思ひてわが爲よは假初ならぬ恩義あ

ることの人を殺して更よ罪を負し自滅させんと謀りし那斯人ならぬ心を推ば楓がこゝにをらぬも
不審し丁七と相譚て宿遊女にや售たりけん綜委細よ訴へなば立地に木のうらへ縛らるべき奴原
なれどもそれを意よまか玄得ぬわれは日蔭のをとめし花も得咬ず實もならず只立枯になるべ
きものと侮る妻の鬼百合に馴るゝ奴隷がこゝろは毒草われ罪せんとせざれども深痍を負しは天
罰なり縱ひ今汝等を推ならべて四段になすとも恥かゞやかすのみにして守へ歸參のよすがにも
ならずかくまで武運に竭ぬと思へば罪造りに何をかせん今はや覺期を究めたり南無阿彌陀佛と
唱へあげ刀を拔て小腹へ突立んとしたりしかば鮮衣丁七左右より慌忙き攀り着おん惱ぼりは
どわりなり疑はせ給ふともいひとくよしはなまじいに懇し夢の咎ぞかし怪くもあるかなこの曉
きにおん身正しく告給はくわれは草津の旅宿よて圍碁の勝負を爭ひッゝ洲之助といふものゝ刄
よ命を隕したり三年以來嬢苦遍歷索る寶刀は得もとらで思はぬ仇に身を喪ひし怨によつて中有
よ呻吟冤魂彼奴に絡りつこの處へ引よせんず翌洲之助と名告ッゝ遠方より來る人あらば物かず
云せずこれを擊仇人の齡は三十あまりその面影は髣髴〳〵と示現よ吾倅も某し心もともなく思

ふ折果して來つるその名は洲之助年紀なり面影と符節をあわせし正夢よ今更何を疑ふべきと名告かけて斫結ぶに伝人は剛勇かもふにはえて某は瑰を負ひッ吾僧も既に危かりしよ年來祈念し奉つる金剛神の擁護とおぼしく庭の槐木よかゝれる旗雲降りて裡面へ入るとおもへば仇は忽地勢ひ蝎て遂に頭を授たりこのときに朧朧たる雲霧ハはや霽てたゝ星の棟に異なる鳥の啼聲せしもいと怪しかくて死骸の懐中より顯れ出たる一封の書翰を見ればかん身の白筆良人の仇と思ひしは仇ならずして良人の緑者粹の本末問も定めず只管はやりて殺せしは物の祟獻枉難の神の怒よあふたる歎悔しきをえてけりと身で身を責ても恨てもかへすよしなき過失よ愧ては年來日ごろよりいとなつかゝと思ふわが所夫待わびたりし浮主人よ對すべき面はなけれどいはで死んは冥土の迷ひいふて證据もなきことなながら三年の留守をよしと思ひて密通をしたりけん罪負せんとて由緑ある人を猜よ殺しげん忍愛ひとッの女兒さへ售もやせしと情なく思ひかけなきことをのみいハゝは生ながら舌を殺るゝよりなほ苦しくとき殺されぬ擬衣は僻る君が誣言ゑ人を殺せし罪科を脱れんとしも思わねど操を破り身を穢さば良人の瑕瑾就の恥辱女子の大罪このうへなし不義好淫は國家の大禁童といふとも其非を辨ふ況や恥をしるものは下郎なりとも道ならぬ道よいかでか迷ふべきよよ目前り誠心をうつして見する鏡あらばさて疑ひを解べきよ是も見し夜の夢よ似て慕なき囈言は泡沫夢幻身の薄命はすべなけれど女房家録の非を証ながら却てかん身を殺し給はゝ誰ありて月形の盜賊を索べき何人かゆ身の自殺を擯よしとて登ヤさんつれなき所爲も限りあり情なし淺ましと猶解つ諫ッ左右より推留たる拳の上よ落て迸る血の涙染るがごとき柄糸のとけぬ恨に宗太夫は聞ゝ得果ず頭をうち掉いひ諭なせどわが自殺は汝等が情願ならん良人退ずやと丁七を衝倒さんとする際に妻は良人の刃を奪ふて吭へぐさと突立れば後れにけりと丁七はかのが刀を搔とりつゝ忽地腹をかき切たりこれはと驚く素太夫は夢の愚たる心地して忙然と手を叉き深痍によはる二人が苦痛を見るに得堪ず目を拭ひわれいかなれば愚物にして誠まで人を疑ひて自殺せんとはしたりけん今丹田へ気を鎮めていハれしとを考ふれば雖衣帷が夢もの語に思ひ合するとこそあれいねる日拳れて武勇なる吾輩百紋の間なる曠野を過り大山は中夜問われは姑獲よ石を負され洲之助は悞つて人鶴をうち落しつかくて且く迫ひたる茶

其所の法師これを聞て件の姑獲も人魂も今宵こゝにて火葬する惡女根坂が寃魂たらんこの婦は如此〳〵と委細よ說しらせもし打落せし人魂を懇ろに葬らずは祟よりて枉死せん両三日逗留して形のごとく追善をとり行ひ給ひねと明々地よ勸めゑかばわれしかさせんとをもひしかども洲之助つや〳〵從はず剩さへ彼法師を罵りッ罵られいたく茶毘所を聞ゑたりかゝる故に彼怨靈吾們らに馮憑りて爲にはわが夢に入りて妻子よ病難ありと思ハせ更に吾們を病わづらはせて洲之助をまづこゝへ引よせ環て妻子の夢に入りてわれは草津の旅宿にて洲之助よ撃れしと告て二人が手を借て斯はや集を殺させけん法師の教誡當れるかなさればこそあれその餘怨しうねく吾們よ祟らんとて不覺よ妻子を疑はせ曰滅させんとせしもの歟洲之助が撃れしとき鳴つる鳥は姑獲ならん現推がたき怨靈の祟によりてかん身等さへもろ共に死を急ぎし歟人を殺せば脫るべき道ハなくとも二人に一人は死では事は果べきにその深疾では徇もなし雄々しき妻の賢才貞操主には篤き丁七が誠心十年以來われよくしれり何汚れたる行ひあらんそを疑ひしはいと羞かしわれハ元來入夫なるに身の過失より家衰へ三年以來一日も妻よは安き思ひをさせずわれも勞してその功なく面押拭ふてかへるすら影設きによしもなく馬辱しめて自害させ忠義の僕さへ失ふと嗚呼といはんもあまりありゆるし給へと悔歎けば鮮衣も丁七も歡しげに頭を擡げおもひがけなき他の妻の祟とゑれてぬれ衣を乾給はせしは一期の大慶愉よく目を閉侍らんとはいへど今般よも心にかゝるは楓がうへ〻渡鳥を卅けて遊山せよとて弘法寺へ遣ゑたるがいまだ歸らず母を喪ひ又更よ父は旅行に趣き給はゞ離をよすがに生育ん病もやせんと子を思ふこゝろはかなじ間に迷ふ丁七は仲あがりあな渡鳥奴か心鈍さよ今こそ娘をいそがして歸り來ざるか歸り來よいひ遣ゑ給ふをなからずやはと氣を焦ば素太夫涙を禁め敢ず楓がうへはこゝろやすかれわれあるからに餓ても死なじ人となりなば佳婿がねを撑みて後の榮にをまたん渡鳥もしかゞかし渠も又人の子なるよわれ等閑よ思はんやと懇められても思愛よ引とめらるゝ玉の緒の僅に殘るも哀れなり浩る處へ子どもらはいそがハゑげよ歸り來ッ母うへ何處にをいします娘さよ只今かへり給ひぬさゞ徒然にをはしけんといひつゝそこらさし覗く楓渡鳥もろ共に思ひがけなき光景を見る目なみだの驟雨に遍るゝごとく客房へ走り集合つ血に塗れたる觀と觀とに携着き緯問よしもなかく

に涙を惜ず泣ふかば丁七はやゝ眼を暗り渡鳥泣な泣ばとて死なんとする縁がかくていつまで在ものかは吾一命は惜むに足らずいと惜きは奥さまゝはやりて自殺し給ひきこや認もわすれじほ主人はかへらせ給ひて彼處にわませば緑由は後よゞしらん汝が主君はこの娘のみ主の爲には艱苦を厭ふな父の忠義を本よせよいふべきは唯是のみと言葉せわしくふり絞る聲よ鮮衣やゝ見かへりて楓よかへり給ひしかいひ遣さんと思ふと胸にあまれどそれもかなはず物の崇て恨なき人を殺しッ身を殺す母の亡日は忘るとも蓼々よ孝行僻り給ふなうたてやおん身七才の冬生別れせし父うへはまた〳〵師鄉し給へど名告もあへずはゝきゝは死別れする有爲轉變浮世の秋の秋風は只こゝへのみ吹もの歟といひ果ず又伏沈めば楓はよゝと泣叫ぴ綷定かよはゝられぞも死なでかなはぬものならばなどてわらはを代らしておん身は存命給はざる喃父うへふり捨て出給ひしより三年の月日立ぬれど暫時も忘れぬ面影を認らずに侍らんや邂逅師らせ給ひしにさし俯きてをはさずよ母御を見とらせ給はすやみづから死る病ひにゝ救ふ藥はなきこと歟心つよゝと父の袖を引てゝ携る母の膝鮮血を厭す親を思ふ稚き主と友音ゝてなく渡鳥も聲かれて濡らすはおなじ涙の雨に翳しほれて腰かへりけふは終日娘さまを倶しまゐらせて遊山せし手兒名の社へ詣よと宣はせしに賜されて漫に彼處へ詣しかど茸狩もせず物も見ず蚍がしらせて主親の今般よあはしあひながら又あひがたきこの世の別になりなんことの哀ゝさと口説つ泣つ轉轉べと應ゝ得せぬ痍負は片息慰めかねし素太夫は玉なす涙をふり拂ひ渡鳥泣なやよ楓賢きものは泣ぬなりかゝる大變凶事もなく親子主從恙なく四人面をあはしなば笑片向て樂しからんに子よ嘲たても身を進る親がひなきはわれのみなり恩義は篤き女房家僕救るゝよしあらば吾儕よ女才あるべきか嘆かば冥土の障とならん末期の水をとちからなく立上りつゝ椽頰より鏡の水を汲んとすれば思ひがけなく折戸の蔭に編笠を深くして野袂の裾引あげながら悲嘆の聲を縮閑武士あり誰と問んも遠がにて汲取柄杓の水鏡うつせどもいと間遠よて顔ゝ定かに見にぬなるべし

○第十　功を賞し恩に答ふ　節婦義僕が入江の水咫

却説折戸の蔭に倚て悲歎の聲を縮閑武士は今素太夫が椽頰より鏡の水を柄杓へうけわが面影をうつして見んとしつるをはやく知りたりけん編笠に手をかけてうち仰ぎつゝけしきばみ「其師

の眞間の井筒は掛かはりさらぬ思ひの影をこひつゝと一首の古歌を口質む聲よ思はず素太夫は
礒と落せし柄杓の打水冷りと濡るゝ足もとより祟の飛走り早かゝるかとうち騷ぐ胸を推鎮めさ
の給ふは誰よかありけんわがうへ云られし當意即妙聲音は正しく品馴玄人に似たりと訝ればし
かゞあるらん櫛橋生恙なく遂られしかと隱てやがて編笠を揺とり捨て進み入るをと見れば是別
人ならず正禾彈正時綱なり素夫太いよ〳〵周章玄て思ひがけなき執事の來臨家内の大變鮮血の
汚穢且往方へと便室へ指し先へ立んとするを時綱急に呼とゞめ否聊かも妨げなし執繕はでそが
僅よといふにすゝなく鮮衣等が俯たる一室へ誘引ば時綱も左見右見て數回嘆息玄婦人に稀なる
心烈勇敢下司に似げなき忠心義膽鮮の趣き彼處より大かた見もし聞もして感涙袖を濡したりわ
れもしこゝに來ることの今一歩早かりせば斯いひがひなく自殺をさせんや悼むべし嗚命惜むべ
し寔に人の運命のみ皇天も祐がたく鬼神も救ふによしなきかと悔て瞼を玄ばたゝき只管嗟嘆玄
たりしかば素太夫はます〳〵愧て又いふよしもなかりけり常下時綱貌を更め主人はいまだ曉ら
でや賢妻義僕が命を捨てこの獄者を繫ざりせば和殿いかでか會稽の恥を雪めて櫛橋の家の榮よ

ふたゝびあふべきまづ洲之助が刀を見給へと〳〵といそがせば素太夫つや〳〵こゝろを得ず
件の刀を揺とりつゝ血を推拭ひうち返しうちかへし見て大きに驚きこれはいかよと訝れば時綱
も又佶と見て刀の長は二尺四寸二尺は陽陰兩儀を象り四寸は四時を表したる拔目は銀の半月な
らんといふよ素太夫膝の上よ受もつ鞘を左手よ採り宣ふ所一點違ハずこゝ疑ふべうもあられぬ縅
月形の寶刀ゝこれによりて是をおもふに前妻の兄洲之助は發よ上總にあり玄比乞日疊六と渾名
せられしこの寶劍の盜賊なるかしらぬとゝいひながら奮級にのみ絆れて四月の比より旅宿を
共にし只誠をもて交りッゝわれより先にわが宿へ遣せしよ多鮮衣等ハはからず渠を擒とめて遂
よ寶刀をとり獲たるその大功に比ればとる所なきわが魯鈍とにもかくよも面目なしさるよても
洲之助が腰よ帶たる一刀ハ正しく竹篦なりけるよこの月形はいかにしてわれよは見せずこの處
へ携へて來たりけんこれらのことをよくしり給ふ執事の聰察豫てより天眼鏡もて照らすが如しと
嘆賞慚愧今更に手の舞足の踏どころ得しらぬまでに呆れまどひて又その鞘をこれ彼とたづねと
りつゝ刀を納め眉に齊しく左右の手よ捧もちて時綱に遞與ばやをら請取て寶刀は彈正あづかり

ぬ日ならず守へ披露せん抑々われのみこの洲之助ハ寶刀の盜賊疊六ゝと定かにこれを知れるとゝろ得がたく思はれん且その證據を見せんずといひつゝ扇を颯と開きて外面をさし招けばいつの程にか集合けん正禾が夥兵五六人槐木の蔭より立顯れ肱手高く搏めたる両個の癖者を引立つゝ椽頰近くへ推居たり時綱夥兵を勞ふて又素太夫ようち對ひ今引居たる罪人は疊六が支黨にて五十井墨太田子江疣三といふ野ぶせりゝことは一昨年疊六を捕漏せしとき生拘つ久しく禁獄せられしかども罰一等を降されて追放されたる奴原ゝしかるに某しいぬる比より君命をうけ給はり國府臺に城廓をとり立んとてこの地よ來たり勤務の暇彼此を徘徊しつゝけふはからずも彼奴二人を搦捕りいたく責辛く問ば苦痛よ得堪すゆすやう某等は三年已前如此〳〵の罪をもて遠く境を追れたる墨太疣三と呼れしもの彼の疊六が博徒ゝ年來武藏相摸の間に流離てゐへば絶て疊六がゆくへをしらずゐひしにいぬる日安雞尾のほとりなる曠野よて疊六に環會道次に立ながら別離の情を述る折大きなる野猪襲來つゝ牙よ掛んとしたりしかば疊六これを雄手に引うけ只一刺に殺蹴にき某等は野猪よりも集が勇力に驚消れて又手に屬んと庶幾へば疊六自若と座うち拂ひ某等を伴ふて東を投て赴く程に密やかに相譚げるやう彌にわれ里見の追捕を殺脱て奥のかたへ走る途すがら獨つくゝと思案するに金剛神と賭のして勝てちからを獲れ共僅に三年よ限りにければ久しくかくてあるものかは然るを今この膂力に乘して目ざましき所行をすればこそ人にも忌られ追れもすれ虎の猛きも陥穴に死ゑ鯨のかそろしげなるも銛に傷らる膂力ありともこれを隱して要緊の時のみ本事を出せば人に知るゝよしもなく捕らるゝこともあらじと只願思ひ決めつゝ小驕をのみ事とせしかば懷中寂ゑくなる隨に楢乘暇にて森ひとりたる刀を魯ばやとて人に見ずればその人いたく驚嘆しこは豫聞く里見の重寶織月形の刀よ似たりしも果して月形ならば身を設り厄を脱るゝ奇特あり萬貫の錢を乞とも價を論ぜず賜ものありなんゑかはあれど彼月形は里見家より穿鑿嚴しくをさ〳〵禁らるゝよし仄よ聞たる事もあればわが手よは賢買しがたしそのすぢへもてゆき給はゞ許多富錢を給はるべしと眞成に示されてわれもはじめて彼刀の奇特をしりて遂に售らずはやその處を立去物から穿鑿せらるゝともやと思ふが故よ月形を巨きなる筒よ隱して頭の一孤に米を入れ起ときは杖とし衝たて居ときは坐右に置腰に帶たる行刀

は見よ竹筧を及に換たり人もし筒を訝りて所産のよしを問ときは如此〳〵と詭狀りて件の米を出して見せ刀の穿鑿するものあらばこの竹刀を拔出して狀き脫んと思ふのみ今この野猪を殺すときは卒爾なる腕立しそるは已ふを得ざる故こさても今茲四月の比上野なる高津にてわが竹刀を竊やかに引拔きて見る旅人あり這奴はかならず里見家の密使なるべしと思ひにければ殊更に思ろぶりて交參つゝ定かに問ば彼旅人は總角のころ別れたるわが妹の夫なるよし事おのづから分明なれば些玄心にかちゐしがこれよりわれは乳名の洲之助をもて世に呼れより〳〵渠が來歷を根堀枝をり尋ればわが妹とは十年以前生別れしたるよし總て這奴爺が三世よくしれたり後妻に女兒を產し家ゝ葛飾の與間よあり類りよ鄉の念あれば葛飾へ行てゆかんといふわれ又喜よ計校あればもろともよ草津を發てその家路へと赴く程に妹夫奴は昨夕より俄虫よ病煩ひて今朝なは桶川の旅宿よをりよりてまづわれのみ間、與へ赴く折はからずも汝等に環會たれば經營も爲易しわれまづ這奴が宿所へいゆきて彼後妻に對面しあるじは昨夕桶川まではやかへり着たれども暴よ病て命危しはやく彼處へ赴きて見とり給はずば空蟬の生のうちよは會がたけん轎は途

ゐて備んず目今發足玄給へとおどろかし旌引出さんそのとき汝等は轎夫に打拔て彼女房と女の子を俱して如此〳〵の處よ俟われゝ潛にとつて返して家の内なる金錢衣裝多くとも少くとも殘らず攫ふて遲着なん毋もわかく女の子さへ眉目よくば賣ばにあらん妹夫とはいふものから今では緣も係りもなし弘法寺のほとりある門に槐木のある舊屋あるじが名氏は唐綿素二郎耳ゆき拔して忘るゝな四月の比より跟蹤はりし這奴路銀とて多くもあらずふかき好のありといへば宿賃のみを財生にして可惜月日を過したれども今更捨る鳥よはあらず努曉られなとそゝのかされ両人これに同意して目今この地へ來れるのみ槊六ゝはや先へ走りて彼素二郎とやんが宿所へ赴むきてひひしが月形とかいふ太刀はふかく巨竹の筒に隱して手を放さずひきと委細よ首伏せしかば又槊六を搦んとて惡棍等を引立させいそしくこゝへ來て見れば槊六ゝはや撃れて賢妻就僕はこれに自殺し和殿歸宅の爲躰稚主從が悲歎の光景故ありぬゝく思ひしかばそがまゝには入らずまて且く彼所よ竊聞し感嘆時を移玄たりこゝをもて乳名を洲之助と呼れたるその癖者は乙目の槊六渠が隱して持る刀は月形なりとはや知たり疑ひゝやゝ解たる歟と綽おちもなく說諭

せば素太夫肩より忌を吻き両個の悪棍囚れず執事もこゝに來給いずばいかにしてこの惑ひを立地に釋よまあらん某し一昨年楢葉にて寶刀を窃ひとられし夜は野干玉の闇なりければ疊六に認られず某し固より疊六が真貌を認るよしもなく丁七も亦渠を定かに見とめざりしといへりしらざる故よ某しは盜人に糧を齎し妻と奴隷は自殺せりその功あると此面なきと榮辱雲壤の差あれどもその甲乙は他人にあらず夫婦主從が志素暗合して素懐を遂たり某し固より不忠を存ぜず願ふは執事これらの趣き好意を以てともかくも執なして給はらばなほ此うへの幸ひならんと他事なく恐ば時綱は欣然とうち點頭和殿手づから賊を擊寶刀をとりしにあらずとも守の御氣色異議あらんやさるよても賢妻いこれらのよしをしらずしてやがて黄泉に赴かばいともはゆなきいよなんわが家傳の神樂あり金瘡にて死せしもの即座に是を用るときは一トたびは甦生してものいふを當の如し戰場に臨みて毎にその効を見きよく人のゑる所なり幸ひなるかなけふもその一包を懐中せり加之らず嚮よ外面よ立つゝ聞ば疊六が擊るゝとき旗雲の奇瑞ありゑよあらずやこいまつたく新御堂の金剛神影向して力を戮給ふなるべし故いかよとなればいぬる年この賊の謀計の悪棍が首伏せしやう疊六は磯山なる金剛神と賭のして太刀をぬてひひゑ現時金剛神喩し給いく汝志素を改めて人なみなる活業せよ今よりその膂力にまかしていよ〳〵非道の行狀せば命も其處に終るべしと示現ゑ給ふよゑをいへりゑかるよ疊六いこのときいまだ賊をなさず力を發てより人あまた剝もしつ殺しもゑてはや三年よなりしかば神罰竟に脱れず烏獲がちからありながら一殺人よ殺されたりよりておもふにまづ丹精禮拜し金剛神を祈請して扨この藥を用ひなば神助藥力両ながら即功あらずといふをなけん臨み給へと遠いしく懐中を探撈りて件の藥を與へしかば素太夫大きよ欽びて泣沈みたる楓渡鳥等を呼び激して急に湯を汲來たらし父子主從もろ共よ丹精を抽でゝ金剛神の冥助を祈念し素太夫は妻を介抱し渡鳥は父を扶起しておの〳〵その口中へ件の藥を含すれば楓は素湯を沃ぎ入れて三人齊一呼び活るに且くして雛衣丁七忽然と甦生して目を開きつゝ四下を見かへり一息吻とつきゑかば皆衆これに勢ひつきて素太夫は此彼と狼貪の耳へ唇をよせ洲之助は寶刀の盜賊乞目疊六なりしといからずも織川形をとり復せし件の趣き現時正禾時綱がこよなき助に首尾全たく連年の宿願をけふ一日に果せしばいく偏か

くりかへして聲高やかに說示せば病負等は欽ばしさよ苦痛を忘れて敎回時綱を伏拜み鮮衣は又さらよ落る涙をふり拂ひ世ハ塞翁が馬とやらん墓なき夢に絆されて人を殺して自害しはべるそのゝ嘲ひは禍ひよてはからず良人の恥辱を雪め世ハはや廣くなりけりと聞て死んは存命て物を思ひたきのふより扨も遙にまゑ侍り只願しきは正禾ぬし疊六を誑引よせて殺せしものは素太夫なり妻鮮衣等は痍を負てその日むなしくなりよきと聞にあげて玉はらば後の榮も一とゑはならん只是のみと血に染し衆を合すれば丁七もこゝろばかりハ坐行出敵ならねども某が願ひもかなじ主人の爲只上さまの汰沙よきうへよもすべよく憑み奉つるといふもひとしき貞操忠義その子そのの子を見かへりて不便や心ぼそからん篋よ孝行し玉へよ娘をよく護まいらせよ渡鳥を憐み給へ子こそわかれよなりけれといひあへず鮮衣と丁七は息は絶よけり覺期ハしても堪かねし楓渡鳥母も共に聲泣からせば素太夫は左右の袂に包かねし涙のやるせなき骸ようち對ひて合掌し家を成りて賊を討功を讓りて王を慕む婦德忘れがたく悄然斷かたしわれ今こゝよおん身に對ん齡四半を賜ずといふとも生涯又妻を娶らゑ蓮華最上半座をわかちて安樂國に俟給へ彌陀佛〳〵と唱つゝ胸を拍てゞ歎きけるかくてあるべきをならねば時綱は心つよげよ父子主從を激して素太夫にうち對ひ神の擁護よ藥の功現空からずといひながら思ふにまして内室は世に稀なるべき勇婦なり晩にハ外れたりとも深く刃をつきハながら辨論して舌乱れず今亦暫時蹇生してものいふとの夾かよみづから功を功とせず良人に讓るは賢なるかな城の繩張地圖匠作はや大かたは決着したれば翌ハこの地を發足し日ならず浦田へ歸城えて和殿此度の功績を巨細よ聞にあげ實刀を返し奉つらば本領安堵疑ひなしさるときはなき人の追善これよますものあらんや又その兇賊疊六が首級は彼地に梟られなん從者等よ賞しねと說示しつゝ身を起せば素太夫は遽ハしく疊六が首掻よせて秋きに推包みいかで執事の御仁慈に恩免の沙敎術を冀がひ奉つると回答てやがて樣頻より夥兵よ遞與すも膝行頓首恭々しく見送れば時綱ハ夥兵等よ疊太抚三を率しつゝこの日は旅館へ還りけり

○第十一　分鋭ふたゝび合　薔婦兩女が名簿の鄕導

さる程に素太夫は且亡骸を斂んとて駈て鞭を旋らして舊の處へ入らんとするに外面に人ありて

とや喧々と呼かけつゝどや〳〵と裏面へ入るを忙だしく見かへれば思ひがけなき前妻片埜女兒唐草紅皿等天目法師を先に立して來てこゝに來つるゝこれも又世になき魂の幻しに見ゆる歟と問れも得せず舅つぶれてわが身を目柴に亡骸を見せじと障子を磯と閉てい片埜ゆくりなし彼等は唐草紅皿歟さて大きうもなりぬるかな外叔は又老躰の恙もなくてもろ共に來ませしと亦欽ぶゝし且こなたへと眞成に誘引れても面點のみ僉恨たる氣色にて椽頰よ尻うちかけ手よ〳〵草鞋の紐解捨て裳の端を引おろし誘引ふ隨に客房の次の便室にならびてをり素太夫にゆくりなく偖で別れ去妻と子よ又不慮環りあふその欽びい譬ふべきものゝなけれど折もをり時もときとてかゝまでに聚合ゝともこゝろ得がたくわが宿ながら如譯く針の席に坐す如く揉尻しつゝ領を拊むかし外叔と華洛よて對面しつるとはあれどゆくへなくなり給ひては音づれ聞ねんよしもなくそのゝち遙に程ふりて里見よをはしますよしを仄に聞て妻子を携へ安房上總へと赴く折上野なる仁田山にて軍兵に劫かされて女房女兒に別れしより十年のけふまで往方をゝらず外叔も又里見家の采地にはをはしまさず今斯俄比に訪るゝといづれの神の導きならん唐草も紅皿も又にはじめてあふが如けん乳貌は忘れねど名告らずばあれも只他の女兒と見てやみなん片埜はなどて物を宜はぬわがうへをまづ告べきかそなたとも聞まほし別れし後はいかよぞやと問つゝ見かへる次の房なる哭聲を聞せじとてうち咳きて紛らせば天目法印冷笑ひやよ素二郎麁乱〳〵する吾僧が錫杖一本で十年妻子を養はせ和主は他の女婿よなりて一期榮んと思ふとも皇天がゆるし給はず逝るとてわれも又脱しもせずゆるしもせず扨何よりか先いふべきむかしわれ華洛の極に住憂て歌祭文の歌枕羽黒詣に假托て俄頃に京を出しかば親族にも告しらせず出羽よ一年陸奥に又一年を送つゝ旅より旅に知己殖て果は里見よ杖を駐め竈祭りよ加持新禱一升米よ一生を量減して年夥間舎修驗になる物から里見と云は上總なる來里の浦田に居城してこゝらわたり迄手に入給ふ義堯主の采地にはあらず上野國碓氷郡の郷名よ里見と云處あり碓氷川の北にして榛名山より西南ゆがみし和主が主君と恐む浦田殿(義堯)と云の氏名の地なり太郎義俊義成以下數世爰に居城せり斯て義俊七世の嫡孫又太郎義實ぬゝ去歸よ遷て安房國へ推渡り子孫漸々其地を開きゝ城を房總に振ひ給へば當今里見と云ときは安房上總とのみ思もの多かり和主も始めはゝか心

惜し此過失より妻も子も仁田山よて棄られたりそを優ふれば十とせになり此年は十月中旬われ山がたきをありて確氷の砥澤へ赴く折越後の軍兵仁田山より凱陣するに擣見つ道次についわて[illegible]に仁陣よ從ふ雜兵が生捕やしたりけん年五ッばかりなる女の子を棄て去んとすればよゝと泣つゝ徙武者の鎧の草摺に携若を振拂ふて眼を瞋らし舍連の息女ならんと思ひの外なる賤もの賓撿にも入られずかゝる暇に拾ひ首二ッ三ッは獲べかりきよこゝまで負て來るだにも悔きく思ふに跡を追はゞ踏殺されなと罵りあへず突轉して走去ぬ稚兒ハ仰さまに倒れたる儘哭號ども索て來るもの絶てなければ外のあはれに涙こぼれて抱起しつ里を問親の名を尋ても西のかたへ指すのみ泣より外に回答はねせず其方の村まで將てゆかばしりたる人もあるべしと思へば賺きこしらへて手を接てゆくほどよ行裝ひせしをんな三才ばかりなる兒を抱き耳髪を肩へふり亂して前面より走り來つこなたの女の子を遥に見て忽地手を抗擺を立やよ唐草賦痛ましや篆にはいかにと問つゝも招けハ女の子ハ忙だしくわが摂へたる手をふり放母御喃と呼びかけて躍て走り聚ふ程よわれも亦歩の運びをいそがして母と呼るゝをんなをみれば京なる姪の片埡なり思ひがけなきとなれば歡びもしつ泣もして彼ハ彼がうへを告われハわがうへを告和主が吾儕を心あてに安房の里見へ赴くを仁田山の戰場にゆきあハしたる夫婦が厄難聞くよ[illegible]〳〵胸つぶれて唐草が雜兵に衝輾されし爲躰を片埡よ告しかば片埡は聞あへず父よ負れし唐草が一旦撥よなりしを思へば良人の存亡こゝろもとなし篆よはいかになり給ひし往方を告よしらせよと問ば僅に五才なる女の子が何を辨ふべきわれも今さらせんすべしらねどかゝる澗による親子三人恙もなきにいかにして彼壯士が虚々と命を失ふ事あらんや馬よも踏れず牛にも突れず必ずたづね來べき〻汝達は昨夕より飯も疲勞もしたらんよ且わが由緣ある人の宿所まで將てゆかん心づよく思ひねと母を慰め子を賺し腰なる墨斗を抜とりて今ゆく宿所をふところ紙へ筆太よ書寫玄路傍なる松枝よ紙の隅を結びさげ和主が索ねて來ん時の栞よ遺して待しかどそよふく風の便もなければ彼地に五日滯留して砥澤川の西より南仁田山白井小幡の鄕殘る暇なく索てもたづねあハねば今ハ只世よなき人と思ひ絶て片埡とその子どもらを俱して里見へかへりにけれど假初ながら親子三人誓が擅燒くからき世に只遊してはは械がまわらず女の子は五才と三才なれば發ハ母の懐ろをハな

すとならば離れなんこの里には巫神子なんどいふものなければ片塊ハ鈴をふりてら口のうへの挙了せよとをり〳〵一部の因果經を説舎めて納得させ神樂の舞の手丸字祭文とやらかうやら習して些の營生になりしかば両三年を過すほどよもし又和主が思ひまどふて安房上總までゆきだる歟と片塊がとよかくに思ひ捨ねばうちもおかれず其方へ赴く人あれハ唐縞素次郎といふ浪人ハ彼地になしや索てたべと幾人よか誂へたれどもさる人絶てなしといふいよ〳〵死せりと思ひ決めて片塊ハ嫁りせよ一ッも年のわかきが花也とく締けと勧めても女兒ふたりが械になりてこの談合も埒あかす去年と暮し今年と明て竟よ十年食潰され細る煙の代鍋ていかにせましと思ふ折柴に上總へ言告遣たる里人が來ていふやういぬる月草津に湯治する人に夏織の絹を賣んと思ひて物夥多馬に負してまづ彼處へゆきたるよ思ふ半も幸ひなければ彼處より又武藏なる石濱まで赴きつゝ馬の脊を輕くハしたれどさしたる辛苦錢にもならでやうやくきのふ歸りよきしかるに彼途すがら不思議なるものを見たり大約草津の温泉の神より隅田河のわたりまで道次の神社毎に千社詣の名簿を貼て唐縞素二郎宗郷再拜敬白と寫したり襞に上總へ赴く折索てたべといれしとを思ひ出して件の簿を見せばやとて只一枚引剝してもて來れり廼ちこゝよと懐中を搔撈りつゝとり出しかば片塊これをと見かう見てこは疑ふべうもあらぬわが夫の手跡なりさては今なほ慈なく武藏州におはすめり索あはして給はれと唐草紅皿もろ共よ泣つ笑ひつ吾儕を責む斯まで證據分明なるにわれ又何を疑ふべき素二郎もこの年來妻子の往方をもとめかねてこれらの事をしたりけん渠よだよ環り會ば十年妻子の養育錢大なれ小なれ取らでやハかくて今茲は越がたき大晦日を引うけて居ながら敵を待んよりたづね行こそ捷徑ならめと思ひたつ日を吉日よして屋賣居て路費よ充足弱女原を伴ふてまづ菴中まで出てみれば是首の佛閣彼首の神社果して利主が名簿ありこの簿の末までいゆかば索ずも彼をとこが宿所は定かにしるべきなり現究竟の栞よこゝと四人ひとし〳〵嘆賞し日毎に途をいそがして石濱まで來て問へど唐縞とも素二郎とも名告る人ハ絶てなしといふに今更疑惑ふてなほその末を究んとて隅田河なる舡人を呼べども聲の届かぬよ口酸くなる梅若の昔もかくや加久縕よ水の綾瀬を外よみつ日ハはや暮る船よ乘れといハれて渡る牛嶋の牛に牽れて神詣其處よも和主が名簿あり又只ゆくとゆく程よこゝは名たゝ

る葛飾の眞間の手兒名の神祠よりあなたにはさる薄もなしこゝなるくしと芋環の途くりかへし昧酒の三輪ならなくよ杉たてる門に立よりたづぬればあるじの翁眞白なる眉を顰めて沈吟じ素二郎といふ人はこゝらわたりに絶てなし素太夫といふ人は如此〳〵の虎にをりもしこれよもやと答る折行縢したる一個の武士罪人を縛めて從者に率しつゝ件の門を過るにあん翁ははやくこれをみて里見家の執柄は正禾殿とて彼刀稱なり采地よありとある民數帳を繙め給へば人を尋る事便りありはや從者よ問給へと指して誨しかば吾儕慌忙て飛が如くよ走り着又如此〳〵と尋れば正禾殿みかへりて件の唐綿素二郎は繼橋氏の女婿よなりて名を素太夫と更しより今ははや十年を經たりよくそのこゝろを得させよといはれて從者立止まり前面にみゆる槐樹へ繼橋が宅地なり問るゝ唐綿素二郎は繼橋氏を冒ぎて名を素太夫と改めたり八九歳なる女兒もありあるじは年來他鄕にありしがけふ恙なくかへりよき素太夫と尋よと叮嚀に說示して遯いしく走去ぬこゝに和主が緣故來歷定かと宿所もしれたるはは由あるに似たれとも子まで生たる入婿三昧聞ばわれだも覺たゝしきに片埜が胸のほむらは富士の煙も淺間嶽もかくまではあらじものをとおもひ汲つゝ先に立門の槐木を的にして僉矢のごとく走り來つ折戸をいれば樣側に立在む和主が脊影見つけていはや百人力こちら向して面の皮を揑剝て熱腸を冷んと思ひしかども是までの事の頗末說竭さねば吾儕が恩義も片埜が節據もしらするよしなきよ嘲りわけてはなか〳〵に止どころなきまゝに老武者の哀しさは吭に疲勞て息續かずしばらく徨陣にゆづらんといひつゝ諸肌推脫て扇づかひも肘を張る叔父を見まねよ片埜いつと寄て夫の膝へ膝すり着て胸前をに手に拿て酸鼻み誠すくなき人でゝろを鬼とも蛇ともいふめれと燒野の雉子夜の鶴妻を索ね子をおもふ天飛ぶ鳥も恩愛に心うら表なきものを結ぶい名のみ草枕覊旅の危難を幸いよして妻を掐子を棄て身ひとり榮利を謀られしとはしらずゑて愛に堪易ぬ操よ姫松を守り育て十かへりの春秋をはや迎つゝ長女は十四二女は十二にぞなり侍る彼等が谷長伸るまゝ物の沒却も胸苦しく叔父とはいへどもその家にかゝる劬勞に苦をまして望みは絶ぬ親の欲形なき世をわたる其紐緒なかく玉匣ふた親ながらうち摘ひ孚れなば子ともらが爲いかばかり村肝のこゝろつよくて憑しからんとにつけかくよつけて只なつかしとのみ思ひわぶ夫の爲よよる年の衰れ果しは目よみにずや絶ぬ歎

きに袖ぬれて涙よ洗ひさらしたる衣裳の紐糸は朽るともめぐりあはんと旅衣はる〳〵來ても二
鞘の家よ隱れて他妻よ子さへ產して愛しみこゝろ變りし夫よはいふがひもなき事なれども人の夫
をわがものの貌に根とり花やぐ姪婦どのに怨の恨りいひ竭し恨かゝやかして諸ともに死るより外
すべもなし後婦どのをとくこゝへ出し給へと高やかた敦圍ながら拿たる衣領を淡緒よ糾て前へ
引後へ捩つ指啖のをんなの力すさまじき意馬よ鞭つ天目法印汗拭ふ手拭を鉢卷よして膝うち
拍し片埡負るな席薦の緣へ鼻つら摺てからきめ見せよ十年妻子の養育價利に利を加て思ひのま
〻みな受とらねばいつ迄も吾儕ハこゝよ居敷りて今より居居と唱させ左圍扇で食でのみさばか
りの樂せざらむや入壻にあれよくも質さで女房子どものあるものを引入たれば不義淫奔手づよ
くせねば辟果ず翌とも待で覿面に女の子もろ共追出させよ怠狀乞とも油斷してとり脫すなとむ
かひ火を燒つけられていとゞしく泣聲立て罵どよむ母の怨はよしあれども父のこゝろはまだし
らねども聞よ得堪ず胞姉妹はよゝと泣つゝ兩統の間に入りて推禁め仁田とやらよて父うへに棄
られし時はいわけなく夢ともわかず年を經ておん顔定かに認らねば只なつかしく慕しく哀ふか

りしに恙なく不思議にたづねあはし給へば飽まで喞言給はずとも鬼々しげなる父うへの心よハ
らせ給ひなん好も惡もあひ見ての歡びよまゝすをハなし只願しきハ舊の如くひとつになりて睦じ
く百とせ千歲の後までもと迭よ思ひ給ハずやと三人四人にかき口說るゝ素太夫ハ次の房なる擧
や聞ん渡島がうたてくや思ハんと彼に面なく此に鬱悒背を浸す冷汗は身を締るゝ心持して壁立
られぬ呵責の苦しみ是も過世の惡報かとひとり念じてなか〳〵に一言半句も爭ハず遽ひそめき
彼此をなだめてやうやく片埡が拳をはなちて衣領かき合せ外叔の恩義女房が苦節越の長濱ゆき
靈すより遁かりつる年月を歇ず變らず緊來て逢もあハせも玄給へハ腹たゝしきも一トしはなら
んいハるゝ所露ばかりも理りならずと思はねど凡そ生とし活る物親染夫婦にますとなく恩愛親
子にますものなきにわれいかにして妻を捐子を棄て利に迂るべき棄しとは百遍千遍往方しれね
ば亂軍よ擧れよけりと思ひ決めて法師よならんとしつれどもこれさへに意に任せずかくても脫
れぬ時宜によりて他の家を繼たるゝその故は箇樣〳〵と仁田山の戰場にて唐草を奪去られこれ
を追つゝゆくりなく鶴姫を救ひしとこの日題目寺の沙彌寂念が介抱を得て死を脫れ彼寂念はわ

が箭面ゑ立て命を隕せしとこの恩義ゑ絆されて儘橋氏の遺跡を弔ふ怨念が妹なる鮮衣が新郎ゑなりしと繊月形の太刀を蒔れ三年が間彼此を索巡りてけふはからずも宿願を果せしをすべてこの十年以來里見家ゑ仕たる榮枯得失明々地ゑ愧を忍びて物がたれば片埜い叔父もろとも聞も得果ず頭を掉子をば業ずと宜へども榮利に引れ給はずは里見殿の姫うへを救ひ給ふびうもあらずこれらの故に唐草は業られたるに疑ひなしと席薦鼓て怨ずれば天目法印頷ひ反し片埜よくゞ詰たるそれこそ推べき所なれ彼恩この義といはるれど妻を捐子を棄て他の新郎ゑなる僻事を思もいふ歟義理といふ歟四も五も沒らず眼前り彼女房をこゝで召して去するとも又去らるゝともいづれ恩義の輕重を業の秤にかけて見せん彼女房をこゝへ出せとく召よせて逢し給へと哮るをやうやく禁めてもわれさへになは落着ぬ胸を鎭め且く思尋しいはで叶ぬ事ながら告ねばこそあれ斯迄に疑はれては隱すに由なく望るゝ隨鮮衣を今宵直さま出しやりなんそを慫らずる從者に究竟の人こそあれ此人は是別人ならず片埜が幼稚とき父に遲れし兄洲之助折もよく父へ來つ鮮衣諸共彼處におり先對面し給へかしと云つゝ立て客房なる障子を左右へ推開けば佶と見かへる叔姪胞姉妹狂うち騒く横死の光景血に塗れたる二個の死骸は箏木のごとく横ゝり戎る女の子等は泣沈てかくても頭を擡得ずこれはいかゑとばかりに驚きまどふて面をあはしかの〳〵貌ち更むれば素太夫も又嘆息しこれ見給へ是は女房鮮衣なり彼は繼橋諳代の私卒飯沼丁七といふものなり頸なき死骸はに埜が離別の兄洲之助なりその乳の下に宿ありてかたち洲濱に似たるを見給へ紛ふべうもあらぬかし又鮮衣が亡骸のほとりにをるゝ女兒楓年は僅に九才なり又丁七がはとりゑをるゝ渠が女兒渡島なり某し發に奪とられし寶刀の賊をたづねつゝ旅より旅ゑ年を累ね今茲上野なる草津ゑて洲之助に邂逅ひ桶川まで伴ひしがきのふ如此〳〵の故ありて某しゝ其處に留まり渠に書翰を齎してわが宿所へ遣せしに鮮衣等は洲之助を良人の讐敵と思ひあやまち苦殿してこれを殺しぬ事果たるとき某しも途いそがしてかへり來つ彼洲之助は仇ならぬ事分明に說示せば鮮衣丁七慚愧ゑ堪ず忽地自殺したる折正禾時綱詣來給ひて此洲之助は寶刀の盜賊乞目壓六を喫れたるものゝよし支黨の惡棍等が首伏ゑよりて事發覺る渠が密してもてる刀をあらためゑ見よといはれしかば某しふたゝび驚き惑ふて聽て件の刀を見るゑ果して年頃索たる繊月形の

寶刀也よりて鮮衣丁七等は思ひがけなき功名して夫の爲に恥を雪め烈女義僕と稱せらるはじめをいへば箇様〳〵尾りを說ば如此〳〵と洲之助が事の顚末言葉せわしく物がたり寔に輪回應驗は影と形よ異ならず某し曾て片埜と唐草紅血等を樂ねども往方もしれず存亡も定かならねばすべなくて鮮衣が新郎よなりしより更に一個の女兒を擧け十年に及ぶこの月この日鮮衣不慮に世を去れば前妻片埜索來て舊緣しを復結ぶこれを思ひ彼を思へばあふも偶ぬもみな天命窮達聚散もかならず時あり產靈のわざくれ歟あやしき夫婦の情緣なりさは今茲より三年あとに其し件の寶刀を索てこの葛飾を起程日大誓願を發起してみちのゆくての神社毎に千社詣の名譽を貽しが主君へ憚るよしあれば繼橋素太夫とは齋も寫さず廼ち唐綿素二郎と舊名を顯したりこは片埜等が存命てもしこれを見ることもやとおもふ誠は一事兩用上野下野越後陸奥ながき羇旅に濟の歎はや一葛社よ滿る迄彼此へ遺えつゝけふ立かへる眞間の里手兒名の社を打ぞめにせざりせばいかにして和君等爰へたづね來べき卿の冥助も只人の誠よりこそ顯るれ是よて疑念を散玄給へ惡人なり其洲之助ハ片埜が兄なるよ首ハ浦田へ梟んとて正禾殿がもたし給へば死顔だよも見るよしなくてこれのみ遺憾からめえかりとも幼稚より離別不通の兄なれば緣坐の咎あるべからず心やすく思ひねといと叮嚀に說諭せば天目坊も片埜もハじめハさしも猛かりし勢ひ忽地衰へて呆るゝこと半晌ばかり唐草紅血胞姉妹は血に塗れたる死骸におそれて面色藍より青くなりぬそが中に片埜ハ兄洲之助が兇惡なる天罰竟よ脫さり玄その死をはてハ今更に骨肉の情忍びあへず哀しきことは哀しけれども憎し妬しと思ひぬる鮮衣さへも死したれば歡ばしさも限りなく胷躍々と踊るのみ有繋に愧てよくも見ず又天目法印は素太夫が罪ゆるされて本領安堵すべきよしを聞ば思へはわがうへに德のつくべき萌ありいと憑もしくなるものから人の性ハ固より善なり鮮衣丁七が心烈節義に感涙を禁めあへず衝と身を起して亡骸をと見かう見て嘆息し洲之助の離別の侘連も係もなき奴なれどあるじの爲よは面ぶせなり嚮には腹のたつまゝに悔しき事をいひつるかな喃素太夫寔に和殿は妻妾緣あり夫冥利に稱ひしものなりわが姪なりとて嬰るにあらねど片埜ハ十年棄られながら夫の爲よ筑摩の鍋の歎もかさねず患苦の中と子どもらを養育せしのみならで夫の往方を尋たづねて環會しハ貞女ならずやこれにもましたる後妻どの賊を擊寔刀を復

し夫の恥を雪めたる功績高きハ烈女なり早りて自害せずもあらば夫ひこりよ両個の女房劣らず
まさぬ貞操節義あちらへ揚る颯もなくこちらへ落す蓬もなく事果べうもあらざりしよ現や禍福
は輪來ひとり繰しは今さらにハと惜むべきとなから斯ならねばおさまらず俗よいふ物怪の幸い
といひかけて口を指鉗めば片琬は傍腹痛くて笑れもせず泣れもせず良人のかたに小膝をよせ事
よく問も極めずに只一トすぢに恨しと思ひまどふてこゝろにもなき事さへにいひ過せしはいと
浅はかなる女子の愚痴それも夫をいと惜と思ふ誠と勘解もせばゆるされもすべけれどこれにも
まして面なきは兄洲之助が兇悪なり鮮衣どのよ撃れしは自業自得よ侍るめり只痛しきはおさな
き人その名を楓と呼るゝと歎かくは母公を喪ひて心ぼそくゞをハすべき今より吾儕ハふん身が
母なり大かたならぬ恩義も侍れば唐草も紅皿も眞の妹と見給へと吾儕は實の女兒より八しほに
まして欲と慰むれば跑姉妹はもろ共にさし招き彼子よこゝへ來給ひねよき物を進らせん驛
もとよ使るゝ女の子もこゝへ聚合ねと呼びたつれども身ひとつの秋よ楓が涙の紅ゐ立をしらぬ
渡鳥もふさハしからぬ繼母ゆ前の心の底をはかりかねて應するのみ伏沈む子よも羞ずや素太夫

ハ口舌の波風おさまりて片琬等がかく迄に異成がるに憂をわすれてにこやかよ其方を見かへり
給しも前妻ありそが女兒さへあるよしハ環てより正禾殿によくしられたれば後やすし實刀をか
へしたてまつれば本領安堵も近きよあらんさるときハ片琬ハ三百貫の奥さまなり外叔の恩も報
ゆべく女兒等を佳壻に配せん事もいと易し寒に苦は是樂の基なり日を倣へて待給へといふよ天
目片琬等ハ歡ぶと大かたならずいよ〳〵憑しく相譚はどよ日ハ暮たりかくて天目法印ハあるじ
を賓て通宵埋葬の准備しつ棺を調購へ里人を傭ひその拂曉よ鮮衣等三人の亡骸を弘法寺へ送る
ものから僉うれはしきおもゝちせず只楓と渡鳥のみ涙も袖よ朽ぬべし今のわかれの哀ゑきよ後
又いかなるうきめを見んと思へばいとゞ形なき世ハかくまでよまゝならぬ眞間の里とて繼母よ
果は追るゝ名詮自性稚枝の楓吹しをる入江の風にさわぐ浪のくだけて物を思へとてや名も鉄皿
といやしげに呼かにらるゝ物がたりこれその事の起りなり

○第十二　主の爲に赤繩を結ぶ　侍兒渡鳥が百夜の密語

正禾彈正時綱ハ日ならず浦田へ歸城して義堯朝臣よ拜謁しまつ國府臺新城廓の地圖を見せまゐ

らせその識をはりて織橋素太夫が事を聞にあげ纖月形の刀を返したてまつれば義堯大きに歎び給ひて漫よ膝の進むを覺にず委細に尋給ふよなん時綱は鮮衣が心操を思ひ汲てま事しやかにナやうこの事すべて素太夫が一己の才學をもて洲之助の疊六を眞間の宿所へ誑引寄せ主從三人さし挾て擊ときに女房鮮衣と私卒丁七は深痍を負て身まかりつこれによりて疊六が支黨二人を擊漏せしにこの日時綱折もよく其はとりを過りつゝ矢庭に件の惡棍等を搦捕つゝ是を見るよ這奴等は一昨年追放されたる田子江疣三五十井墨太といふものゝ再犯その罪輕からねば疊六が首もろ共射てまわりゝと時宜よく執なしまうせしかば義堯感嘆はじめに倍て愉よびようち點頭人みな織橋素太夫を隨弱のものゝとて譏りにけれど此度不思議の大功をなしつ前の罪を貰ふに足る加之らずその妻その僕主を誅て賊を擊國の爲に死せし事節義勇悍倚罕ゝよろしくその名を竹帛よとゝめて後々までも傳へなんわれ近年多病よりて軍略政務は大かたならず弟義弘に任するものからこの賞罰はみづから沙汰せんまづ素太夫を召よすべしとて殊更よいそがし給へば時綱とれをうけ給へりて退て命を傳るよ水行に順風なりければ往來三日ばかりにして素太夫來里へ

到着し義堯義弘に見參せしかば年來逆旅の艱苦を勞ひ節義に死したる鮮衣等を惜ませ給ふ事大かたならず則ち此度の勸賞として本領安堵の御教書を給へり正禾時綱が手に屬て國府臺なる新城を成るべき旨を命ぜらるこの日疣三墨太等は竟よ頭を刎られて疊六が首もろ共楢葉驛へ梟られけりかゝりし程よ素太夫と年來他事なく交りたる苗頃將監等は厩儀の樽殺齋してみなその僑居を訪しかば疎きもおのづから其處に集合てその高運を稱讃すよろづ綜の爲脉葬に浦田を迫れし時よは似るべうもあらざりけり斯て早月ごろ經て國府臺の城成就せしかば正禾時綱を總大將として苗頃將監政田欽文太織橋素太夫等城の內外に宅地を給はりかの〳〵妻子を携へつゝその手の雜兵夥多將て僉下總へ赴きぬ今なほその蹟彼處にあり里人これを城山と唱ふ原是一座の山よりて新利根河を帶にせし究竟の要害なり當時小俵の大軍こゝより擊て入りし事ふたゝび三たびにおよびしかばこれを壓ん爲なるべしされば織橋素太夫はやゝ宿願を果せし事みな鮮衣が功績なればふたゝび妻を娶らじとて其亡骸よ撥ひたる屍るもまた乾ぬに前妻片埡たづね給來て懺悔を數怨を述たる理りなれば今更に阻むべきよしもなくて阿容〳〵と正禾よ告すなはち守

へ間にあげて更に薄縁を敷にけれど片埦は餘怨なほ散れず動すれば十餘年來られたるをしうれく責め絶て良人に口を開せず慾に引れて異妻にあひたるは僻事也こしりつゝも彼婦をとにかく忘れがたくてや墓參りのみせらるれど死たる人が出てもあはじ嗚呼なる所行なし給ひそと嚴しく罵りて香華だにも手向させず悲むべし鮮衣は節義にその身を殺せども墳は亂草に埋れてはやくも孤兎の栖と荒果家刹は蜘蛛の網に閉られて鼠糞堆高く積けりかゝる物から素太夫い素より女々しき性なれば妻に罵らるゝ毎に昔時悔しく思ふのみ且愧且おそれて牝牡位を異にせしかばその家の奴婢などもたゞ片疋に阿諛てあるじを敬ふもの稀ゝ威勢かくのごとくなれば片埦いよゝ乙の事をおのがまゝよ進止ひ只その両個の女兒にい生年よも綺羅を被銜らせ楓にい洗濯衣の針目麁なるを被せて三たびの飯の數を定め只一碗の外を許さず斯情なきうへに唐草紅皿同胞は楓をいたく蔑りてさらぬをまでよ事しやかに今如此〳〵のををしつ曩にはかゝるををいひしとかいろ〳〵に告しかば片埦は聞もあへず驕て楓を呼すにていひも釋せず責罵り泣ば泣とて雪の如き頬を抓滅ていよ〳〵罵り爾が事き女の童に楓といふ名はいと過たり紅皿が妹とすなれば鮟皿と呼んこそ似つかはしかるべけれとてこれよりしかゞ呼せしかば奴婢は異なる名也けりと笑ひつゝもいひ馴て楓と唱るものゝなけれど素太夫すらこれを咎めずわれも早晩化せられて鮟皿とのみ呼びしかば渡島はこれらの事を聞くよも堪ず見るよ忍はず朽をしき事限りなければあるじのはとりに人なき折その憤ほりを竊よ訴へいかなる故よ侍るらんかなじおん子にをはしませども娘さまには綴りたる衣只ひとつ被せまわらせ三たびの飯も一碗に限らせ給ふはこゝろ得がたきいと憚りある事ながら實の名をば呼せ給はで飯皿なんど名つけたまふは外間わるく侍らずや母御前をはゑまずならばかくまでには侍らじものをと云つゝ涙さゑぐみて泣音を袖よ推包めば素太夫は點頭のみ人や聞んとく立ねといふより外の回答せざればとばかりにしていふがひなしその夜さり片埦は良人を傍に引着て啓草紅皿がこのみの衣此彼と相譚ば素太夫いからず便宜を得て見れば鮟皿は肌うすげ也渠よはなとて人なみなる衣を被せ給はざる朝夕の飯なども一碗の外食せずと云ものゝありしがといいせも果ず片埦は目尻氣逆て良人を疾見さのたまふは緞毋の僻事すとのみおほすめり飯皿い生ぬ子なればよきがうへよもよき衣を被せまはゑく思へ

ども渠はわろき癖つきて遺尿をし侍るゝ事も下漏す事あれば襁褓圍いへばさら也生年の衣裳の解洗ひも毎日のとなれば精絢てつゝり衣のみ被せ侍り臍の緒を定めたるもこれらの故に侍れどもおん身よ市如と告ざるは爹親よは愧もやせんと彼奴が爲を思へばなりその故をしもまちずして只吾們のみ惡棍にせらるゝ事こそ朽をしけれと席薦敲て敎圍ば素太夫はよしもなきといひけりと呟きて心の中にハ渡鳥を怨しからず思ひけりとは片埡もはや猶してこれらのをは渡鳥が喇りをしへて飲血に此如〳〵と云せしならん這奴等ふたりを引はなつ術もがなと思ふ程よ明の年水無月に片埡は安產して此度は男兒なりければ素太夫殊に歡びてこれを小素太郎と名づけつゝ掌この中の珠挿頭の花と寵愛す是よりして渡鳥は小素太郎に掴られて鮟皿がはとりには暫時も侍る暇なければ傍の人目をしのび〳〵にその徒然を慰むれば鮟皿は過來かたを思ひ出つゝもろ共よ泣ぬ日ハなかりけり是よりさきに天目法印ハ十年妻子を喪ひしを恩に被て素太夫は絶て屑かずともせず傍若無人の爲躰一家の耳目を驚かせば素太夫はと〳〵もてあまして渠を眞間の別莊よ懸居させ小厮ひとり使はせて物不足なく養ひしかば內外よ物の沒却多くて三百貫は大かた

ならず妻子の衣食に費しつゝあるじハ却て人なみなる鐚一錢貯蓄ず奴僕にひとしき疎食して只女房に役せられ世の胡盧になりにけりこの下六七年が間物かたりなし光陰矢の事く又梭の如く白駒隙をゆき二鼠須臾も止らず天文もハや十あまり七年になりしかば鮟皿ハ艱苦の中に人となり今茲二八の春を迎て心さまます〳〵怜悧容止一トしは良腕なり片埡ハ女兒どもが渠にハいたく劣れりと人よいハるゝともやとてこれさへに妬くおもひて鮟皿にハ化粧させず補ハ賃生であらハるゝ襤褸じかなるつゞり衣の垢つきたるのみを被せ席薦ハ斷離壁毀て去處たる挿室を彼米遁女が平居と定て朝夕の飯なども渡鳥去て齎し遣し絶て母屋へ出ることを許さずしかれども鮟皿ハ年九ッよなりし秋まで母鮮衣が敎たる手かき物よむ事ハさらなり縫刺のうへ糸竹のしらべひとつとして忘るゝことなく就中衣ぬふ事は針妙とかいハるゝものも及ざる利手なればよき事も只わろしとて鳥る繼母も我を折て物唐草紅皿が衣裳と云ば有がうへに推若て鮟皿にのみ縫せり是よりて鮟皿ハ旦ても暮ても縫刺に暫時の暇倘なきに唐草ハいぬる天文十五年の春苗頃將監が一子畑之進と婚姻とゝのひて今は彼處になりながら鮟皿が縫たるならねば衣の被こゝろわろ

しとてかのが衣裳のみならずそが夫の衣さへにかならず親家へ遣してこれ整までに縫せてたゝ明后日までにといはせしかばその毎遍よ片撓はみづからこれをもて鉄皿が子舍よ赴きけふも苗頃が姉の消息して如此〳〵といひ來したりさりとても紅皿がおうちおきねといふには侍らず彼も此も整までにみな刺果て出し給へ衣領下の小裂ひとつでもはふらかし給ふなよ綿も秤よかけてあり解かへしたる糸一ト筋でも失へりなんといふ彷くらきいひ譯せばすゝてかん身が爲にならず睡り輾て針目を走らし姉夫よ笑れなばかん身ひとりの事には侍らず唐草が恥ずかし吃といふとは片耳へ紙栓さして拔し給ふな嗚呼いひがひなの少女やといと憎さげにいはれても鉄皿は罵ばかりも惧たる氣色なく恭々しく言うけして及ばぬまでも推辭となし渡島は傍膜痛くてあなこゝろなの人使ひや三面六臂ありとかいふ神ならずは只一ト夜さに三ッ四の衣いかよして刺果給はんよしや母御の仰なりとも逗て三遍に一遍は推辭給へかしと思へども明々地よはいふゝうもあらずかゝる難儀は月ごろ日來いく遍といふ限なければ悔むゝし鉄皿は玄冬の雪の夜も埋火に手を暖めあへず入聲の鶏を聞ずして睡るとはいと驕ゝ又三伏の夏の日に蠅も拂はず蚊遣も得

せず色よき衣は手よ觸れをわが身はわびぬ月草の色もうつらう衣よ眞白肌膚を掩ふのみ髮もかたちも結はで素顔愛たき夏の富士黑白なき烏夜の梅の花香よ顯れつしかはあれど夜光の玉もしる人なければ卞和が足を續よよしなく芙蓉もいまだ水を出ねば大眞が美を比するよ足らず自然の才色ありながら雨夜の月をよよも出ず水澤に騷ぐ昧村の誘とて人もこざぬきに限りもしらず閉籠られて待宵ならぬ小蟹の蜘蛛の糸繰る縫刺に身さへ心も結ばれいと堪がたき折はあれと片埦は象てより子舍の隍子に穴を穿ちて紅血と迭代に間なく時なくさし覗き又あるときは今茲僅に七才なる小素太をおのが眼代にして戸口に立し守らしつもしうち俯てをるよをを見もし聞もするときはその怠惰を責ると地獄の呵責に異ならず況や時日を限れる衣を刺後るをあればゆき巡り立かへりいつまでな置止まずこの故よ鋏皿はこゝち死ぬべく思ふ日もなほ勉てゞ衣を縫ふ現その事の爲体をづ心なき炊妾すらいと痛しくおもへども祟をおそれてよりも來ずそが中に渡烏のみ人目を竊て介抱のゆき屆まで脊を捺り湯礫あたゝめ勸るよそれ將畫は憚りの闕守あれば思ふに任せず只玉蜻の夕去來ればおのが臥房と彼子舍とその間近ければ通宵見とりつゝ或い

火を吹蛟を退遷ひいと具成に仕しかば是にゑ憂苦を慰められてをしからぬ世よ玉削けふの命を
たもちけり不題正禾彈正時綱は嫡に飯沼丁七が早りて自殺せし事をこゝろにいたく惜みつゝ祿
高き武士といふとも議に依て死をおそれざる堰が如きゝいと稀ゑ男子ありやと尋るよ渡鳥が外
女の子もなし但彼が妹の子よ荏柄具吉といふものあり父は國府の蠻のはとりなる新利根の村長
なれば富よもあらず乏しくもあらず同胞も多かるよ彼具吉ゝ幼稚より誰をえねど武藝を好み
て心ざまいやえからずこれによりて丁七は外侄三四人ありといへども具吉をのみ愛してわが女
婿よせんものゝ渠ならで又なしと心に占て琛てより渡鳥にも具吉にも明々地に說しらせしを里
人よしるものありて時綱よ告しかば則ち召よえて是を見るよ憑しげなるわかものなれば嘱て其
裁に乞て家隷にしたりければ具吉こゝに望足りて時綱よ仕ることはや年來になるまゝに今茲は廿
三歳なりいと成具なるものなれば外伯父丁七が枉死を悼み琛ていはれしとさへよ年を經れども
覓に忘れず仇なる心なつ草の絶ず渡鳥を訪ひしかば渡鳥は嬉しくもいと憑もしきこゝちしつ他
事なく相譚に稚き時はその家にてもろ共に育たる從兄弟どちなるうへに親の結びし妹と夫の緣

もあればもろ共に簷の垂氷とうち解てはづかはしくも下紐の闕をわれから放せども更に人目の
關の戸はよに越がたきものにしあれば立わかれつゝはゐもなき果は淚の雨霑して雲となる夜は
罕なりき片埜はこれらの情由を露ばかりも曉らぬど彼壯佼はこの地の城主房總第一の執拗なる
正禾氏の家隷なるよし渡鳥に聞しかばひとりつくゝ思ふやう唐草は父よりも祿高く職重し苗
頃ぬしの愛子なる畑之進に嫁りしかは渠がうへは後やすしこゝろよかゝるは紅血のみ年はや二
十に遠からねどこれかと決めん婿かねなえ正禾の大人は家系貴く守に重く用ひ給へば人亦これ
を敬ひて僉その下風よ立んと願ふ數萬貫の主なるよその子左金太郎時忠ぬしは守の侍舍弟義弘
朝臣の陰兒にをゝせしかば時綱ぬし裘ひとり年ゝはや十八になり給ふとゑ人はいふなるわが良
人と彼大人とは鄰言にいふ洪鐘よ挑燈對揚べうはあらねども甘旨く謀らば紅血を娶らるゝともも
ありなんこのよすがには彼壯佼渡鳥が從兄弟とてわが家よ來つると思ひがけなき幸ひなり後に
用る事あらんと肚裏に深念えつこれより えて渡鳥が忍び〳〵よ淚血に使るをえれども咎めず又
具吉がをり〳〵來て渡鳥とうちかたらふを闕覗れども絶て囲まず紅血よはわが計略を潛やかに

說しらし繹の便宜を得たらんには彼壯佼を媒妁にして如此〳〵の消息を左金ぬまへ通らし給へ對揚かたき妹夫の緣しは明々地には結れず思ひをよせ情を通しあふ夜の數かさならば彼方より媒妁して婚緣を議せらるべし彼郎は京鎌倉よも傳聞給へめ繹成ときは一期の榮華おん身が上をいへばさらゑ親の爲同胞の爲これに增事やはある渡鳥を手押してこしらへて見給へと具だちて耳語ば紅皿は赧顏て果敢〳〵しくは應せず長き袂を膝の上に疊着ても色に出る意中の娛しさよ包みかねつゝ立よけれど日來はいとも憎さげよ責使ふたる渡鳥に大かたならぬ密事を忽卒には相譚かたくて心ぐるしく日を送りぬとはゑらねども渡鳥はわか身の呵責早晩に忘るゝでとくなりよけれど有繋よ主の鉄皿が久後の事今の艱難救ふ方便のあらんかとて具吉が來る毎よ彼爲賄を物がたりして計策を求ゑかば具吉頻に嗟嘆しつ心操と容止と人よは優れ給へども斯薄命よをはする事聞にも得堪ずいと痛ましされば𡚁てわれとおん身が分際よて救ひまゐらすべうもあらず別におもふよしあれど目今はいひがたしうち任ておきたまへと懇しく回答しをいかに〳〵とまつ程に有一日具吉又來ていふやういぬる日に相譚れたる彼君のとつ〳〵と案ずるに凡そ貴も賤きも女子は苦樂他人によるその良人富貴なれば身も隨つて富貴とその良人貧賤なれば身も困つていと貧し只彼君を救んには竊に夫にあはゑまゐらせその助けを藉より外に又施すべき計策なしよりてわが年頃仕たてまつる郎君左金太郎ぬゑへ件の事の趣きを委細に告まゐらせて扨わがおもふ緣由を白地にまうせしかば耳を側て小膝をすゝ巡聞も得果ず嘆息しそは憐むべきをになん緣母の鬼々しき昔時物語なきにあらねどかゝる怨は世よ罕なりゑかるを堪も忍びたる彼未通女が心操賢にして孝といふなん頃日いわが爲よ婚緣を謀るものいゝそはゝそといふをしらねどこゝろよ稱ふものもなし只橋が少女のみ你がいふ所實事ならば實がはしき緣しなりこゑらへて見よかしとて消息を給はりぬ是よくまうし給へかしといひつゝ纏て懷中よりとり出て遞與す一封を渡鳥は手ようけながら忽地に胸うち騷ぎこは推着たる媒妁ゑ彼かたざまよ一遍もはのめかしまゐらせず足のもとより立といふ鳥の跡におもふををいはせ給ふはあまりに早かり沙こゝろ正しゝましませといとおぼつかなく侍れども今更におん艶簡をまゐらせざらんもはゐならず繹迷かよならずとて吾俯をな責給ひそと回答をすれば

真吉はは、と笑みつゝ渡島が七九兪のあたりを磴と鼓情をしらぬ人もゞあるはじめより戀する
やせずやと問て玉章の使にたつものよにあらじ成もならぬも媒妁の巨拙によるべきのみわれに
辛きめ見せ給ふなといひかけてはや歸りしかば渡島は彼一封を懷中よ挾めつゝその宵人定りて
常の事く鉄皿がはとりよ侍んて江湖上の物がたりなどし果て後聯てわが思ふと真吉がいひつる
といと真成に密語つゝ件の艶簡をまぬらすれば鉄皿は見もかへらず眉うち顰て嘆息ゑ渡島は吾
情が爲を思ふにはあらずして浮名を立せ罪をまさせなほ家尊家母に追れよとて正なことをする
にやあらん你が真吉と情由あるは親の結びし緣ゑなれば浮奔に似て淫奔ならず吾儕固より很人
にあひもせず見られもせず何をよすがに後くらき緣しを他に結ぶべき再てかゝる使せば惡しか
らず恨みなんとくもて立ねと窘められて渡島は頷を拊かん情ほりはとわりなれど左金のぬしは
櫻家の郎君まだ見ぬ君を戀ひ給ふは絶て言たることに侍らず君は適世の幸なくて孝心ふかくまし
ませども父うへこれを見かへり給ハず母堂前繰く惜ませ給ふと傳聞給ひつゝ幕はせ給ふは世間
の戀する人と異なるに侍らずや加以らず彼郎は守の任君にましませば後にこのと發覺るゝとも

何事の侍るべきおんかへりとはとまれかくまれまげてこの卉梓をとゞめおかせ給へかしと叮嚀
よ説すゝめて陸奥紙もて封じたる件の艶簡を推披き鉄皿がさし遣きたる膝のうへに載つゝ見れ
ば懇志たふはかきもくどかで只一首の歌をなん「葛飾の真間の繼橋するゑかけてむすぶはじめの
水茎の跡」墨色さへよ艶やかにいとも愛たく書給ひぬ鉄皿は渡島がいふよしも又とわりなれば
阻みも得せずうけも引ず顯ひ衣領よさし入て只潸然と落す涙よ彼短冊も濕れつべし綽立地にな
るべうもあらねば渡島は再びいはす詰旦真吉詣來てかへりをはいかよと責む渡島はは如なげに
如此く〳〵と告しかば真吉聞てうち點頭殿しかも宣ひき一應にいとゝのひがたげん又これ進らせ
給へとて一封を遞與てけりかゝりし後ハ玉章のみ千束にもあまる物から鉄皿は一ト たびかへり
とたよせざりしかば真吉は焦燥て渡島をいたく責む渡島は責られていよゝせんすべなかりけり
さる程よ上總よは金剛神の新御堂今茲檜皮を葺更まぬらせ結緣の爲一百日戸帳を開きておがま
せたまへば彼此の良賤遠俗參詣途わたる蟻のごとく木更津の乘合舟は水に散浮く木の葉に似た
りと真間閭府臺の里人さへ鳥散動を大かたならず片埳いかの神の靈驗利益はよくしりつ紅皿が

姫綠の距事をまうさんには兩個の女見もろ共よ自ら參るよます事あらじと只願思ひ立しかば婿の畑之進に相譚つゝ俄頃に仕裝を整へ婿と吾兒の小素太郎と繼橋苗頃兩家の從者此彼十人あまり隨て水行を上總へ趣きけり渡島も此度の俱に隨てより充られたれど娘さま參らせ給はぬよ何たのしくてと咳きつゝ嘆といふその夜より心持わづらはしとて留りに成又あるじ素太夫は女房女兒が還る比まで休暇なるべくおもひしに同僚なる甲乙病苦る事ありと聞て猛に城へ召のぼされその日よりして夜だに退出ず留守には耳嚢目液垂たる味噌平とかいふ私卒一人と炊妾のみ侍りけり渡島はかゝる便宜の又あるべうもおぼにねば眞吉に如此〳〵としらせばやと思ふのみ言告やらん人のなければ片便りなる苧車のくるか〳〵と待はぎに墓なくもその日を暮せば夜も又短きこゝちしつ亥中の月の出る比後園なる諸折戸をはと〳〵と敲者ありたれなるべしと遽はし〳〵立出て闕窺れば果して是眞吉なりなどてやはや來給はざる相譚べきとあるものをと恨ごちつゝ戸を開れば眞吉は駈ても入らずさのみな苛く叱りたまひそ兒々しき母ぢ前のぢ達二人を伴ふて上總へ唐行給ひしよしを今朝ある人に聞たりき海月の骨よりなはあひがたきこの時を遁しなば後悔其處に立べからずと思ひにければ密やかに郎君よ告まゐらせ推ておん供しつるなりよしや彼君いかばかり心づよくをはしますとも見ぬきのふこそ強而もありけゆ人の誠には鬼神も感ずるといふなるに鋒よく謀り給ひねといひつゝ眼を回して外面をさし招けば左金太郎時忠は聞きかたより衝と入て目ふかくしたる笠をやをら指揚て渡島に對面玄日來より姝妙の淺からざりし心づくしを只願欽び卹ゆれば渡島は夜をこめて來ませし君が誠心を叮嚀に稱つゝ斯までよいちはやくゑろし召れんとは思ひもかけずひとり心を苦ゑめ侍りきさはれ迭に思ふを暗に合るは君と君を孫てゞ護る神たちの結し給ふ緣しにこそ今暫時まち給へ留守するものが寐ずやあらんといふもいらふも耳語の極うち渡す曲淵に伊あぶなき木下闇惜しき夜を深ゑけりされば世の常言に鬼の留守なる洗濯とは血盆經のこゝろをいふにやそれにはあらで鮎川は母姉の旅衣を三日ばかりに刺立るとて生年よりはなはいそしく夜も臥てとの稀なりければいとう倦勞しかども母の首途し給ひし日ようち臥べうもあらずとて只渡島と四表八表の物がたりするさへにたま〳〵繼母の旅するを歡びたる氣色はなくて今ハはや何とかいふ邪までいゆき給ひけん

太行もかくは日和よくて楽くゞをはすべき父うへは折のわろくて猛よ城へ召のぼされ心かゝりよをはしなんわがはとりには侍らずとも出居のかたをよく諍りて夜の戸鎖よ由斷せず朝の陰膳忘るなと猶集き親を親とし暮ふ儚稀なる孝心は今にはじめぬとながら渡鳥頻に感嘆し且愧ておもふとを告るよしなくゆき巡りをさ〳〵來ては慰めしがはや黄昏よなる隨に戸鎖火燈し何くれとなくいそゑくなりてや竟に來ず缺皿はけふばかり針とろわざもせずにをればとて徒然よ堪かねて亡母のうへなつかしく坐に思ひつゝくれば早りて及に伏たまへどもその功績ゝ顯れてこれより家は桑よきこは全く金剛神の靈驗利益よよれるゝとはしりつゝもわが身かく何を咎なる籠鳥そなたの空を瞻望るのみ參るよしなく音に啼を神もあはれとおぼさずや傳聞上代にはこの里よ手兒名といひし賤女ありむかし東國の方言よすべて女子を手兒名といふそが實名は傳らず集心ざまいと怜怜いと艶妖なりければ懸想するもの夥多なれども仇なるかたにはうちも靡かず親の結びし婿がねを只あが佛と尊みつ火たき水汲暇なき親よ夫に仕るに母なん權しかりければ其を只新く思ひつゝ手兒名には婿夫あり如此〳〵のことありと婿よ耳語夷人に告て衣を被せしかは夫ハ迎へずなりよけりいと淺ましく悲しきに父さへいたく腹立て杖ふり揚貴しかば手兒名は悲歎よ堪ずして眞間の入江よ投にきそを里人等あはれみて墳墓を築き槻樹を栽徴意よ禿倉を建て神とし齋ひまつりたる手兒名明神是かとよ現萬葉に入られ玄赤人の長歌に古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻問ノ家武勝牡鹿乃眞間之手兒名之奥榛手此間登波聞杼眞木葉哉茂有良武松之根之寇久す〻言耳毛名耳母音者不所忘又虫磨が長歌よも眞間乃手兒名我麻衣爾曾於竹着直佐麻乎麁者織服而髮谷母掻者不梳履乎谷不着雖行裳綾之中丹曇有舞兒毛妹爾將及哉望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏虫乃火之入如水門入爾船已具如久師香久潮人乃言時幾時毛不生物乎云々と詠るをもて推量るに世に有がたき美人にてそさはこの時すらいにしへといひ遠く久きなどいへば今幾千年を經たりけんその事定かならねども人にすぐれし德なくは誰か神とゑ祀るべきさりとても生る日ゝ寃げられ玄忠苦に得堪ず吾身を思ひくらぶれば昔も今も眞間の里苦玄き息を繼橋渡す思ひ入江ゝ淺くとも深き歎きよ惱煩の絶たゝぬ日はなき世ゝとひとりぢちたる後よりさのみな咄言給ひそといふ蛍雖と見かへればよ

に見も倣へば一個の賤婦麻衣よ青衿掛て裾短よつば折つ手にもてる綾藺笠を鉢に對して立たる眉は初恙の柳葉に似て雨を帶たる色妙に顔は三月の櫻花の如く風の情よ匂ひこぼれて玉貌妖娆と芳容窈窕たる西施が吳宮に入らざる日編蓬よある歟と疑ひ小町が禁闕を出し時珠簾をふに似たり神か人かと思ひまどふてやがても問ず陰りをれば神女頻に嗟嘆しつ名告をせねば不審もいと怪しくも思はれん世にありし日の憂事ゝそなたよ思ひくらべられしわれを手兒名の神とゑらずやかくへおん身が薄命なる父祖の因果を引ばゝ祖父なりける宗素卿は妻を留め子をのこしてわが大隅國へ投化りつゝ又更よ妻を娶りておん身が父を產せし程に明朝なる女房へ思ひはそりて身まかりつさるよより宗素卿へ不覺に故國へ使して被地にて殺されしこへ前妻の祟なりその餘怨日本兒なる素太夫に蚤縁て是よも両個の妻を娶らせしかも賢なる後妻の鮮衣へ刃に伏そが腹にいで來たるおん身が孝行等閑ならねど父の前妻いたく憎て活み死しみ責虐たぐるを是三世の惡報なりしかはあれど人に至誠あれば天神これを祐け地祇これを助て鰥ひを轉へし願ひを來すと雲おさまりて月顯れ雨の後よ花ひらくが如しおん身年來の厄難は今ぞばしにし

て解つゝし只その厄を解緒ちには良縁を結ぶをよしとすかしこき人の語よも大行は細瑾をかへりみざれ大禮は小讓を辭ざれといへすや親の許さぬ縁しなりとも正氏の子よあふてその資を霜とさは親の爲よは是孝ゝ志素を得んときにをさ〳〵作善旅行してなき人々の菩提を弔はゝ家よ餘慶あり九族是より繁昌せば誰か亦是を否しておん身を孝女といはざるべき素卿を怨し唐山娘父の兄なる唐撫子母の兄なる寂念法師乞目の疊六吾嬬村の根坂等中有よまよふ三熱の苦みを脱れつゝその處を得て鎖りなばとよなき陰德修善なり曉ずや暇くろき彼人が忙て上總へ赴きしはおん身の爲よこれを遠離後やすく妹と夫の縁しを今宵結する金剛神の冥助へわれ又おん身を護る事おのづから因縁あり原典里を異間といひ緋橋と名つけたるみな是同字同訓にて縁しき人に虐げられし吾僧によりてこの名ありおん身又よくこれに似て氏は緋橋その名は楓緋よ苦む名詮自性よしや同病相憐むともわがありし世の事さへよおもひくらべていよ〳〵惑ひ彼良縁を結すは一生涯を悞ちなん金剛神は緣妁なり介副は吾僧なり壻の郎はや來ましたりこへ〳〵と手を抗て招けは忽地外面より正禾左金と名告つゝ年いとわかき風流士が綺羅やかなる打扮ゑて椽

類よりゞ進み入る留奇南の蕊り渡都と軒端よ手折る梅の花一枝散に異ならず鉄血は今更よはづかゝしさに得堪ずして立躁れんとする裳を引かへされて叫嗟と叫ぶわが聲よ驚き覺ればこれ假寝の夢なりけり原來疲勞ていぬるとも知ず目睡にきと枕せた肱を磨りて見かへれば彼夢よ見し風流士はわが右手のかたにをりとは什麼なゞと呆れ惑ふてせんすべしらず伏沈は左手が後方よはべりたる渡島は眞吉と耳語つゝ小膝をすゝめて鉄血にようすやふ願ふに稀なる今宵の首尾を彼郎にはや知召て眞吉を將て來ませしかども君よく睡てをゝせしかば覺給ふを待給へりいと强面よも限りあり妹夫の緣去は出雲よて神の結ばせ給ふといへば竟よ脫れぬものゞよと今宵は千世のはじめなりうち解給へと眞吉もろとも眞成にとりもちて儲の銚子土器をわりなく勸る三三九度思ひあふみの床の山に破れ屏風を建繞して夜衣うち被する新枕頻かるべしと眞吉は渡島を先よ引去て渠が臥房へ趨きぬ當時左金吾忠は鉄血を緬めて誠心を告情を述懇ろに相談ものから鉄血は斯までに席薦は斷離壁崩れ漏る風寒きわが子舍を見らるゝすら恥はしきよ薄き蒲團に横の裾冷たき衿をかくしかねて顏さし入れてもはふり落る涙の雨はをやみなく墓なくも天は明ぬ

べしかくてあるべき身よしあらねば後の會せを契りつゝ起わかれする主從を目送るも亦主從の外よしる人なかりけり

○第十三　姪を佐て美玉を沈る　天目法印が夜川の祓禊

次の日は果敢なく暮て第三日になりよけり渡島は孫てより今宵かならず彼郎は來せるならんと思ひしかば新利根なる叔母よ消息して私しに顧の客ありわが子舍いたく荒たるをいかにせん花筵やうのものめでたき繪かきたる屏風一雙新しき衾一具餅菓子一折櫃よくとゝのへて潛やかよこの夕ぐれに賜かゝそが儲よいそしくて委細にゝ得ようさすと走書たて遣しつ叔母が良人ゝ村長なればかばかりの物乏からず心得がたく思ひつゝもいと易きをゝとて鰓て人して贈來たり渡島は千々の黃金を獲たりしよりなほ歡ばしくて皆鉄血が子舍にとり入れ今宵は些の儲あり前夜にはまずものをまづ結髮し給へとわりなく勸めて鉄血に浴させ梳づらせ破たる席薦は花筵に敷隱し毀たる壁は屏風もて建隱るを彼味噌平等にしらせじと思へば物の倒れかゝりて生憎に音すゝ鉄血は只影語くて胸のみいたく騷ぐなるべしさる程よ甲夜より大雨降そゝぎて窓を撲音殊く

が如しいはで物おもふ主よりも渡島にはかなくて天の河原に鵲ぎの橋を断れし心持しつ斯まで語をしたれどもうたてやな此雨をかこして郎に來給はじ疾疾ずやと吐けば風さへいたく吹あれていとおそろしき夜となりぬ思めかねて弘法寺の鐘聲を傳ふれば眞夜中ぇ今はとて思ひ絶たる渡島は庭門なる諸折戸を鎖んとて紙燭して椽頰なる遣戸をやをら引開る檐下に走り入るものありと見れば左金主從ぇ徐笠の紐風よ離斷られ菁蕣の下まで濡けんゆくりなければ胸つぶれて途の艱難を問慰めそがまゝよ竹椽へ扶けのぼしていそがゝしく草鞋の紐を解まゐらせ眞吉が足を濯ぐ程よはや彼處へとて誘引ぬ鮎皿にて れ彼の耳語こを聞ながら恥ゝ赤くて出迎へず途すがらの事思ひやればさこそゝ困じ給ひけめと密やかにいふ聲いと可愛し左金は雨に濡たる袖を火桶よ翼してはとりかよ彼少將が百夜の雪も今宵の雨にいかでかまさすべき舞もやするとたゆたひて思ゝずも夜ゝ深たりといへば眞吉うち微笑みさのたまへばばかり誠心をゝしますよ似たれど若僕れ微りせばひとりやはかよひ給ふと是さへに誇れるを渡島ゝはゝと笑ふて盃盞を勸る程よ左金は頭を廻して此彼を見かへれば物大かたは整ひて前夜には似るべうもあらず化粧ぬ時た

匂やかなりし鮎皿が面顔は只瑛まを攻るごとく沈の楔を削れる如くいよ〳〵愛たきと限なし眞吉は渡島が微妙したりとこゝろよ琴て途の艱苦を物語ふつ或ゝ感嘆し或ゝ笑ひ興じて主從盃をめぐらすよ殺三四種あり三日の夜の餅形のごとく折敷よ盛てもてすにたり左金はこれらの物いかにしてかとゝのへんとぶかしむ夜は只深よ更たれば臥房に入りぬ今宵は夜具もいと愛たし主徒は蒸襖只一重を隔つゝ睦語すいづれか樂しからざるべき唄は四月の下浣なればおちかへり啼杜鵑よ雨はぱそりて蕭やかなりいとゞさへ短夜のその曉がたより熟睡したれば左金は己の比及よはじめて覺てうち窺き窓の戸引開つゝ見ればなほ細雨ふるなり渡島はかひ〳〵しく盥水まゐらすいきだなくて時は移りぬ眞吉を召てたべはや退らんとて立まへするを渡島急よ推とゞめ神詣の君たちは首途の日より四日なりぬ縱ひいそがせ給ふとも渡の漁獲名所などゝ漏給ふべうもあらず然らば明后日の比ならでは得かへり給はじと推量り侍るかし折から雨をもにくからず今一ト夜を留り給へといふに心よゝくて得立ずなりぬ且くして早飯もて來てすにたりさせる菜はなけれども鮎皿も居なみてまゐるいと愛たしけふはやうや〳〵うちとけてをり〳〵物がたり

すさはれ母のうへ姉弟のとなど露ばかりも識らずまた恨たる言葉ハなくて親の願望弟の久後綜の序をはしまさば家尊大人の庇翼ら せたまへといふのみわがうへはうちも歎かず大かたならぬ孝心ゑ左金時忠は坐涕うちかみてこの君の爲ならばと思ふ外他事なしかゝる闘坐はながき日を徒然としも思はぬに渡島ハ母屋なる筑紫琴をもて參りぬ飯皿はこの年來衣ぬふ糸こそ手ゑはとれ十あまり三の緒をいかではと辞ども左金はさらゝ眞吉渡島等がわりなく勧るに黙止がたくてしのびやかゑ弦掻鳴す玉指斜にして歌ふときは纖々たる谷の流水膝に流るゝかと怪まれしらぶるときは颯々として峯の松風樓ゑかよふかと疑はれ悲嘯巴峽の聲遠音智度の鳥笑らふがごとく語るがごとく哭がごとく訴ゆるに似たり主從一唱三歎してその日の暮るゝをしらざりけり浩る處に母屋のかたゑ人影動音して上總よりかへらせ給ひぬ與さま歸り給ひぬと叫びしかば鈌皿は吐嗟とばかり琴かいやりつゝおそれ迷へば左金主從ゑ南柯の遊びその興竭て手の舞足の踏ところをしらず渡島も胷うち騒げど心づよきおもゝちして眞吉に目を注しけふとは思ひかけなりけるにあな便なしと呟きつゝ屏風推隱み花筵卷おさめなどする程に左金は是に迫れつゝ身ひとつ置ぞまどはする破席薦の破縁ゑ足をとられて兵兵たる繆の形勢いとおかゝ鈌皿は愁ひゑ隱せし恥をまたかゝやかす心ぐるしさいふべうもあらず只むら雨の露とゝもまわが身消よと思ふのみ袖の露すらやるせなしその間に眞吉は椽頰の柱にかけたる管簧を引おろして簀子の下へ推隱し屏風花筵は壁の毀たる所より推出して大かたはとりおさめよけれど主從かくてをらんは便なしさりとて今は出がたしとく隱しまゐらしねといそがるゝ渡島も今更ゑ術なければ夜の物を出納るゝ押入とかいふ一戸を且こゝよやと引開れば左金は棚に手を掛つゝそがまゝに閃と入りぬ眞吉も主に續て跳入るとて思はず壓柄ゑ躓を碪と摸して痛さおかしさ忍びあへず主從面をあはしつゝ口ゑ蓋してつい居るほどに渡島は外面よりやがてその戸を引閉ればはや人の來る音すなり使人ならんと思ひしかば椽頰を巡り出て次の房ゑ立躲れても何いはるゝとも又更にこゝろは絶てやすらはずさる程ゑ片塊は長途の疲勞を物ともせず繆がなあれと思ふばかりに奥へも入らず衣もかはずまづ鈌皿が子舍に來て例の窓よりさし覗き室内もせず碪と問る障子の骨も皿をわけぬ母のこゝろを汲かねて立迎つゝ掌こを若そろへてうちほう笑み思ひしよりいとはや

う悲なく歸らせ給ひぬいと歎ばしう侍るかし姉君たち小素太等もさこそゝ疲勞たまひけめ父う
へゝいぬる日より不憶召れ給ひて今よ退出給ゝねど異なくをはしますよしゝ日毎に聞へさせ給
へばほこゝろやすうといはせも果ずやと缺血そら〳〵しきと宣ふな吾儕がはやう還りしを驚怕
とこそ思ふらめなでふ歎ぶとあらんや一年も三个月もかくてこそと願れけん現孝行なる少女ゞ
かし父かへらせ給ゝぬも和女郎が爲よは僥倖さなくば又誰許して髪を結苞を出し笆の冬瓜見る
ごとく白粉し給ひたるちか比のゑせ連歌に箔代の建立下女ゝ首ばかり現首ばかり眞白なる半身
美人よなり給ひぬ盤人の書羅するも心あてありといふ世の常言ゝ和女鳥がこゝ前後拙る化粧三
昧心あてのなからずやは爹なし子產給はゞ世の美談にあらんずらんと暇みつ罵りつ彼此を見て
のみやまぬ母親のさがなき口に戸棚の内立れず聞く人のありといはれぬ胃くるしさの顏に
かゞちる夕紅葉袖を染めて伏沈めば片埦は竹椽よ昨宵左金が脫捨たる草鞋を佶と見てさればこ
そ淫奔婦女子が夫はしさよ敵手を擇まずそこらわたりの里人を引入れたるよ疑ひなしわがかへ
りぬとはや聞て聽く夫を逃しても遺す證據の泥草鞋は寔に親の面汚し爹々に如此と告まうさば
さゞな樂させ給ふらめ腹は立ども腹を藉さぬ母がひなさに手は下さずさりとて後にはふらかし
去らずといはさぬ草鞋は二玉參りの罰利生これは吾儕が預るゞと飽まで罵り辱ゑめ衝と寄て鈎
りを草鞋よ突立てそが儘とりて缺血が頭の上にさし翳し紐を引してあざ笑ひ母屋のかたへかへ
り去を次の房より闖窺たる渡鳥は吻とつく息の緒ながき椽頰を遽はしく巡り來つ疾この隙にと
引開る戸棚を出る主從は聞にましたる家刀自が腹きたなさに嗟嘆ゑつ左金ゝやをら飲血のほと
りに寄て脅を拊さらでもからき母刀自の呵責をまゝわれゆゑと身よしる雨よ笠やとり袖ぬら
すのみすべもなし只わがこゝろ得がたきは今飲血と呼れしのみ何人の事やらんおん身ゝ楓とい
ふならずや彼人の憎むものいくゝもなほありや名づきさまこそあるべきに事を好みし名にこ
そ譯得しらねば面前り問るゝつらさ恥しさに回答は得せずよゝと泣ことわりなれば渡鳥も慰
めかねて嘆息ゑ事ゝやこゝに迫り侍れゞ草鞋を取られしゝなほ幸ひに侍るかしさればこそこの
郎がこゝにかよゝせ給はんとゝ母君思ひがけ玉はず鎖一に傍杖を打れんと思ひ侍りゑわらゝに
禁らせ給ゝぬはこゝろ得がたきとに侍りそはとまれかくまれ勝日陽鳥多かるにと餘いひ難て

真吉に目急注すればうち點頭あまりよ事の忙だしくて管絃をのみとり隠し殿の草鞋を遺れしは窓に物怪の幸ひなり疑はれ給ふ共夫を誰としられずば何事のをはすべきとく〳〵進り給へかしと耳語つゝ引主の袖振拾がたく留りがたき左金はなほ懇ろに鮟皿を慰めて昨宵のまゝの錦の露拂ひもあへずうち被げば真吉は遽はゑくおのが草鞋を穿し進らせ人もや見ると主從は後につき又先よたち庭へをり戸を押開て笠を翳して出てゆく彼裾はせと渡島が指し示せば鮟皿はやをら頭を擡ても涙の雨に自もわかずかなじ歎きに渡島もつゆ愁かねし樹下闇庭をながめてつい居たりさる程に片埜は彼草鞋を擡へて驚て母屋にかへりにけれどなほ諄々と罵詈休ず鮟皿が密事を劫るものは渡島也と猜する事は猜ゑながら渠はよく手狎して紅皿が媒妁させんと孫て思へばこれを責ずさはれもし密夫を隠したる事もやと心もとなく思ひゑかば紅皿に彼子舎の闕窺をさせんとてそが旅衣を脱更るをいと遁しとて焦燥ほどよあるじ織橋素太夫ハ日夜の勤番稽果て退出んとゑたる折女房子どもが上總より還りぬと聞にしかばわれもいそしく締り來つ片埜が喧ましく罵る聲に呆れまどひてまづその故を問んとするに片埜ハはや見かへりて安否も問ず彼草鞋を口前へ推出しこれ贈はせ鮟皿は親のをらぬをよきとにして世をも人をも憚らず辻君夜發なんとのごとく夥多のをとこを引入れて賑さへみだりがはしきをおん身はいまだ知らずやをはするけふとは思ひかけざりけん吾倅が早よかへりしかば馳てをとこを逃せゑかども草鞋を穿に暇なくてこれうち拾て走りにきおん身ハ臨時の加役とて蛮の城へまゐり給ハゞ留守ま叔父公を召すにて淫奔ものを衛せたまハぬかゝるをしいだすべき萌を孫て見てしかば推籠らせて罵つるを隣事とのみいはれけん斯いふが偽りならばみづから彼奴に問給へ是をしも懲さずば何をもて人を使んいふがひなやと發地かけて席蔚鼓て敦圉ば素太夫ます〳〵呆れまどひて粹の本末間も正さず因じ果て頭を擡女の子ハ拙の腕による固よりおん身に任用せしを今更にわれいかはすべきそハ舵と懲したまへかしと真だちて回答しかば片埜は衝と立て又彼子舎まいゆきつゝ鮟皿を引立て薪丼太桶など納る物置とかいふ散屋ま突入れてそが儘戸鎖を固しつ鍵をばおのが腰に着て絶てふたゝびかへらず渡島ハいをといたう心くるしく思へども救ひ出さん術なさに只戸口ま立壁ま猶しのび〳〵に問慰めても内ま入ハ泡のみ隠も得せず次の日真吉縞に詣來て鮟皿の安否を問左金

が鮑觴を遮與せしかば渡島は綽の趣き如此〳〵と委細に告眞吉聞てうち愁きあな痛はし彼君は、いかなれば斯までに辛きめにあひたまふらんかん身が傍杖打れぬのみとゝろ得がたきとながら不幸の中の幸ひ〻身を竭し隙を窺ひ勵り慰めまいらせ給へ綽綾やかよ謀ずば守る人よ隙なくて覓に便宜を得がたからん羅りて殿よ告ようさば又せんすべのありぬべしこれらのよしをまうし給へと密語果てかへりけるさる程に渡島ハ彼鮑觴を進らする便着もがなと思ふ程よ小素太は獨樂を失ひぬとてそこら搔撈むづかれば是をよすがにせんものをと抱きよせて問慰め孺子の獨樂は姉うへのうち箱られてをいします土庫に侍るかし母君に乞給ひてとく取給へとこしらゆれば小素太は奥へ走りゆきて如此〳〵と告あへず彼處を開てといそがせども片埦は紅粉櫻に鏡蠟を推すにて梳づる最中なりこのあぶら手をいかにせん暫結するまで俟給へと賺せども絶て聽ず蹉跎しつゝよゝと泣稚きものよゝ親がひなくて腰なる鍵を投與へこれもてゆきて紅皿よ戸をひらかゝて獨樂を取らば獨のごとく戸鎖せよとよくいひ給へ忘れても紅皿ならでこの鍵を遮與給ふなと說諭せば涙ながらに莞爾と笑て鍵を搔取走去つ紅皿を索るよ淨手よやゆきたりけん呼びたつるよ應をせざればいかでか暫時も猶豫すべきそがまゝよ物置庫の戸口へとゆく程に渡島ハ壁のゝめきて件の鍵を乞とりつゝ越ハしく戸をひらけば頃日の南風よ蒸れて桶より塩の垂るゝ甚太の臭氣鼻を穿て圓船に乘るこゝちせられ炭俵あら莚古鳥飼の紙の剝たる紙老鴉の骨のみなる處狹きまで納めたれば内暗して莚げ〻悩むべし鮒皿は鼠の山の椎子よりなほ際もなく落積る鼠蠶の上に伏沈み煤に皂みし鮒蛛の網よ肩も頭髻も斷絶れて哭腐細る末枯の霜夜の虫よ異ならず渡島は是を見ていと痛はしく思へども明々地にいいふよしなくて獨樂を與るやうにして鮒皿が懷中へ左金が鮑觴をさし入れて眞吉がいへるとをやかよ告しらせきのふより物まゐらぬよこれもて鮒を凌ぎ給へといひあへず紙に包し燒鹽を遮はしく遮與す扨紅皿奥より走り來て物をもいはず暴やかに戸を引立んとしたりければ渡島は驚き周章て腐を懸つゝまどひ出るを紅皿は佶と疾見そなたは誰に許されてこゝの戸鎖を披きたると詰問はれて飼うち眺め孺子が獨樂を取せんとて是をもて來ませし歟にといはせもあへずその鍵を擲投るごとく豪發り小素太が何を去るものゝそなたが智恵をつけたるならん孺子もしか心得給へ獨樂は鼠のひく物ならぬに他人が此内

へもて入るべき天窓の鬼き鼠こそ人を詐欺るものなれといひかけてやゝ心づきけん渡鳥を見かへりつゝ俄に顔色を柔げてそなたに咎はなけれども此の子が開よといへばとて開ては却て疑ひ給ふ母公の命そが儘ようちも置れず物いひ過せこれもそなたの爲なるに心になかけ給ひそと咎つ勸解つ先後も揃ぬ板戸引よせて楚と鎖ては又更にうち明かたき身の願ひわが戀ふ人は鉄血がふかく思ひ思はるゝをとこゝとは露ばかりもしら茶純子の帶の端解をやかて引結び足より白き上草履を裾に打しつ弟の手を振て悠々と母のはとりへゆくなるべしさる程よ鉄血は藻よ住む虫のわらからと音よは鳴ぞもなか〳〵に人を行ず親を恨ず昨宵終夜けふ終日袖乾あへずつゝ〳〵と涙の隙に思ふやう昔時わが母御前は正しき夢に身を喪ひ歎きを今に遺し給ひきそをしりながらわれも又手兒名の神の示現より俄頃に心よはり果て靡き初たる糸縞仕に紛ひし妹と夫の繰しいとれも身を殺すまうねき物の祟よこそさりとても自殺せば不孝のうへの不孝ゝ只この儘に餓て死を待より外にすべなしと思ひ決めて母の不身の爲に結を誦し偽名を唱る情ゆくりなく渡島が戸をひらき内よ入りて左金が艶書を遮興せしかば見ざらんはなか〳〵に冥土の闇りなるべきとて人は去時うつり戸の間よりさし入るゝ夕日をうけて讀む玉章におもふ限りを眞成よ筆に問れてかぎろひのいよゝ涙へはふり落る慟は更にいやましつなからんかもかゝるものを人には見せじと細やかよ引き裂とも玉刻むわが命より惜げくて胸よ當かき抱きこゝよ二夜を曉す物から彼燒薯は見もかへらずとく死ばやと思へばゝその明の日素太夫は蠻の勤番なれば朝より姿りぬかゝりしほどに片埦へきのふ紅皿が怒に乘して渡鳥を情なく罵たる繹の趦きその折にへや踏しかば鞠よ女兒を嚇やう渠へおん身が婚緣の媒妁させよといれ玄をはや忘給ひし歟何事も見るして渠をな怒し給ひそと叮嚀に諫よけれどなほ意よやかゝりけんかのが傍に人なき折鞠よ渡鳥を招き寄せ旅の留守せし賓とて叙苧もまだ脱ぬ衣一トかさね與に渡鳥いよゝ疑ひ惑て只管推辭て受ざりければ片埦は堪かねて膝をすゝめ嗚をさしよせ日來より思ふを明ゝ地よ示し且眞吉に相謀てともかくもまて紅皿を左金のにしまあハしてたべ繹成ときゝかばかりの衣一と重のみにて止んやそなたへさら也眞吉にも如何〳〵の物を被んいと或かゝる事也とも主の爲は身の爲也よろづそなたの才學もて繹十分よとゝのはゞこよなき忠義と思なんこしらへて

見よかしと真成に密語ば渡鳥は聞あへず直と果れて顔うちまもり思ひがけなき[illegible]刀の底意を畑ばいとゝ玄く淺ましさと限りなけれどいはるゝ毎よ聽しつ宣ふよしはこゝろ得侍りさりとて いそがせたまふとも綽速かには成がたけん真吉が參りなばおのが心の及ん程幾遍もよく相譚て かへりをは聞に侍らん密望を遂させ給ふその折にこそ此おん衣さゝうし賜り侍りなんそれまで はこの儘に弄めおかせ給へかしと回應果て立よけりこのときにこそ片掘は渡鳥が承得たるおも ゝちに些し安堵て又つく〳〵と思ふやう紅血がいかばかり涿磨き衣飾るとも生れし隨なる飲血 が縹致には及びがたしゑかるに彼女壻の刀爾しば〳〵こゝへ來てもし鉄血を見るとあらば仇し をゝこの仇でゝろ移れば變る秋の水外へ落ては世話にいふ屁を貸て母屋を取るゝ悔なからんと はいひがたしゑかずや此度の便宜をもてまづ鉄血を結果け得やすくせんものをと腹に深念を落 着て猛よ真間へ人を遣し叔父の天目法印淨弁を清やかに招きよゑて件の趣き首尾おちもなく 告ゑらせけふよりして淫奔女兒をおん身よまあらすべう思ふかし老たる人ゝいとわかき女を愛 するとかいへど程近き別莊に隠しかかば人にゑられん思ふまゝに嬲みてその後は此如〳〵にし

給へと密語ば淨辨は真白なる髭に涎の垂るゝを覺ず滿面の皺悉々く目尻によせてうちほう笑年 來敬して遠離たるあるじはさらなり和女郎さへ叔父を叔父ともせざりしに要あるときの神憑み 別議ならば錫杖よりまづはや頭を埠べけれど艶々嫋々として甘美なる年も二八の鉄血をけふ よりかん身に進らせん思ふまゝよ嬲みて屢骨の疼む比遠き津の宿遊女に沾却して身價をこの懐 中へ疾めよと言るゝは牡丹餅もて尻を敲るゝに異ならず物數多く宣ふな壁に耳有笊には目あり 早心得たり心得たり我爲には真の再姪紅血が仇なるべきものとゑ聞ばうちも留れずはやとゝろ 得り意を得たりとひとりこゝろを得顔なる點頭狀は血に盛る慈姑に地震るがごとしさる程にそ の夜はあるじ素太夫が勤番の留守なればとて彼味噌平炊妾等は甲夜より僉許されておのが臥房 よ入りしかば時はや來つと淨辨ハ片掘が遇與たる鍵をそがまゝ屢よ着て手燭を袖に翳ゑつゝ庖 厨のかたへ潛び出て彼此を見かへれば一對の神酒瓶子と大きなる瓦血に塩を杉形に盛たる中へ 小松一本推立たるを竈の神よ献てありこは究竟の物なれとひとりごちつゝ傘かろしひとつ〳〵 に物置庫の戸口へ遥ひてひそやかに戸鎖を開き内に入りて手燭を抗て熟々視るよ鉄血は一昨日

より腰斧の中にうち籠られ食ず睡らず泣曉す心神勞れ果たれば内に入る人ありとはしれども瞰を探てこれを見る氣力は絶てなかりけり正に是圓の擂に移せし梅の香を蔡れて蕊むが如く泥中に拾たる珠の光を埋みて存るに似たる物の哀れは得ずしらぬ淨辨はわれひとり殃し顏してつい居る縣の殿へ出すを突固めやをら手をかけ後より頬髯摺着やよ鮎皿わかきもの〳〵習俗とて色に惑ふはなきことならねど親の怒りも理りなり生で〳〵ろつきたるものを身ひとつでかけばこそさる淫失のいで來るなれさりとて餓鬼に堺はなし亜綠なればと二親の擇にあふたる新郎ハはづかしながら吾儕ハ今宵直さよ別荘へ將てゆくことはゆくめれど老ては堪能なくて二世の約を今こゝでせばやと思ふ島蟹は篭祭りの鹽に松千代萬代の後までも契りなが柄の鉾子とも見るべきはこそ神酒瓶子 夫婦一對陰陽和合!! 伏の姫は注連がむすぶの神垣共ようれしき中臣の祓淨むる心經よ盤若孕まば變生男子祈り出すも修驗の奇特胎藏安産金剛界両部神道眞言秘密かばかり正しき祈文あらんやこそ寄給へと左手よ絆め右手を伸して引よする辛き呵責は擅の松衝着られて鮎皿は玉なす涙ふり沃ぐ袖を翳して身を縮め「姫小松みさをにかゝすみつ〳〵し久米のさら山雪はふるとも當意即妙一首の歌にゑヅ心なき淨辨も愧て思はず手を放ち又いふよしはなかりけり世の童子等はこの歌を「盈皿やさらとてふ山よ雪ふりて雪を枝として育つ松かなと訛まりてゑ傳へたるかくては無下に抽くなん久米の佐良山は美作よあり古今集に「美作や久米のさら山さら〳〵に昔の人の戀しきやなゑ又みつ〳〵」ゑとは久米の枕詞なり又皮すゝきともよめり萬葉集第三よ皮爲酌す。久米能若子我。又見津見津四。久米能若子我。など見にたり閒話休題且〳〵ゑて天目法印ハ呵々とうち笑ひこゝろありて歟姫小松操ハかゝずと詠じてもこの木造が鋏もて杖を樂葉を透し縛 都て此方へよせ起さんとも又臥せんとも意の隨にせざらんやといひあへず又抱きよせるを辛して振放ち淺ましや物脉なや縱血統ハあらずともおん身が爲には吾儕は再姪犬に等しき結婚ハ天魔の所爲かゆゑ〳〵ろの亂れ給ふにやあらんずらん其處退給へと敎園どもよはり果たる狩場の鳥身さへ聲さへ立ざりし

○第十四　三たび驚かゑて怨に報ふ　正禾時忠が逢途の戯謔

渡島も飯皿がうち籠られしその夜より拂曉かけていも寢られず況や衢に片埴にいはれしことに胸

つぶれてまづ眞吉よやしらすべき彼君よ告ようさんかとおもひまどひつゝおそろしき人の仗傭に
いとゞしくこゝろにかゝる庫の中外ながら訪ばやとてその夜更闌人定りてに猶よ臥房脱出つゝ
庖厨のかたより彼蹠を見るに戸は閉ながら燈の光として挑あらそふ聲したり吐嗟と胸は騒げど
も驚かさば我怪もやあらんと思ひ鎖めて足を翹て徐々に戸口へ立よりて探りて見れば鎖はなし
推開んとしつれども内より鈎を掛たりけんひらくべうもあらざればせんすべ竭て耳をさし着そ
の云よしを聞てをりさる程に鉄皿は鵞の羽がひの下よ伏す鶉よりなほ危くともいかでかこの身
を汚さんやと聞ふり絞れば沸かへる汗も涙も蒸獄地獄冥府の呵責眼前り人の心の劍の山とくと
く發せとわれからに舌を嚙んとしたりしかば天日法印淨辨は慌忙き手拭を口に銜する狼狽楚
と引結冷笑ひ鉄皿且よく意得よ發母の叔父は大叔父と三才兒もしれる服忌令そういいでもの事
なから和女郎は愛を失ふて親よ勘當せられしもの何禁忌を繰よしあらん男が美れば外婦あり年
少ければ浮氣なり朝寢夜遊夕化粧或ハ世帶を我物貌おのが氣の随こゝろのまゝに月日を送る女
房は年の相場の高下を厭す老たる夫よあふ徳なり四十の秋から妻に後れて三十年來鰥住み今は

隠居と呼れたるわれも昔は花ざかり日高川まで清姫に迫れ去ともなからずやは嫌ハゞ嫌へ死し
はせずしかれどもこの處は固より人は住ずして鼠の外に友もなしかんいたはしや鉄皿姉木から
落たる猿轡かゝる難義もみの爲と思ひかへして床の海屏風の浦へといそがるゝハイヤと嚊ず歌
祭文は鼻にかけたる酒機嫌誘別莊へ將てゆかん主の與よは何をがなと向上る梁に古葛籠是究竟
とり引おろし蓋推開きて抓み出す惜字紙はその巣を破られし紙蟲は逃ても鉄皿が脱るゝ途はなく
ばかり葛籠へ抱き入れられて出んと悶搔ば淨辨は手ばやく蓋をうち被せて四手引結び肩入るゝ
身さへ齢は傾けども膂力は今に衰へずいと輕かよ脊負揚たる右手よ手燭を引提て内よりやをら
戸を引開出るを逃しと波島は遅も遅さず後より葛籠の紐を無手と探りてはる猫やといはせもあ
へず吻と吹滅す手燭を揚て後さまよ拂退け走り出すを又引留るかひなさ女子と侮りがたきこな
たは老の脊中に重荷引かへされてよろ〳〵と蹌踉ながらふり返り拂へば退きらばつけ入り打つ
打れつ板壁踏躓らす足音に片堀は周章惑ひて闇を搔撈り走り來つ渡島がうしろより輪よとる細
帶投懸るを潜り脱ても如法夜の足下紮れて磯と突躓立なはずを立せじと抓かゝれるそが間よ淨

辨へいちはやく案内知たる角門を跳放す如く開き足に任して走去けり渡島頻よ焦燥て劬よな
る片埡を拂退け突退る剽を撲れて蹌踉を見かへりもせず追蒐れへなよ推とめんと片埡も喘々追
ふ程よ思はず第を背にして里遠離る新利根河原頃は四月晦日のとなれば卯花降舞ながら善惡も
わかぬ暗き夜よ岸うつ浪の音高居越の鳧の羽たゝくのみはや渡島が往方をしらず走り倦れて立
在ば遽か北なる河原とおぼしく淺ましや大叔さま情慾か利慾かへしらねども縫ひ方人あればと
て櫂橋氏よはひとりの骨肉その義を推せば再姪君よまをしからぬ横戀慕横紙破る反古葛籠へう
ち納て走給ふとも何處までか逃すべきといふは正しく渡島也當下淨辨冷笑ひくさり女がほざい
たり親が許して妻する缺皿はわが女房道具と輜子をかけ持なる葛籠も竹の身からなる舌切雀の
婿引出お宿は何處と跡逐ふへ獸よ萬貫勞して功なし老樹もわかやぐ花婿に途をひらけと身を反
れば前よ巡て推戻す手首拿て揉揚るを沈んで外す腰車推ば跌き走れば雲る日さしも烏衣の案打
ち引倒さんと渡島が携る葛籠の案斷て淨辨へ前へ伏葛籠は川へ人もろとも落る水音叫ぶ聲あな
悲しやと渡島が樹て飛込水けふりとは見えて早河の瀨に碎ゆく主從が哀れ墓なき最期なり片

埡は此彼の聲を鄉導に走り來つやゝ近づけば忽地よ叫び泣聲頻にして水音高く聞にしかばいよ
〳〵周章まどひつゝ叔父公〳〵と呼かくれどもはや逃たる獸入水せし鼠絶て應をしせざりかば
呆るゝと半晌ばかり心は更に安からねど扨あるべきよあらざれば其處より躍を旋して丑三の比
宿所よかへるに奴婢等へ絶てこれをしらずその曉方に淨辨へ角門より潛來つ片埡は立間遲しと
呼入れて額を合しまづ飲皿がとを問ば淨辨答て新利根河のほとりよて渡島に柱られ竟に葛籠の
案斷て缺皿を河へ渡しねそを救んとて渡島も推續て飛入りぬてへ沸を禁んとて湯を加より猶鉈
〳〵主の命は何も救へでみづからその死を急るゝ惜むべきへ缺皿のみ認たる資金を盪へへ捨じ寶
の山へ入りながら手を空〳〵歸らじとて流よ沿て渉獲よけれど闇へくらし瀨は早し葛籠を柩の
水葬へ齎永の恨み曲水錢人無益の生殺してけりと眞を搔つゝ物がたれば片埡聞て嘆息し吾情も
亦渡島を迷禁んとて河原まで不怪に走りゆきしかどいと暗ければ其處ともしらず只水音の異な
るを聞て心へ安らへずしば〳〵をん身を呼かけたれども應したまへねば歸りよきわが推量に一
點違はず缺皿は葛籠ながらに落て水屑になり去とて惜むとかへ幸ひゝ但渡島を殺せしのみ惜む

べく慨べし彼女の子が從兄弟なる眞吉とかいふ壯佼は正禾殿の出頭人にさるにより目馴付て紅皿が媒妁にせばやと思ひしと侍りその故は如何〳〵と箇樣〳〵と密語ば淨辨且く沈吟じ紅皿が爲よとて任用せしをありといふとも一大事を知たる渡島自滅せずば仇となりなんをかれどもなほ計策あり渡島が彼情願をはや眞吉よ告たらば如此〳〵に謀り給へもしまた告ずばこの婚緣暇くは成ひがたしさるときは箇樣〳〵と耳を引よせ說示せば片埖はほう笑て只顧點頭密語つ人もや變んと潛やかに淨辨をかへしけりかゝりし程に天は明て素太夫蘆より退りにければ片埖は忙たしく閨室へ迎へ入れて物は得いはず顏に袖を抑當てよゝと泣ば素太夫いよ〳〵訝りてしばしば問れて目を拭ひ可愛さあまる折柴は人の鐵をかへり見ず戀して人よなさんずと思ふかひなく鉄皿は昨宵私夫と走りよきそを誘りしは渡島也渠にも私夫夥ありとはその紙色に猶し傳れどかくあるとは思ひかけず心放して土庫の鍵を彼奴に盜れ侍りさりとて往方は定かならずいかにすべきといひあへず又潸然と泣しかば素太夫聞てうち驚きそは安からぬ事よとそかくまで大膽無敵の女兒走るとも死るとも露ばかりも惜からねど此家の血統といふは渠のみなるよかゝると人に告んは影護守へまうさばわがうへよからず且かろ〳〵しく洩し給ふなしのび〳〵に往方を索ねん鉄皿がといへばさらん稚き時より使れたる渡島さへにおなじ途に迷ふは過世の業因歟子はみな親に似ざりけり彼等ゝ恥辱をしるものならねど只間なきわれのみといふ聲頻にうちくもる空を瞻望て嗟嘆せりかくてはや旬日あまりを經る程に有一日眞吉早よ來て渡島よあゝんといふ片埖は園宅の臧獲よ彼眞吉が來る事あらば如此〳〵よ回答してはやく吾儕よしらせよと孫て吩附おきてしかば炊妾聽て出迎へ渡島どのは上總なる金剛神へ奥さまの代參を仰つけられこの曉きに發給ひき要あらば宜ゝせ彼人かへり給ふ日よ言傳侍りなんといふ眞吉聞て眉根をよせ實よ火急の事なれども委細にはいひがたしいぬる晦日の溝便にある人の媒妁せよと筆談せられしかへり事をいゝんとて來つる也絆大かたゝとゝのへども渠かをらでゝ不便の事なりいかにせまじと立も得立ず困じ果たる形勢よ炊妾は眞たちてそは胸ぐるしき事になん且く其處よ俟せ給へといひかけて走り入り縮の趣き片花に告れば思ゝず小膝を蹴叔父公が豫て謀りし所一點違ハぬゝ奇之妙之人の爲に媒妁すとゝ紅皿が事なるべしかゝれば彼日渡島が眞吉に消息してこれらの

事譚らひけん渠が入水はその夜の事也この婚縁だよ取結ばゝ渡鳥が死たるをしらるゝとも妨びなしと肚裏に尋思玄つ炊妾を近づけてとせよ眞いへと密語ばこゝろ得果て遽はしく舊の處へ走り出又眞吉よ密語つゝ客房へ誘ひ入れて障子引よせ退きぬ且くして片埦は伊臻餡を捲入りて眞吉よ對面し名は臻てより聞しかどけふまでは逢ざりき渡鳥が從兄弟と聞ば怨しく思ふかし鏡よいれし媒妁すとはこなたの事よ侍ずやもしまかならば渡鳥が在らずとも吾倚聞んいかにぞやと愚ろよ問れて眞吉頭を擡げ既に猜させ給ふうへは隠べうもいはすいぬる日渡鳥に宜ひし事その日直さま告奈したれば肝宜を求め方便をめぐらし談ひ課せていひさしかれども彼婿君は狐疑去給ふ事甚だしく只はづかしとのみおぼせば初對面こそ肝要なれその夜は眞姑君も努しらぬおもふちして閨窺などし給ふべからず又使るゝ人々も席を避給はずゝ婿君愧て忽卒に逃かへり給ひなん早夜過ぎて潜やかよ某しおん俱つかまつらん式の盃蓋などは着きて直さよ閨へ入れまゐらせ三日めの夜の比及よ御對面いへかし斯て口説せ給ひねば公けたちて婚縁を執結び給はん事何疑ひのいへき但渡鳥がこゝに在らでその夜の介添とよかくに使なしと思召ば渠が還るを俟給へさはれす善尺魔といへば後日の事は背ひかたしけふ塑ならば日子も吉いづれ其おん回答をうけ給りて謀ふべしと眞成に逃しかば片埦は笑片向て尾花のごとく打点頭そは耳よりの歡びゝ左金ぬしへ紅皿を參らすべうは願へども大家小祿その差あれば尋常なる媒妁もて中入れなんよ去もなくとやせましかくやせまじと思ふは親の欲ならず見ぬ郎にあくがるゝ女兒が情動不便ゝもし成とのあらんかと渡鳥よ相譚しを身に引受たる初殿の親切思ふにまして速かにかへりをを聞に給ふ歡び醉に竭しがたしいはるゝ所こゝろ得侍り善ゝ急げと世話にもいへば渡鳥が還るをまたず今宵夜の塀の刀禰かよはせ給へと願ふのみ年は長てもふところ子足はぬのみよ侍りてん執成て給へかしさても初殿を勞したりまづ紅皿よ對面し給へといひあへず忙だしく掌てをうち鳴し人を召び眞吉に盃盞を勸め紅皿を召出して親子叮嚀に歎待せども眞吉は今宵のふを增君よとうさんとて遽しげよかへりけりさる程に片埦は猛よ婢どもを召聚て鉄皿が舍子をかさ拂せ味噌平は隠子をはりかにより奴隷よは風爐を燒せよ紅皿は浴に入りてとく梳づり給へかしあないそしや孰も正月も一時に來つるはと騒り狂ひつゝをさ〳〵その宵の儲はしたれどこの日もあるじ

素太夫は蛮の勤番なれば是をさらずとかくする程に日は暮つ短夜ながら人を俟ばいと長き心持すめり浩る處に眞吉は庭門より衝と入て密やかに呼門ぬ紅皿は聚てより思ひ設たるとながら今更に胸轟ろきて逡巡のみすれば片埖は立ながらとせよ斯せよと密語あへずそがまゝ奥へ躱れ入りつ紅皿が花を飾り錦を裝ひつゝ今宵を晴と打扮たる時勢粧想像るべし且くして壻君ハ眞吉を先にたゝして潛來ませり新しき衣の音さやゝとして儲の席よ着はと見れとも紅皿は愧じろ見て定かよは見ざりけり配膳の婢們は裡面へ入らず障子の外面よりけはひするを眞吉こゝろ得て盃盤を受とりつゝ形のごとく祝きのさかづきを勧るを闕窺する婢們忍びあへずはゝと笑ふ紅皿ハ笑れて胸くるしきを限りなしうち咳くやうよして秋波にして夫を見れば聞しには似るべうもあらずいとはかなくは思へども おのが心の惑ひかと思ひかへ去てふたゝびは見ず式果て眞吉は盃盤をとり納め夫婦を臥房へ冊き入れ早におん迎に參わらんとてはや退らんとするを婢俯引とゝめ客房へ誘引ば片埖みづから東道去て饗膳すべて叮嚀なり夜いたく深たればこゝにて曉るをまつなるべしかゝりまはどに紅皿はやゝ臥房へ入りて後婿君いじめて物いひ給ふその聲銅鑼を鳴すよ似たり江湖上の物語に透句を雜へて興じ慰め給へとも鬼よ捕れたるこゝろして果敢くしくは應を得せず巫山の雲楚蛮の雨思ふには似ず堪がたくてこゝ地死ぬべく苦惱けれとも身の業へ親の爲とうち念じたるいと痛はしきや八聲の鷄乱れ鳴東の山の端しらむ比眞吉は壻君をいそがし立て俱して出つ叉鋏の宵とてかへり給ひぬ次の日侈書まゐる手は大かたにめでたし片埖はこれを見て歡ぶこと限なしやがて返翰聞にとすされど紅皿は樂しまずその夜も又かよひたまひぬ只見るまゝに興醒ていと疎しく思へども一たび臥房を共よしたれば今更に此如くゝと母には告るよしなさよひとつ屏風の内にゞ入りぬ今宵も片埖は眞吉を推といめさせて通宵嚮應ず大かたは前の夜とおなじ節なれば繹省ぬかくてはや第三日になりぬこの日片埖ハはじめて繹の極むきを委細に良人に告しかば素太夫聞て宵嘆しあな怜悧しくも謀り給ひぬ正禾左金を婿にとらば世は只おのが隨なるべし曩にわれ不思議に寶刀をとり復して本領安堵去たれども近習の列を退けられ正禾殿よ屬られて遠境を戍るをもて威權絶てはじめに似ずいと口をしく思へども昔時にかへるよすがもなしまかるに吾儕よ百倍せる彼大人の通家とならば願は皆稱はん今宵は

席を改めて婿殿よ對面すべきにその要意をし給へと辞せはしく回答すれば片埜はしたり貌して庖丁を招き献立を指揮し魚蔬海の珍味を求めたる庖厨の熱鬧いふべうもあらずとはしるよしのなけれども婿君は今宵も又真吉をのみ倶していとはやくより來給へば味噌平ば糾々たる麻の上下して出迎へ書院へとて誘引ぬ燭奴あまたところ〳〵にすにたれば明きと白晝のごとくにていと晴がましく紅皿いはや出迎へたれど莞爾ともせず夫のかたを背よして只管に嘆息す今宵の饗膳種々手を盡して婢們食配膳す且くして素太夫夫婦は禮服を整へ小素太を將てその席に着と見れば女婿は左金よあらず鼻は横ざまに開きてその大きやかなると柘榴三ッ四ッ束し如く頬は廣くさし出て桃よ眉を書きたるに似たり眼圓に唇る厚く顯ひ細りて齒は長く色黑して傳儒なり是はこれ甚麼人ぞいぬる年素太夫等とこの地の勤番をうけたまはる政田左文太すなはち是ゑ半面すべて鼻なれば人渾名して今道鏡と呼び或は玉の鼻ともいへり年既に三十餘才只顧妻を求れとも人食渠が鼻よ怖ぢ婚緣を結ぶものなし痛しいかな紅皿はその年既よ十九なれとも室の中なる梅より痩たり恙なきこそ幸ひなれと片埜は舌を振ひ素太夫は直と呆れて眼を睜り身を

戻しこゝ聞しにも似ざるかな紅皿が婿は正禾左金のぬしゝと片埜等ゝいひつるに彼ゝ政田左文太也世に巧の鼻今道鏡とて爪彈する廢人を引入れて何かはせんと聲ふり立て罵れば紅皿ゝわが夫の左金ならぬよ胃つぶれて見れば見る隨神樂獅子が化たるごとき目に鼻に腹たゝしく又ゝづかゝしくうたてや堪ぬ苦しみも親の爲身の爲と思ひゑとの仇なりきこはいかにせんと身を投伏て泣しかば片埜ゝ怒れる目尻引立つゝ眞吉が胸前拿て席を鼓やよ媒妁の横着もの吾儕が憑み聞にしは正禾左金とてこそいひつれ似ても似つかぬ惡人のしかも鼻さへ人なみならぬを正々しげに汲引して可惜女兒を疵物にせられてゝ堪忍得ならず初枕の次の日より紅皿が歩行ざま日來よは異なるをこゝろ得がたく思ひしに歩の運びの自在ならぬもあの鼻なればとわりゑ舊の女兒にして返せあな腹たゝし朽をしと恥を忘れて聲高に責罵ゝれば婢們ゝ共に呆れて顔うちまもり左文太は手を叉き頭を低て聞てをり縮下眞吉ゝ騒ぎたる氣色なく呵々とうち笑ひ宣ふ處みな理なし渡鳥がいひ來したる方ざまの戀婿君ゝ則ち政田左文太ぬしなりわが主人左金太郎は近曾妻を亡ひ給へど故ありて世に披露せずそはとまれかくもあれ遊点か書翰こゝよりこれ稱ゝせと非

問きかくまで正しき証據あれば禁しが慨ちならずなほ疑ひたく思ひ給はゝ渡島も隣る比なり彼を上總より呼戻して問せ給はゝ分明ならん抑々此度の媒妁は某しが微力に稱はずよりて密々主人へまうし實は左金が媒妁なれたればまかり歸りて宣ふよしを巨細に主人に說しらせんよしなき怨は受られずと窘められて片埦は再び呆れまどひつゝ拿たる拳のすべしらず威勢脫て阿容〳〵と引退けば左文太は刀搔とり反うちかへしわれは固より息女に意なしそなたより招れしその媒妁は樞家の嫡男正禾主從にそゝのかされて斯とはしらず婚媾三夜さに及ぶ物からその人よあらずとて嫡はるゝのみならず今道鏡玉の鼻と嘲られてゝ弓矢八幡武士の瑕瑾堪忍ならずしかれども一旦泰山と憑みし人を聾果さんは愉よからずさればとて今更に嫌れては存命がたし死すると妻の家只此まゝに自害せん介錯たのむといひも果ず刃を脫て脇肚へつき立んとしたりしかば素太夫片埦左右より慌忙き推禁め憤ばりはさるとならんその死を惜むよあらねども和殿こゝまて自殺せばわれ又後難脫れがたし且この刃を納たまへと賠話つ賺えつ辛じて刀を奪ふて鞘に納め夫婦席の隅に退きて密談諄々時を移せば左文太は焦燥て再び死んと推袒ぎ眞吉は走かへつて此よし主人に告んといふ夫婦ゝこれよ忙まどひて舊の處へかへり坐ゑ左文太に對ひていふやふ實にこの婚緣は正禾左金太政田左文太その名の似たるよ間悞れて既に三宵の好を締ぶ是は俗にいふくさり緣そを今更に正すとす元の素樸になりはせでくらき恥を明くする女兒ひとりを棄んのみ紅皿も恨み玉ふな凡夫婦の情緣は神の結ばせ玉ふといへば思よあはで思ゝぬにあふが一期の貧乏籤ひくに引れぬ時宜となるこゝが則ち神談りよはかられたるよゞあらんずらん何事も親の爲と思ひかへして嫁り玉へ今更よ泣とかはと叱る爺親愈むる母は計根齟齬ふて鬱腹を冷るよしもなくつくゝかもへば缺皿と渡鳥が死せしことを眞吉ゝはや知て主の左金へ密よ告人の中なる馬といふ左文太を媒妁して紅血に幸きめ見せて赤恥を輝するは暗よ怨を復もの歟左金太郎と左文太と唱似たればゝふらかし伎倆の綾をかゝれしなり缺皿はとまれかくまれ渡鳥が入水せずば實にその名の錯誤なりとも又せんすべのありなんものを彼が死せしは親子が不幸斯なるとをゑるよしあらばけふまでも缺血をうち窺てふくべきにと後悔慚愧いへばにゝはねば胸の苦惱くて只眞吉を怨むのみかくて止べきとならねば素太夫は女兒を驗し左文太を慰めつゝ盃

霊を改めて晋柔の刻を結べば眞吉は扇を把て猿楽の一曲よ千秋樂と謡げども久敬はいかなるべき素太夫は苦笑して懸て盃盞を納めけりかくて眞吉は[illegible]なりぬ左文太はいよいよにかよへど紅皿は心地わづらはしとてひとつには得住ぬをなほ嗣さ[illegible]る程に紅皿が腹大きになりぬ二親はこの形勢はいよ〳〵脱るゝ途はなけれど分娩よして送還りなん來年の秋までは[illegible]てなほ隱せども人衆去れりわざみ笑ふ事限りなしとかくする程に今茲は暮て明れば天文十八年の夏小素太は霍乱してその夜暴に身まかりぬ季子は血餘かと唱て親の慈愛み大かたならぬものなるに況てや是ハ只ひとりなる男兒のしかも八才まで健やかに生育たるを思ひがけなく喪ひつゝ二親の憾は比ん物もなし片掘は泣明し泣くらしつゝ魂祭る七月十四日の夜紅皿俄頃に産の氣つきて生れ去は女の兒之面影は醜からず左文太には肖ざりけりとて衆これをのみ歡ぶもをかしそが五十日の祝祭せ去夜左文太はいたく醉てかのが箱所へ[illegible]るとて新利根河へ滾落て死にき嗣べき子なければその家断絶す日來は只疎ましと思ひつる紅皿も錢三緡ばかり遺たらんこゝちして墓参りなどするよ乳母が懷ろよ抱したる赤子を人はよく知りて王の鼻の置土産彼見よと指し焉るいと影護ければ途より乳母を返去たるこれすら彼此に風聲して世の胡盧になりよけり是より先片掘は叔父天目法印を別荘より招きよせてかの婿がねの錯乱を腹たゝしげに説しらせ又計策を乞しかば浮辨只管嘆息し寔に和女郎が推量にたがはじ渡鳥が入水せしを眞吉ハはや知りてそが怨を復さんとて阱穴を造りしならんさばれとて彼壯士は正禾殿の出頭人なれば今更よ何とかすべき過世よりの縁しと思ふて左文太を婿にし給へ好も惡も男子ゑこの外にハ術なしと想えげなく回答しかばいふがひなくてさて止つかくてこの夏小素太は頓死し紅皿が女の子を産たる左文太が入水したる粹ひとつとして吉群なければ鬼を欺く片掘も些は心よはくなりて又浮辨を招きつゝ後の吉凶禍福を問ば聽て蓍を把算木を安排べ占ひ果て眉を顰め小素太が早世左文太が狂死みな是物の祟なりはやくこれを禳はずば後又禍ひありもやせん努慎み給へといふいハるゝ所鞏々と思ひ合する事多かり左文太が新利根川へ滾落て死たるは鍬皿渡鳥が靈よ招かれけん小素太が暴よ死たるも平事にはあらず稚きものよ符やはある鍬皿が母さへよしうねくも祟れる歟と思へば頭よ飾氣つきてをさ〳〵浮辨に秘法行はせて唐草紅皿等が爲に災害消滅怨敵退散と祈るものから

年來は良人にも詣ることを許ざりし鮮衣丁七が墓へ亡日毎に參詣して叮嚀よ香華を手向又鉄皿渡鳥が爲に經を讀せなどするにしば〳〵詣る人ある歟彼墓よ莽草の絶ることなしこは素太夫が手向ならんと推量ればいと妬〳〵て寺僧にこれを尋れば誰とはしらずいとわかき女子ふたり詣る日もあり又一人詣る日もありさるよりて彼墓よ一日も莽草は絶ずといふ片埡は聞あへず毛骨忽地粟起てこはかならず鉄皿と渡鳥が冤魂ならんしからせばこの墓へ女子の詣べうもあらずと心ひとつに思ひ決めていよ〳〵その菩提を弔ぬえかれどもなほ祟れるよや天文十九年の秋の比唐草が良人畑之進は假染の病着より陰症の傷寒とか聞て四肢厥冷しその脈斷るが如し渠は苗頃將監が最愛の一子なれば父はさらなり唐草は晝夜の看病解らず鍼灸藥餌に良醫を竭して周章一家を動せどもいまだ回陽せずといふこの故よ片埡は又一層の患苦を倍ども素太夫いいぬる年小素太郎を喪ひしより只何となく朽折て相譚敵になるとなし片埡はよす〳〵忙まどひてみづから苗頃が第に趣きつゝ両三夜看病し或ときは紅皿を將てもゆきけりかくて八月十五日唐草は親家へ使を遣して醫療の功驗神佛の利益両ながら空からで畑之進が病着大かたおこたりぬけふは床退

の祝義すなるにさせる儲は侍らねど待奉つるなん紅皿の君もろともにといはせしかば片埴ふかく歎びてその使を返すとやがて紅皿をいそがしゐ親子花やかに粧ひして味噌平を供し奴隷には一籠の鮮魚をもたし苗頃が弟へとて赴くにけふは弘法寺の法華經千部供養ありとて參詣群集途去あへず例年には四月の上浣よこの千部の供養はあるなれ其時ならぬはこゝろ得がたしこは必ず施主ある歟臨時の法會なるべけれど親子うち譚ひつゝゆく程に大家の奥方とおぼしくて緋の油簞したる一對の狹箱を先に立しておなじ袋かけたる薙刀をもたし紋天鵞絨よ卷したる鉄乘物左右には老たる弱き從者十人あまり圍繞しつ前駈後從のいかめしげなる幾くといふ限りもなくねりつゝ前面より來にけり片埴等はこれを見てあな目ざましこれも弘法寺詣ならん正禾殿の新嫁御前歟こゝらに多くあるべうもおぼにず避て融せよ無禮なせそと奴隷を見かへりつゝ走り過んとする程に頃しも秋の事なれば只一條なる暖道を半ゝ掛稻に塞れたるきのふの雨に途さへぬかりて踏込ぬ足駄の齒は拔けず心頻に忙る隨に紅皿磴と跌きてさと蹴揚たる溜水彼乘物の戸にかゝりて泥の津漬り落轎添の者從等この狼藉やと散動きて片埴主從を邪取り卷殿の内室令愛